

第四章

戦時体制のなかの緑丘

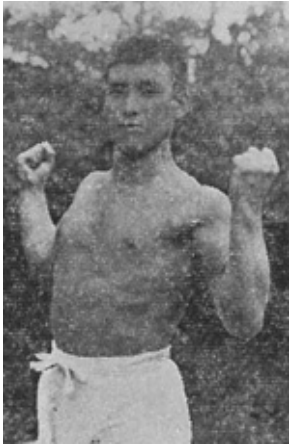
—— 苔米地英俊校長期

第一節 苫米地体制の確立

小樽高商赴任まで

一九三五（昭和一〇）年四月から小樽高等商業学校第三代の校長に就任した苫米地英俊は、敗戦後の四六年三月に辞職し、政界に転身するまで、ほぼ戦時下の舵取り役として強力なリーダー・シップを発揮した。それが可能になったのは、苫米地の個性とともに、校長としては第二代の伴房次郎につづく創立期以来の「生え抜き」であったこと、伴校長時代にすでに図書館主幹（館長）や外国語部主任・教務部主任を歴任するなど、校内で重きをなしていたからである。

残念ながら苫米地の人間形成の過程について知る材料は乏しい。一八八四（明治一七）年二月一日、福井県大野郡大野町（現大野市）に生まれるが、すぐに長野県長野市に移り、一九〇四年三月に県立長野中学校を卒業する。九月に東京外国語学校（現東京外国語大学）英語本科に入学し、〇七年三月に卒業する。履歴によれば、「副科」と



講道館時代の苫米地英俊

して「国語漢文、国際法、経済学」を専攻しており、英語への志向は文学的なものよりも、現実社会でのツールのものにあっと思われる。在学中の〇五年には柔道の講道館に入館し、嘉納治五郎かのうじごろうに傾倒した。現役選手の間、わずか一敗のみの強豪だったという（一年には三段に昇格）。柔道は苫米地の生涯の友となった。

外国語学校卒業後、東京博覧会事務員、東京府通訳や宏文学院英語講師を経て、〇九年四月から母校の外国語学校の講師（非常勤、

断続的)を勤めていた。

小樽への赴任

一九二二(明治四五)年一月八日、苦米地は小樽高商の「商業英語」の担当講師として赴任する。草創期の他の教官と同様に、初代校長の渡辺龍聖自らが各地を歩き、適任者を探すなかで、苦米地に目が止まったのであろう。英語科の先任者には、八木又三と中村和之雄(留学中)がいた。いずれも文学系統の語学教師だった。おそらく苦米地は「文法及作文」中にある「商業通信及諸様式、論説、商業通信」を担当した(週に二〇時間程度)。

まだ赴任から日が浅いためか、『小樽新聞』に連載された「高商評判記」(一九二二年二月)と「統高商評判記」(二三年五月)には苦米地に関する記述はない。その名がまず校内外に喧伝されたのは、スキーと柔道においてであった。渡辺校長の発案でスキーの普及が計画されると、赴任直後の苦米地が新潟県高田に派遣され、オーストリアのレルヒ中尉から技術を学び、三組の用具を小樽に持ち帰った。苦米地は小樽スキー倶楽部の設立者の一人となり、一二年一二月には高商近くで一般向けの第一回スキー術講習会が開かれている。校友会のなかにおかれた柔道部の顧問・師範としての活動もめざましく、同年一二月の校内紅白試合では「苦米地三段対四十八人掛りの活劇」があり、「苦米地師範の妙腕流石に驚くべきものあり、十四分間に三十七人を投げたる技倆鮮やかにて大喝采を博せる」(『小樽新聞』一九二二年一月二日)という。

一九一六年、教授に昇格している。この頃、第二寄宿舎(正気寮)の舎監として、学生たちと寝食をともにしていた。また、講演部の部長として、巡回講演などで学生と一緒に各地を回っている。一七年の夏季休暇には、シベリア・中国方面の修学旅行を引率した。一九年八月から「商業英語研究」のためにアメリカ・イギリスに留学し、二二年六月からは「国際公法及国際私法研究」の目的で滞滞期間を延長し、二二年一月に帰国した。現在では考

えられぬ長期留学であるが、当時においては普通で、大西猪之介・手塚寿郎らもこの恩恵を受けている。

勤勉で熱心な教育と研究の態度は、渡辺校長の信頼をかちえたのだろう、新たな英語教員に外国語学校出身の後輩をすえたり、小樽の英語教育の主力となる浜林生之助を見出してくるなど、英語科を統帥していくことになる。浜林の赴任について、苫米地自ら、「初代渡辺校長の高邁な識見で中等教育界から、駿足の逸材を抜擢して学園の教授陣営を強化することになり、自分が命を受けて駆け廻り、五人の候補の筆頭に挙げたのは、自分であり、留学のために奔走したのも自分であつた」（『緑丘』〔纂目版〕「浜林生之助先生追憶特集号」第三五号、一九六四年一月）と語る。

「商業英語」の確立

「グコレポン」の「苫^{七五}さん」の名はどのように定着したのだろうか。小樽高商にとどまらず全国の高商系の「商業英語」の標準的な教科書として長く用いられた名著『商業英語通信軌範』の刊行は、一九一七（大正六）年四月である（すぐに修正再版が出、増補改訂を繰り返して、六〇回以上の版を重ねた。一九四一年末には「最新増補版」を刊行。戦後の四九年には「復興版」が出、六一年時点で一四刷となっているように、五〇年近い生命力を持った。なお、この出版に先立ち、商業学校用の『英語商業文教科書』を編集している）。小樽高商における「第一回生時代からの多年に亘る教材を纏めたるものが即ち本書」（『序に代へて』）となったが、赴任後数年で苫米地は「商業英語」の教育研究において確固たるものをつかんだといえよう。

後継者の一人、大谷敏治は「英語貿易通信文の学習をもって、商業英語学習の大道と明言した、本邦最初の著作」（『緑丘』〔纂目版〕「苫米地英後先生特集号」第四七号、一九六六年一月）と位置づける。数次の増補は、「時勢は変転する、取引の方法や用語も亦時勢に伴つて変化進展する。著者自身も停止してゐない」（一九二九年の改定版の刊行に際して『緑丘』第四三号掲載の広告文）と述べるように、実際の商業英語の現状や教育上の工夫改善を取り入れたものであり、



『国際貿易活法』 広告 (『緑丘』91, 1935. 12. 5)



『商業英語通信軌範』 広告 (『緑丘』28, 1928. 12. 5)

苦米地自らいう「至誠努力の結晶」によって、「商業英語」界の第一人者の地位を保ちつづけた。

最初の数年間はこの『軌範』に結実する教案によって、刊行後は分厚い教科書（初版でも六五八頁ある）によって、学生たちは油を絞られた。「アコレポン」の苦さん」に苦しめられた（が、実社会で実に助けられた）と回想する卒業生は数多い。一九二六年卒業の中村太郎は、「如何に準備をして宿題を黒板に書いてみても、全く原形がなくなる迄に訂正され批評され、丁度柔道で投げられ続けたような深刻な思い出が残っている」（『緑丘五十年史』）所収と語る。小樽高商の名物教師の一人に数えられたその授業ぶりについては、「一学期は厳しく、二学期からは平易に 実は「思ひやりの深い先生」と評された（『学窓新点描』『東京朝日新聞』一九三三年四月二日）。

苦米地の「商業英語」への姿勢は、『軌範』「序に代へて」中の「富国の闊士たる紳商が社会の表面に立つのは当然のこと」「富国の捷徑、強国の王道ある貿易に従事する人士が商業界の花形たるは勢の然らしむる処」という部分に明瞭で、それゆえに「商業英語通信」は高商教育に必要不可欠のものという。本論の冒頭でも「商業文ハ総テ商業上ニ用ヒル文書類デ、商業上ノ実務、経営ヲ明確、敏活ナラシメ、商事取引上ノ事務ヲ確実ニシ、アラユル誤解紛擾ヲ予防シ且ツ後日ノ証拠ト為スモノデ、又之ト同時ニ広く顧客ヲ需メ、販路ヲ拡張スル使命ヲ帯ビタモノデアル」ことを強調する。渡辺校長のもと、

実務教育中心主義が重視されるなかで、「商業英語」がその中枢的位置を占めることを、苫米地は自負していた。『商業英語通信軌範』ではないが、苫米地の別の簡易な教科書『Commercial English and Correspondence』を、一九四〇年ころの彦根高等商業学校の「商業英語」では一年次の教科書として用いている。担当の巨理俊雄は、「英文作文トノ関連ニ於イテ、稍々高等ナル英文法ヲ研究シツ、商業英語ノ本質ヲ極メメントス。因ミ二本教科書ハ、コノ目的ノタメ、小樽高等商業学校々長苫米地英俊氏ガ心血ヲソ、イデ書カレタルモノナリ」（彦根高商『教授要目』、一九四一年度版）と記している。

もう一つ苫米地の教育研究の実践の結実として、校長就任直後の一九三五年一〇月に刊行された編著『国際貿易活法』（上巻のみで下巻は未刊行）がある。「苫米地ゼミナールに於ける協力と組織との産物」という本書は、教え子の大谷敏治と木曾栄作の整理にもとづき、英語学的研究である『軌範』の「国際貿易の事例」への応用編という性格を持つ。「世界貿易梗概」という状況のなかで、苫米地は次のようなスタンスをとる（以上、「緒言」）。

各国の政治経済の動きが直ちに国際貿易の政策に反映して、貿易の経営技術の上に自づから影響を与へるといふことがその一つ、他の一つは、日本商品の販路に当然に政治経済的圧迫が過重せられて、Made in Japan の進路阻止といふことが必然到来するであらうといふことである。換言すれば、我々は今や、世界経済の不安といふ一般的事情のもとに身を措いて、更に高樹風強しといふ極めて困難な——併し生き甲斐のある運命を担ふてゐる。

苫米地が校長に就任した一九三五年以降の「商業英語」は、大谷敏治と木曾栄作によって担当された。一九三六年度の『教授要目』によれば、各学年毎週二時間あり、すべて苫米地の執筆した教科書を用いている。第三学年の

「教授要旨」は、「第一、第二学年ノ既習知識ヲ基トシテ商用通信文及書式ノ解剖、語義、文意ノ説示、音読、特殊慣用句ノ暗誦、全文並ニ語句ノ暗誦、以上ヲ範例トシテノ商用文ノ作成及ビ貿易手続ノ理解、電信通信ノ説明並ニ利用ヲ教授スルモノトス」となっていた。苦米地によって蓄積された教授法のノウハウは着実に伝授され、学生たちは相当の努力を強いられながらも、確かに実社会で生きる実践的知識と技術を身につけることができただろう。

日本放送協会の札幌からの放送が開始されると、前述のように苦米地は浜林らとともに英語講座を担当し、道民に親しまれた。

国際事情への発言

「商業英語」への研究が深まるにつれて、世界の経済社会情勢にも関心が高まり、さらに三年間の海外留学を経て自らの見聞を深める機会を得た苦米地は、「商業英語」以外に「貿易論」や「海外経済事情」を担当する。その授業内容は不明ながら、北海道における数少ない海外事情通として、さまざまな社会的な発言を求められたようである。たとえば、アメリカで移民排日の世論が強まった一九二四（大正一三）年には、小樽新聞社主催の「対米問題講演会」で、「日米の国交より見たる日本の将来」について講演している。そこでの苦米地の主張は、排日の動きを批判しながらも、東洋の平和を保ちつつ日本が盟主となるには、英米、ドイツ、ロシアとも協調提携を図り、何十年でも「隠忍して時機の来るを待」つべき、という慎重論である（『小樽新聞』二四年六月二九日）。

文部省からの依頼を受け、一九二七（昭和二）年以来、毎年、小樽高商で開講した市民向けの「成人教育講座」で苦米地は日本の国際関係に触れた講義をおこなっている。自らまとめた要旨によれば、三四年には「国際経済の現況」と題して「各国の経済封鎖政策並に我が国の東亞ブロック論を批判し、自由経済の必要を強調し」、三五年の「岐路に立つ日本」では「漸く濃厚ならむとする軍国主義、所謂一九三七、八年の危機に立つ日本の姿を批判し、

「国際協調を主張した」という（以上、「公職審査調査表綴」〔本学所蔵〕によるが、この資料の性格上、「国際協調」が強調されている嫌いはある。「商業英語」の第一人者らしく、開かれた「商工業立国」論を持論に、日本の国際的孤立を招く動向には批判的である。

しかし、それは当時の一般的な国際協調の「良識派」以上に出るものではなかった。「満州事変」についても、「日本はこの十年余り随分忍ぶべからざる屈恥を忍ばされ、その上国家の生命線が脅かされ」ていたため、自衛権を行使したのは当然だと肯定し、さらに現状を「名は経済封鎖といはれないでも金融圧迫、貿易阻害、日貨排斥、関税引あげ、信用制限その他真綿でくびをしめるやうなやり方で日本を苦しめ、今でさへ財政難で苦しんでゐる日本を困らせて欧米に屈服させやうとしてゐることは明瞭」〔「聯盟盟退後の「日本」と「世界」〕「小樽新聞」一九三三年四月九日〕と論じているのである。ファナテックで国粹主義的な論調に組みすることはないが、全体として日本の中国侵略の方向を支持し、協力的である。こうした国策への順応性は、校長就任後、その要請の強まりとともに、高商教育の戦時化を決定づけていく。

「カミノリ」校長の登場

伴房次郎校長の在任期間が一〇年を過ぎるところから、交代が噂されるたびに、後任には常に苦米地の名があがっていた。それでも一九三五（昭和一〇）年の伴から苦米地への交代は、明年の創立二五周年の後と予想されていただけに、四月三日の『東京朝日新聞』は「突然更迭の発令あり、予想されたことながら一般は寝耳に水と驚いた」と報じた。また、『緑丘』第八七号（五月二五日）の見出しにも「学園の嵐 自由教育の慈父 伴校長突如勇退さる」とあるように、教職員・生徒を驚かせたようである。

現在の制度と異なり、帝国大学を除く戦前の高等教育機関の長は文部省の任命によるものであった。苦米地の任



苦米地英俊校長

命と同時期、東京女子高等師範（現お茶の水女子大学）学校長には文部省普通学務局長が、浦和高校（現埼玉大学）長には同宗教局長が就任するように、文部官僚が就任する場合がある。小樽の場合は、おそらく「緑丘」における結合の意思の強さが内部からの昇格を実現させただろう。ただし、その人選には文部省の強い意向が働いた。内部からなら筆頭教授であった英文学の中村和之雄の昇格もありえたが、高商教育には「商業英語」の苦米地がより適任と推したのである（中村は勇退し、しばらく講師として残った）。文相松田源治は、伴、中村にそれぞれ直接談判し、苦米地就任を応諾させたという（神部健之助「校長更迭の経緯」『緑丘』（幕目版）第六三号、一九六八年）。四月五日の『小樽新聞』は、「スクラムを組んで 苦米地新校長擁護 期待される少壮教授連の動き」として、次のように観測している。

小樽高商校も初代校長渡辺龍聖氏の創業時代を経、二代目伴房次郎氏の守成の時期もこゝに終り、進歩革新に向ふ三代目苦米地校長を迎へたが、温厚篤実の伴氏の後に、鋭利刺刀の如き苦米地氏の就任は進歩革新の上その人を得たるものと称せられて今後の期待を寄せられてゐる、（中略）しかしてなほ一層の実績をあげる条件としては同校出身者のいはゆる少壮教授連がこれを支持するといふことである、これ等少壮教授連は何れも新校長の薫陶を受けたもの、みであるから、その点杞憂にも感じらるゝが、同じ恩師でも伴氏の場合と異り、時代的に接近してゐるだけ気持ちの上相当距離のあることは否み難いので、これ等出身教授連の動きが今後成否の重大なる分岐点と言はれてゐる

ここで「少壮教授連」とは、高商出身者とされていることからみて、手塚寿郎・南亮三郎・糸魚川祐三郎・大野純一・中野清一・木曾栄作らを指すのであろうか。「スクラムを組んで 苫米地新校長擁護」という見出しや後述するようなすばやい校内機構改革への着手を考えると、伴校長時代の春風駘蕩たる校風が居心地の良さを生む反面、覇気に欠けた沈滞気味の雰囲気がただよいつつあることに、「少壮教授連」は焦慮を抱きつつあったといえるかもしれない。苫米地が語った「学園を朗かにし、善く内外呼応して社会的活動をなし、進運を持続する必要」、「時運に適応した施設を進めること」という「新校長就任の辞」にも、暗黙裡に現状への不満や改革の意思を読みとることができよう（『緑丘』第八七号）。文部省がそうした校内に漂う気運を察知したのかどうかは不明ながら、絶妙のタイミングの校長交代だった。

教導部の設置

「小樽高商の新校長苫米地英俊氏は、この数年来学園を憂鬱にしてゐた暗雲一掃のため外科手術的な改革方針を断行することになり、既にその一部に着手した」と報じるのは、一九三五（昭和一〇）年五月五日の『北海タイムス』である。「学園を憂鬱にしてゐた暗雲」とは、第一に「俸給が安く洋行が困難では少壮教授の浮ぶ時はなく、自然人材は逃げ、秀才は寄り付かず、象牙の塔に腐りつ、あること」、第二に「学校が北に偏在するため、田舎学校になつて優秀な生徒が集まらぬ傾向が濃化しつつあること」、第三に「高商が各地に設置されるため卒業生の販路が荒され、一流銀行会社に対する従来の秀才集中主義が行詰り、新分野の開設を必要とするに至つたこと」とされる。

第一は教員の問題、第二は入学者の問題、第三は卒業生の問題であり、いずれも小樽高商の外側から湧きあがった暗雲に巻き込まれた事態ではある。創立から一五年余りは先行する高商として、北辺の学校ゆへの地理的不利を凌ぐ優位性を保持していたが、一九二〇年代半ばまでに各地に高商が設立されると、相対的にその優位性は揺らぎ、

「学園を憂鬱にしてゐた」。創立二五周年を目前に控えて、「全国の高商の先輩校もその祝賀の日に挽歌を歌はねばならない危局に直面」しているにもかかわらず、その打開の気運が盛り上がり、憂鬱気分陥つたままであることに、「少壮教授連」の危機感があつた。

苦米地新校長は就任直後、まず学内の機構改革を電撃的におこなつた。「教育ノ能率ヲ増進シ、訓育ノ徹底ヲ期スルタメ」として、従来の教務・監生部制を廃止して、教務課と生徒課を新設し、その上に教導部を設けた。本来、教務部と監生部は「密接ナル関係ヲ保持シ、互ニ協調シテ事務ノ遂行ヲ図ルコト緊切ナル」（以上、「秘書書綴」、一九三五年）という文言があることは、伴校長期に両部の間に何らかの齟齬が生じることがあり、調整を図る必要があつたのだらう。改革に関する記事のなかで、『緑丘』第八七号では「学生は従来の陰鬱なる制度に拘束されてゐた折柄、此の新組織に明朗さを期待する処大きくその成行を注目してゐる」と評している。監生部・生徒主事の抑圧的な姿勢に学生の不満がたまつていたと推測される。

教導部長には首席教授となつた卜部岩太郎が、教務課長には糸魚川、生徒課長には浜林、さらに図書館主幹には手塚がそれぞれ任命された。この校内行政の一新により、苦米地新体制が形成された。

なお、この改革に先立ち、二月の学内思想事件の発覚にともない、「左翼的思想傾向ニ一般ノ留意ヲ払フト共ニ、進デ国体觀念ノ闡明、国民精神ノ發揚ニ努力セシメ、以テ生徒訓育ノ徹底ヲ期シ度」（同前）として、生徒主事の増員が図られ、浜林が新たに任命された。それに関連して、「教導部長ニ専任生徒主事ヲ充ツルコトハ教務課ヲ強圧スルノ嫌アリ、一面教導部長ガ生徒課ニ対シ訓育事務ヲ円滑ニ運用セシムルタメニハ、生徒主事ヲ兼務スルコト極メテ必要ナリ」（同前）という判断から、生徒主事としては生徒課長たる浜林が主で、卜部は副の扱いとなつた。浜林が生徒課長になつたことは、学生より「大なる好評と期待」（『緑丘』第八七号）をもつて迎えられた。また、生徒主事補も三箇清から渥美静雄に代わつた。

校内機構の一新

一九三五（昭和一〇）年四月一〇日、教導部設置にとどまらず、苦米地は矢継ぎ早に学内機構を一新した。まず、校長が任命する学科主任の設置である。「外国語科」「数学科」「法律学科」「商業経済学科」「商業実践科」「商品実験科」「企業実践科」のそれぞれに学科主任を置き、教務課の委嘱により、「当該学科教授要目二関スル件」や「当該学科授業ノ分担、統一、連絡二関スル件」を審議する。さらに入試問題に関することも担当する。現在の教務委員会・入試委員会などに相当しよう。



教務課

会議規程も整備された。渡辺・伴校長期については不明だが、評議員会議・教官会議・生徒課委員会議が設置され、それぞれの役割が定められた。「評議員会議ハ校長ノ諮問ニ応ジ、校務ニ関スル緊急ノ事項ヲ審議」するもので、校長が出張中などの緊急事態の際にも開かれる。「評議員」は部長・課長のほか、教授のなかから校長が任命する。教官会議は現在の教授会に相当するもので、「校長ノ諮問ニ応ジ、生徒ノ教授及訓育其他、校長ニ於テ必要ト認メタル事項ヲ審議ス」る。会議メンバーは、専任講師以上である。いずれも議長は校長であり、任命権や議題の審議提案権も校長にある。絶大な権限を有していたことになる。

「生徒課委員会議」は「生徒訓育ニ関スル特殊事項」を審議する場で、生徒課長・生徒主事と寄宿舎寮監で構成された。現在の学生委員会に相当し、学生の処分などがこの委員会で審議された。

さらに、三八年の新年度から「組主任制度」が設けられた。「緑丘」

第一一〇号（三八年四月二五日）は、「今迄の如く学校内の事情に疎き（うと）一年生をして指導し、更に教授と生徒の人格的接触により教養向上に資せん」と報じるが、実際には戦時下の統制的な機能をもった。第一回組主任会議での暫定的な決定によれば、「当該組を監督し、秩序を維持すること」「生徒課及び教務課と連絡を取り、所属生徒の訓育にあたること」が任務とされた。また、「毎週一回、当該組の出席簿を点検する」役割も持たされた（以上、「緑丘三十五年史稿」）。これも校長の任命であった。この制度は、四二年度からは学年持上がりとなった。

苦米地校長期の職員の状況を一瞥しておこう（文部省往復綴）。一九四〇年度でみると、教導部では「卒業生就職二関スル事務、生徒警備隊二関スル事項」を「雇」一名が担当する（松田新はすでに退任）。教務課は山村良三書記と「雇」三名、生徒課は片岡喜右衛門書記（兼助教教授〔教練担当〕）と「雇」一名、庶務課は高橋辰治書記（主任）と「雇」三名、会計課は山内松吉ら書記二名と嘱託一名、「雇」三名、図書館は木田橋喜代慎書記と嘱託一名、「雇」三名、商品実験室に「雇」二名、商品館・商業実践室・兵器庫に「雇」各一名で、総計二八名という人員である。現在の事務局長に相当するのは、教務課主任の山村良三である。「雇」の過半は女性で、主に佇立小樽高等女学校（現在の小樽桜陽高校）に推薦を依頼して採用していた。二五円から三〇円程度の手当である。

研究基金の募集

優秀な教員や学生が集まりにくくなってきているという事態を一举に打開するために、新校長は就任早々、創立二五周年の記念事業として二〇万円の研究基金募集の方針を打ち出した。「専門学校は行政官や司法官と異つて平均俸給も低く、且つ予算の融通性に乏しい、随つて年数（しだが）を閲するに随つて財政的の行詰りを生ずる、この結果勢ひ沈滞の気分を醸成する」という構造的な問題に、在外研究の機会の減少も加わった結果、現状のままに推移すれば「本校は地方的の高商といふレベルに墜（お）ちるのみ」（『小樽新聞』、三五年五月六日）という苦米地校長の強い危機感に発する大

胆な施策だった。

一九三六（昭和一一）年度「秘書綴」の「在外研究員ニ関スル調査」によれば、教授では現員二名中一名が在外研究「未済」だった（一名が在外研究中）。

こうした状況に苦米地は、小樽独自で教員を海外に留学させるために一五万円、全国から数名の優秀な学生に奨学金を与える制度の創設に五万円を見込み、この基金の利子という果実の活用を計画したのである。そのために同窓会員からの寄付を仰ぐとともに、『商学討究』の廃刊による一〇年間の刊行費積み立てによって、二〇万円を捻出すると計画された。実は『商学討究』刊行は以前から財政的行詰りに直面し、苦米地や編集委員らにより再検討がなされはじめていたが、苦米地は校長に就くのを契機に、大胆な改革を打ち出した。

『商学討究』の刊行費の三分の一は校友会費からの支出であるため、校友会理事会で校長の提案がなされると、「学生暗として声なく、学園将来の学的水準を示す商学討究の事実上の廃刊と言ふ現実上の問題の板挟み」となった。ここで『商学討究』編集員の南亮三郎が「声涙共に下る」熱弁で校長提案を支持したため、「遂に満場一致可決」された。校友会総会では「ノー、ノーと言ふ者」もあつたが、大勢は賛同に決した。それでも、学内には「暗澹の気重く立こ」（『緑丘』第八七号）めた。

さらに校長は就任早々に自ら各地の同窓会支部なども歴訪して協力を求めた結果、同窓会でも臨時総会を開いて研究基金の拠出を可決した。それでも同窓会員のなかから『商学討究』廃刊を惜しむ声は根強く、東京・神戸・大阪各商科大学在学中の緑丘卒業生は「内外共に大なる役割を演じ来つた商学討究を永遠の将来のため、學術振興の爲めの基金調達の犠牲に供する事は、右手にて築き左手にて之を崩壊し、恰も己が肉の一片を切りて己が栄養に充てんとするの矛盾に似たものがある」という書簡を送りつけるほどだった。このため、同窓会ではこれまでの刊行費負担とは別に三〇〇円の補助を出すことを決める。

こうした存続の声にこたえて、刊行頻度や発行部数の大幅削減などにより『商学討究』の刊行は継続されることになった。『緑丘』第八九号（三五年七月二五日）掲載の、編集委員の手塚・大野・南の連名の「謹告」により、「種々熟議の結果、今後なほ年々支出せらるべき本校買上予定金六百円を土台として、最小限度の、但し余り見苦しからざる紙幅をもつて刊行を続けてゆくこと」という改革の方向が示された。年三回の刊行を二回とし、同窓会員・校友会中の講読希望者には予約・実費販売とすること、学外からの寄稿ができなくなることなどが、大きな変更点である。

学術研究基金については、早くも三五年六月一日現在の申込状況が『緑丘』八八号（三五年六月三〇日）に報告される。苦米地校長の千円を筆頭に教職員の大半が申込に応じ、総額では一八一名、総計一万七千円以上にのぼったが、実際の払込金額はまだ五百円を越えた程度だった。その後も戦時下を通じて基金募集は継続されたが、各地の同窓会の努力にもかかわらず、目標額に達することは困難だった。現在確認しうるのは、一九四四年三月一五日現在で累計四万五千円余（実際の払込金額）となっている。

なお、三六年二月、卒業を控えた三年生が新たに「学術研究助成基金」を募集することになり、「一口金二十円とし、新卒業生全部が少くとも一口の申込をなし、原則として卒業の際十円を納付し、残額十円は卒業後二ヶ年以内完納の事」（『緑丘』第九号、三六年三月五日）を取り決めた。二月末までに二一四名の応募があったという。

『緑丘』第九一号（三五年二月五日）の苦米地「研究基金に就て」によれば、基金は同窓会宛に寄付され、運用も法人化された同窓会がおこなう。この基金の運用利子内の範囲で支出されることから、当初の目的であった教員の在外研究派遣は目途が立たず、実際にも適用者はいなかったと思われる。それでも「研究の発表―商学討究の刊行、調査論文の発表」「実証的研究―研究資料の蒐集、研究旅費に要する費用」「図書費―外国新聞雑誌を含む」などのために用いられ、全体として研究体制の整備拡充に貢献した。やはり基金の集まり具合から、予定された学生への



講師 松田新

奨学金制度は実現しなかった。

苦米地は就任直後の試みの一つに、第一回卒業生で同窓会幹事の松田新（保除代理業）を「商業学及商業実践」の講師に採用したことがある。教導部において就職斡旋などに実社会の経験を發揮させるとともに、同窓会との連絡を密にしようとした。

就職に関して、苦米地は「人材の集中主義を排し、各方面に散布し、且つ国家興隆の中心は中小工業家の健全なる発展に依存する」として、「是等の各層にも多数の卒業生を網羅し、鞏固なる地盤を確保したい念願」（『小樽新聞』、三五年五月六日）をもっていた。このため、自ら「卒業生の就職口の開拓」をめざして、三五年九月から一月にかけて「満州国」・朝鮮方面などに長期出張もしている。「満鮮旅行を了へて」（『緑丘』第九一号、三五年二月五日）のなかで、苦米地は「帰還後にこの方面に送り出し得る人々の払底を痛感した」として、次のように記している。

満州は新国家が成立後間もなく有望な新事業が新たに興隆しつつある。若し有為の青年が今日どしどし乗出しで適所に地位を得るならば二十年後には必ず立派な花がさくことであらう。今が潮時である。而も彼地には現在既に立派な地位を占め、又は鞏固な地盤を築き上げてゐる人々が同窓会員中に尠くない。何も躊躇すべき理由はない。緑丘精神を携へて乗出すべき時は今である。

満鮮の気候風土は北海道に酷似してゐる。小樽で三年間鍛えた人の恐怖すべき何物もない。匪賊を恐れる人もあるかも知れない。併しそれは問題にするに足りない。

こうした新天地への飛躍の叱咤は、後述するような「語学乙類（東亜科）」の設置につながる。なお、苦米地の就職斡旋の個々の学生にまでおよんだ周到な配慮については、多くの卒業生が言及している。

「学理」と「応用」の統一

一九三一（昭和六）年の創立二〇周年は経済不況の社会情勢に配慮して学内中心の質素な取組みにとどまったが、三六年の創立二五周年記念は大々的に挙行された。その「記念事業大綱」を予告する『緑丘』第九三号（三六年五月五日）は、「学園の歴史を祝ふと共に、今や勃々^{ぼつぼつ}として燃ゆる学園飛躍の気運を益々増長せしむる有意義なる催しをなすべく」という意気込みを伝える。苦米地新校長のもと、暗雲を一掃して、緑丘の「進歩革新」に向かう大きな契機としたという意欲が高まっていたのである。それは、当然にも苦米地の「創立式拾五周年を迎へて」という『緑丘』第九四号（三六年七月五日）の巻頭文において、「吾人はこの四分の一世紀を契機として、清新宏大なる気分を以て学園の向上発展を企図してゐる」と語られる。では、その「学園の向上発展」の方向とは、どのようなものだったのだろうか。

苦米地は「高等商業学校は実業に従事し、各自の職業を通じて国家奉公の誠を尽すべき人格者の完成教育を授くる機関である。高等商業学校は職業教育を授け、卒業生を就職せしめる目的のための存在では断じてないのである」としたうえで、さらに次のように展開する。

晩近学校教育の實際化の声が高い。その實際化とは何を意味するか、少々^{やや}明確を欠く点がある。併し、吾人の見を以てするならば、高等商業教育は完成教育であり、大学への階梯ではない。大学と高等実業専門学校とは質的相違を持つが、程度の高低に差異を認むべきでなく、高等実業専門学校の卒業生は、産業界の中堅及首脳

部を組織し得る人格、健康及才能を有する人材を養成する所である。随つて、高等商業教育は目先に役立つ人間丈けを目標としてはならない。教授は常に一方に研究を続けつゝ、他方教授に従事し、各自担当の学科目に従つて、或は学生の啓発を目眼とし、或は又学生に実地の知識を授け、互にその分限を守り、他を侵すことなき必要がある。これら相互間には軽重の差は断じてない。各独自の価値を有するもので、理論的学問は思考力を与へ、変化極りなき新事態に直面して之を裁断し、工夫を凝し、改良を加へる事に役立つものである。か、る教育は教育の実際化の声に依て歪めらるべきものではない。寧ろこれこそ新時代に応ずべき人材養成に欠くべからざるものである。と同時に、学生の充分消化し得ざる内容を盛り、又は抽象理論に終始して応用の才を養ふ域に達せざるものは百害あつて一利ない。この方面に携はる責任者は自己の研究の深まるに従て学生の能力の測定を過ち易いものである。

實用を主眼とする学科目に於ては、その本旨を先づ徹底せしめ、然る後に千変万化せる実務に応じ、直ちに之を理解し、之を応用し得らるゝ程度の理論を教授する必要がある。而して、そこに吾人は真の實際化を見出すのである。

学理を第一義とする前者、實用を主眼とする後者、その行き方は異なるが、価値に相違はない。加之、この兩者相俟つて初めて完全なる高等商業教育の任務が果されるのである。若し此事を度外視し各使命の外に逸走し、又は時代の要求に追隨して、目先に役立つ教育に墮するならば、或は現代の一部の歛心を買ふことは出来得やうが、次の時代には必ずこれを悔いるときが来やう。

この点に付、本校が画一を避けて、而も統一に就き、和衷協同、当校の使命に熱誠を傾け、独自の天分を守り、特異の本領を發揮してゐるのも我が学園の一異彩である。

堂々たる論である。大学と高等実業専門学校との間に優劣はなく、「高等商業教育は完成教育であり、大学への階梯ではない」という立場は、初代校長渡辺龍聖の持論を受けついでものである。そのうえで、「学理」を第一義とする学科目と「実用」を主眼とする学科目の間にも「軽重の差」はないと断言する。かつての大西猪之介の経済哲学や手塚寿郎の純粹経済学が学内外から尊重・評価される意義が、ここでは十分に理解されている。ただし、「抽象理論に終始して応用の才を養ふ域に達せざるものは百害あつて一利ない」と、学理のための学理に陥ることを戒める。一方、主眼が「実用」にあるものも、それが応用に堪えうるような「理論」を備えていることを求め、そこに高等商業教育の「真の實際化」を位置づける。そして、この両者が「相俟つて初めて完全なる高等商業教育の任務」が達成されるとするのである。

ここでは、小樽高商が四半世紀を閲するなかで「学理」と「実用」の統一という「特異の本領」を發揮してきたことが意識的に確認され、社会からの「教育の實際化」の要求の高まりのなかで、「目先に役立つ人間」の養成に傾くことになりがちなる傾向に警鐘を鳴らす。「人格者の完成教育を授くる機関」としての再自覚こそ、「学園の向上発展」の方向であつた。ただし、苦米地のいう、その人格形成とは「国家奉公の誠」と固く結びついていた。

実は苦米地はこれに先立ち、年頭の『小樽新聞』でも「教育の實際化」について論じていた。すなわち、「高等教育の価値は機械的・日常的の事務を支障なく処理し得る能力を有するにありとする以上に、事物に対し明察果斷、新事態に処して判断を誤らず、複雑難解なる問題を巧に分析し、真相をとらへる能力を有するところにある。教育を真の意味において實際化せんとせば、単なる暗記学問の方法を執らず、基本的のケースを各方面に亘つて討究し、頭を練る演習が極めて必要である」（「教育に関する若干の問題」、三六年一月六日）と。

この校長の論と照応する学生の論は、『緑丘』第九四号の部説「二十五周年記念を迎へて」である。ここでは「学人の使命は常に社会の積極的メンバーたる事にあらねばならぬ」とするとともに、「北海道なる土地と気候とから生

ずる質実なる学風」を希求し、「中央に比しカレントな研究に遅るゝ丈、我々は健実なる研究を理論に献げ得るし、又献ぐ可き」とする。さらに語学についても、「学生のインターナショナルな智識の源泉たる事に於て又我々の進む可き大特色でなければならぬ」と論じる。「応用」よりも「学理」に傾いているが、「質実」「健実」が用いられるように、「目先に役立つ教育」とは一線を画したものが求められている。

一九三九（昭和一四）年一月、文部省から来る紀元二千六百年における「教育、学芸、宗教、其ノ他文化風教ノ為ニ貢献シ功績顕著ナル者」の内申を求められて、小樽高商は渡辺龍聖・伴房次郎・栗林徳一（後述）について、苦米地校長と卜部岩太郎を選定し、報告した。そのうち、苦米地に関しては「商業英語ノ権威者トシテ推重セラル」とするほか、現校長としての実績についても「教育ノ制度方針及内容ヲ鋭意刷新シ、国家社会ノ期待ニ副ヒ、克ク部下ヲ扶掖誘導シテ、職員生徒ヲ融合セシメ、産業報国ノ精神ト実業青年ノ気魄トニ意ヲ注ギ、商業教育ノ実績著々見ルベキモノアリ」とされた（ほかに、「体育」、中等教育の「学校指導」、公民会やラジオなどの「社会教育」についての功績がつづく〔「秘文書綴」、一九三九年〕）。

校長就任から四年半が過ぎ、強力なリーダー・シップの下に苦米地体制が確立していたといえる。

創立二五周年記念

苦米地体制の確立の過程で、一九三六（昭和一一）年には二つの大きな出来事があった。その一つが、周到な準備をへて、七月五日から一〇日まで実施された創立二五周年記念行事である。

これに先立ち、初めて「校旗」が製作された。「仕立ハ純白ノ絹地」で、中央に「本銀糸縫ツブシ」の「八咫ノ鏡」を置き、その中心に「本金糸縫ニテ本校徽章」を配する（「緑丘三十五年史稿」。大国屋が請負い、京都の西陣で製作したという。七月四日には「入魂式」がおこなわれた。

創立二五周年の主な行事は、次のように多岐におよぶ。

七月五日 記念式

学校公開（七日まで）

記念文化講演会（市議事堂）

フランス文学における不安の流れ

ナチスとロマンチズムの復興

民族と群衆

近代英文学を通して観たる信仰の動揺

六日 記念学術講演会（七日も）

全体主義における職分原則について

通貨革命としての管理通貨と通貨管理

同窓会慰霊祭

同窓会祝賀会

七日 記念経済講演会（市議事堂）

ダンテの経済観

馬場財政と租税体系改革

八日・九日 外国語劇大会

一〇日 運動会

松尾正路

三箇 清

中野清一

浜林生之助

上田辰之助（東京商大）

高島佐一郎（名古屋高商）

上田辰之助

高島佐一郎



高商旗

園遊会



二十五周年記念式典

記念式典には、渡辺初代校長・伴第二代校長のほか、文部省実業専門局長、北大総長、長崎・大分・和歌山などの各高商校長ら、北海道・小樽市関係者ら多数が来賓として参列した。学校公開では「商業実践科」「貿易展覧会」「貨幣金融展覧会」「満州概況展覧会」などの部屋が設けられた。たとえば、「商業実践科」では、「商業組織ヲ総合的ニ理解シ、経営上ノ概念ヲ得、勤勉、協調等ノ商業道德ノ一端ヲ訓練セシムル為メニ、工学実践及商品実験ト共ニ初代校長ガ創案設置サレタモノデ、本校ノ特色ノ一デアリマス」という趣旨で、売買・保険・倉庫・運送・金融などの手続きの実習風景が展示された。

外語劇大会は「支那語」・ドイツ語・英語・ロシア後・フランス語劇が上演された。久しぶりに運動会は山上グラウンドを会場に実施される予定だったが、雨のため中止となった。

「二十五年の歳月を経た小樽高商には二つの特徴がある」とする七月六日の『北海タイムス』が興味深い。すなわち、第一は「故大西猪之介氏の流れを汲む学究的方面で、幾多の俊秀を我国社会経済学界に送つてゐる」として、手塚・南・中野の名前をあげる。第二は、「彼の有名な軍教事件、プロ文壇の故小林多喜二氏、北方文芸等々の流れ」で、編集部や講演部などの「文化団体の活躍は期待すべきもの」とする。小樽高商は、外部からは一般的にこのよ



二十五周年記念展示

うに見られていたことを示そう。

『緑丘』第九四号は、「創立式拾五周年記念回顧録特輯号」と「創立式拾五周年記念特輯号」の二本立てで発刊された。前者には渡辺・伴や元教員・卒業生らの回想が載る。後者には上田辰之助、赤松要（名古屋高商）、高田保馬（京大）の寄稿のほか、「学園再認識論」への卜部・南・中野の寄稿、「先輩座談会」、校友会「各部座談会」、「独立団体座談会」などが掲載される。

「創立式拾五周年記念回顧録特輯号」から、緑丘の姿を彷彿とさせる文章を引こう。かつて教鞭をとった高島佐一郎は「貧しき追想と富める学園陣容の仰観」のなかで、「この学園が、如何に美しい倫理的協同体」であったかとして、「教授団も、卒業者団も、また学生団も、その成員おのおのは自ら人格の自主自律性の保持者であるとともに、自律のうへに協調し協同して、より高き目的理想を追求するのだから、その団結には、自覚的なもの有機的なもの生命的なもの躍動が強く感じられる」と述べる。これと同様なことは、一九三二年卒業の白川友正（緑丘学園よ）も言及する。「緑丘学園の三ヶ年間は、私達同期生にとつての生命の快よい巢であつた」として、その第一の理由に「師弟の融和」をあげる（ほかに「学園の自然美」と「図書館の完備」をあげる）。苦米地校長はそれを「和衷協同」と評した。

一九二六年卒業の西川正巳は「思ひ出」として、「卒業後満十年

と云ふ歳月が流れ去つたにも拘らず、丘の三年の生活が恰も昨日のその様に鮮かに今も総じて楽しい記憶として眼前に髣髴するのは何が故であらうか。格別取り立て、花々しい事のなかつた代りに自分の三ヶ年の小樽の生活は遠く故郷を後に生活するのだと云ふ感じを起させない迄に、周囲の人々の深い愛情に於て恵まれてゐた事を思ひ起さずには居られない」と記す。

三五年に卒業したばかりの平間義は、「商業実践で苦しめられた貸借対照表は当時は却々バランスが取れなかつたけれど、緑丘と我々のバランスは年と共に黒字を増して行く様だ」（「頑張ったあの頃」と、実社会での実感を込めて語る）。

秋には『商学討究』の特輯として『創立二十五周年記念論文集』が刊行された。経済・社会編の六論文、商業編の六論文、そして商品編の二論文から成る。

なお、創立三〇周年記念式は一九四一年一月一〇日におこなわれている。対米英開戦が迫るなか、「宮城遙拝」、戦没者への「黙祷」、「君が代合唱」、「勅語奉読」という戦時色が濃厚だった。苦米地校長は式辞で「国体信念ノ確立ト人格陶冶ヲ経トシ、学理ノ實際化、地方化ヲ緯トシ、産業報国ニ帰結シ、以テ臣道ニ徹底シタ実業人タラシムベク煉成スルコトヲ理想トシテ居リマス」と述べ、卒業生四千名は「日本全国ハ勿論、東亜共栄ノ善隣、満支南洋ヨリ遠ク海外各地ニ分布シ、我ガ産業貿易ニ活躍邁進シテ居リマス」と誇った。

行幸

苦米地校長は一九三六（昭和一一）年三月の卒業式の告辞のなかで、「我が学園の教育綱領たる『国体觀念の確立』を寸刻も閑却すること勿れ、神聖無比なる皇室、宏遠悠久なる国家に対する絶大なる尊崇と卓越せる矜持とを堅持し、日東帝国の忠良なる臣民たることに徹底せよ」（『小樽新聞』一九三六年三月六日）と述べていた。それは、伴前校長が



行幸

三四年三月の卒業式告辞で「天壤無窮ナル皇^{こう}祚^そト万邦無比ナル国体ノ尊嚴トニ対シテハ、絶対ノ確信ト崇敬トヲ把持シテ無上ノ誇リ、至高ノ誉レトスル念慮ヲ失フコト勿レ」（『緑丘』第七八号、三四年三月二六日）と述べていたことに匹敵する忠君愛国主義である。三五年の天皇機関説問題に発する「国体明徴」論の高まりにも影響されただろう。

そして、これをさらに緑丘全体で昂揚させたものが、一〇月九日の昭和天皇の行幸だった。毎年恒例の陸軍特別大演習を大元帥として統監する前後の地方行幸において、産業施設や学校への行幸を常としていた。三四年の群馬県における陸軍特別大演習の際には、桐生高等工業学校（現群馬大学工学部）への行幸があった。

三六年の北海道行幸では、室蘭・旭川・釧路・根室・帯広を回った後、北大農学部を大本营として演習を統裁したあと、北大などの行幸を経て、一〇月九日、小樽駅に到着、小樽市公会堂について、小樽高商に行幸し、その後、北海製罐を見学後、小樽港から函館を経て帰途につくという日程であった。

本館二階において、苫米地校長、渡辺元校長らを「単独拝謁」後、浜林ら二九名の「列立拝謁」、校長の「校務奏上」、玄関上バルコニーからの「剣道野試合天覧」、商業実践室・商業擬営室などの「巡覧」という四〇分ほどの行幸であった。「校務奏上」では「人格ノ養成」や「商業実務ニ関スル知識、技能ノ涵養」に努め、「産業ヲ通ジテ皇国ニ奉仕セントスル精神ヲ扶植スルコトヲ期シテ居リマス」と述べて、特別な施設として商業実践室や実践工場、さらにスキー・シャントエや室内プールの設備にふれている。天覧室には北海道の立体模型「北海道の貿易」や北洋漁業の立体模型「北進日本の開拓者」などが展示された。

翌年以降、この一〇月九日は行幸記念日とされた。また、三八年一〇月、「聖徳無辺」の文字を刻んだ記念碑が建設され、『行幸記念誌』が刊行された。その『記念誌』の「欽仰詩文集」から引こう。

曩なほに本校創立二十五周年記念の祝典に会し、尚又今回千載一遇の光栄に浴する吾等の感激は如何ばかりぞ。開校以来四半世紀、質実剛健、大家族の校風に培はれた本校は、本日^{を以て}一段と輝きを増したのである。思へば北方唯一の実業専門学校として、北方文化の開発、貿易振興上貢献すべき義務を有し、且又為して来た吾々は、本日の感激、榮譽を深く肝に銘じ、益ます自重じゆうじゆう戒、以て各本分を尽し聖恩の万分の一に応こたへ奉るべきである。

（花村哲夫「聖駕せいがを迎へ奉りて」）

時^き到りて掃き清められた砂を軋きる音も静かに、龍駕は校門を入り給ふ。野試合出場の百名の健児のいでたちも凜々りりしく整へられる間もなく、陛下にはバルコニーへ出御となれば、天空に鳴り響く陣太鼓、百名の健児はこゝを先途と闘ふ。之を御天覽遊ばさる、龍顔の御麗うらわしさ、皇統連綿世界に冠たる我が帝国の現人神あらひとがみ、その下に生活する我は幸福なり。之に優る歓喜ありや、将はた光栄ありや。

この一瞬こそ、我等のみに与へられたる恐懼きょうく感激の一時、熱涙しばし頬を伝ふるを知らず。唯々歓喜の世界を彷徨さまよふ。あゝ、永遠に忘れ得ぬ一時よ。

（第三学年 二又秀雄「聖駕せいがを迎へ奉りて」）

この行幸の準備は七月から始められた。なかでも警備面は嚴重で、「境界線に一間間隔、有刺鉄線五条線の柵を設くること」などのほか、教職員のほか「生徒警備隊」も置かれ、「御臨幸に際し其の前後、学校の内外を警戒し、主として火災の予防及疑はしき者の取締、其の他非違を防遏ぼうあつする」任務を負った。また、衛生面の注意も周到で、特

に伝染病の発生を恐れて、夏休暇後は「各寄宿舎に於て「刺身」その他生物なまものの食事を禁止」し、二回の健康診断も実施している（以上、『行幸記念誌』）。

なお、天皇の「御真影」は、校長室の地下収納式の「鋼鉄製奉安庫」のなかに置かれていた。一九三八年秋、卒業生栗林徳一の寄贈により奉安殿が作られた。

緑丘会の創立

苦米地新校長の「研究基金」募集の提案は、同窓会組織の改編をうながすことになった。校長が就任早々、各地の同窓会支部を回り、了解と援助を要請するなか、一九三五（昭和一〇）年五月に開催された東京支部では西尾清一幹事により「同窓会機構の改善」が提起された。「母校側の苦心経営に関しては充分諒察すると共に、斯る遠大にして至難なる計画を同窓会側の総意として後援する為には不意打の感ありたることを指摘し、これは本部の機構に改善を要するものある一証たると共に、校長が同窓会長を兼ねるは便宜に似て、両立し難き事情に苦しまるゝこともあらん」という趣旨の発言で、その場で、苦米地も「機構改善の考慮を約」（『緑丘』第八八号、三五年六月三〇日）した。同窓会は慣例的に校長が務め（本部は学校内）、実質的に小樽支部が幹事・常議員を占めていた。これに他の支部は不満があつたようである。西尾は改めて『緑丘』第八八号に「同窓会機構の改善を促す」を寄稿する。

一、同窓会の主体は何処にありや

二、同窓会総会は有効に成立したりと云ひ得るや

三、役員会の構成についての疑議

四、同窓会々長の視角

同窓会々長は校長之を兼ねるといふ規定はない、しかるに校長即ち同窓会長の如き觀念にて何等會員全部の意志を問ふ事なく会長の位置に就くは違法ではないか

五、学校として緊要な事は同時に同窓会として緊要か

同窓会には別途の使命がある、校長の抱負即ち同窓会長の抱負、学校の使命即同窓会の使命と即断するが如き今回の拳は充分考慮の余地あり

校長⇨同窓会長を前にしての率直な発言であり、『商学討究』廃刊に対する不満の表明ではあるが、四半世紀近くを経ての同窓会の自立志向と成熟をも読みとれよう。東京支部以外にもこの改革の気運は広まっていたのだろう、七月一三日、小樽で開催された本部幹事会で「本部機構改革案」が議題にのぼった。原案の作成にあたった松田新が趣旨説明をおこない、そのなかには「法人組織とする案」もあり、二五周年を期して改革を図ることが決まった（『緑丘』第八九号、三五年七月二五日）。

その後、三六年四月の臨時幹事会で社団法人化の方向が決定し、具体的作業が進められた。七月の『緑丘』第九号で「会名」の募集がなされた。すでにこの時点で「同窓会の組織を社団法人に変更の件は諸準備整ひ、定款の作成も完了し、目下主務省設立認可を申請せむとして居ます」というところまで進んでいたが、創立記念事業や行幸が重なり、ようやく三七年四月の総会で「社団法人緑丘会定款草案」が決定となる（会名には「緑凌会」「北辰会」「蒼穹会」などの応募もあったが、順当に「緑丘会」となる）。会員は三千名を越え、支部は海外も含め二〇近く設立されていた。なお、長崎高商では一歩先んじて、同窓会組織を変更して社団法人の「瓊林会」が設立されていた。『緑丘』第九九号（三七年四月二九日）で、草案確定に至る経過や「定款草案」などが掲載され、各会員からの意見が求められた。「設立趣意書」は次のような内容である。

願フニ本会創設以来、健全ナル發展ノ一途ヲ辿リテ今日ニ及ビ、多数ノ會員ヲ擁スルニ至レルノミナラス、之ガ資産並ニ事業ノ状況モ愈々複雑多岐ニ涉ラントシ、且ツ母校学園發展ノ為ノ大業ヲモ実施シツ、アル現在ニ於テハ、此ノ盛大ナル本会ノ運営並ニ事業ノ遂行ニ当ツテ、之ガ円滑ヲ期セザルベカラザル明カナリ、依テ茲ニ會員ノ総意ヲ以テ相互ノ親睦ヲ図リ、全會員ノ意思ノ統合ニ便宜ナラシメンガ為ニ本会ノ組織ヲ変更シテ社団法人緑丘会トシ、愈々将来ノ發展ニ資セントスルモノナリ

「定款」の第二条では「本会ハ會員相互ノ親睦ヲ図リ、智識ヲ交換シ、併セテ小樽高等商業学校ノ發展ヲ助成スルヲ以テ目的トス」とされた。役員としては理事・評議員がおかれ、本部は学校内におく。事業としては「会報」（『緑丘』）の発行、「學術研究基金並助成金ノ募集及運用」、「講演会、談話会ノ開催」などである。

一年後、各支部の意見を受けて「定款」草案の条文を変更するが、理事や評議員の選出方法で小樽偏重にならないように修正が加わった（『緑丘』第一〇九号、三八年三月二五日）。

そして、一九三九年五月八日、文部省から正式に社団法人緑丘会が認可され、六月二三日、創立総会が開かれた。理事長には苦米地校長、常務理事には飯川文三が就いた。四一年五月の第二回総会は東京で開催された。

海外支部は一〇名以上の所屬とされたため、この緑丘会創立に刺激されて、「満州国」や華北で設立が相ついだ。三九年一月には「満州国」鞍山支部、四〇年二月には天津支部、六月には北京支部である。天津の場合、「支那事変勃発してより天津を中心とする我が国商権の拡張、發展振りは実に目覚ましいものがある。日本に於ける著名の企業家は殆んど全部その支店及び出張所を設け、英国や仏蘭西の資本家に向ふに廻して飛躍してゐるが、此の国際的商戦場裡にその手腕を揮ふべく拔擢せられて、此の天津に來たれる者約二十名に達した」（『緑丘』第一三六号、四〇年

六月(五日)という。

また、卒業年次の同期会もしばしば開催されるようになった。なかでも卒業後二〇年を節目とする集まりは盛大に挙行された。「国情の変転、世路の艱難、まことに言葉につくしがたく、此の間に処する二十年、苦難と忍耐との幾星霜」(『緑丘』第一四八号、四一年六月(五日))という感慨のなかで、緑丘の三年間が懐かしく回顧された。

「研究科への曙光」

苦米地新校長は高商の教育に対して、かつての初代渡辺校長の見識を受け継ぎ、「本来専門学校は応用学術研究の最高学府として独自の地位を保つべきで、純粋学理の蘊奥(うんおく)を究める大学とは対立する丈の品位と自信がなくてはならぬ」という抱負を持っていた。しかし、三年制の「現在の状態では実務教育に偏し、文化科学に於て大いに劣る、職業の技術を教へんとすると人格の養成に欠陥を生じ、体育や人格に努力すれば学問不十分」という悩みがあるとされた。一方、懸案の研究科設置は「目下の財政状態では当分困難」とみられ、まず修業年限四年制への延長の実現をめざすべきとした。「四年制度確立の暁、更に研究科二年を設ける時はその卒業生は学士号を当然得るから、大学習格運動に関連して本校将来の発展の爲め、その設置促進には万全の努力を尽す」(以上、『緑丘』第八八号、三五年六月三〇日)と、かなり長い展望をもって考えたのである。

その四年制度実現の第一歩として「研究科への曙光」が射したときがあった。三五年秋、文部省より「校内修繕費として臨時支出の割当が許可され」、教室増設が実現するが、それは「問題の四年制度への過程か、又は待望の研究科設置への準備」と観測された。すでに研究科設置問題は、第一次大学習格運動の最後で浮上し、規定事実となっていたものの、そのまま店晒しになっていた。この新たな展開に関連して、九月下旬、大野純一がすでに研究科を設置していた長崎・山口・名古屋の各高商を視察している(以上、『緑丘』第九〇号、三五年一〇月一九日)。

『緑丘』第九一号（三五年二月五日）は「注目の研究科問題 目下具体案提出中 十二月中旬には決定か」と題して、次のように報じている。

即ち之に依れば、新に一年制度の経営及貿易の各研究科を設置し、各科十五名を限度とする学生を募集して経営及貿易に関する最高の知識の修得は勿論の事、広く各教授との個人的接触によつて専門的研究に没頭せしめ、思ふ存分学園の持つ学的精髓を吸収せしめ、名実共に小樽高商を代表する優秀学生を造り出すとするもので、創立二十五周年を迎へる本校の最も有意義なる収穫であらう

第二章第三節で記したように、何度か研究科設置の動きがあるなかで、三三年六月には「貿易、拓殖の二科目」設置構想が新聞に報道されたことがあったが、この「具体案」はそれを一部受けついでものといえよう。それでも二年制から一年制への縮小を余儀なくされている。それだけに現実性のあるものとして実現にはかなりの自信をもっていたようで、苦米地は「多年の懸案が解消の端緒にある事は嬉ばしい」、「実現の暁は熱心なる学生によつて充分に利用して戴きたい」と語る。また、手塚寿郎も大学への「昇格過程としても絶対必要」（同前）と述べていた。一月一四日の『北海タイムス』も、「も早や決定も時日の問題ではないかと見られてゐる」と報じた。

ところが、一月二二日の『小樽新聞』は「高商の研究科設置 実現薄の形勢 各校の割込み激し」という記事を載せる。文部省に向いて情報収集に努めた苦米地は、帰樽後、「十六校に設置する予算は計上されたので若干安心して居つたが、その後洩れた学校や新設校迄猛烈に割込運動を行つてゐる事を聞いた……幾分でも他校が侵入する事になれば、それだけ予算の低減は余儀なくされるので、さうなると当校として希望した如き内容を以て進める事の困難は申す迄もないので、非常に苦慮してゐる処である」と語る。

この暗礁に加えて、翌三三六年一月の議会解散の「突風で 俄然実現望薄か」(『緑丘』第九二号、三三六年三月五日)となつてしまふ。総選挙につづく二・二六事件の惹起により、さらに困難さは増した。苦米地は「新学年を迎ふるに当りて」(『緑丘』第九三号、三三六年五月一日)のなかで、「兎に角本校としては重大関心を以てその成行を待つと同時に、何時でも開設し得る丈の準備をして待期^{まちど}の姿勢を執つてゐる」と述べるにとどまつた。

研究科実現を模索する動きはその後もつづく。「研究科の問題は、現在の学園を商大に昇格すると云ふ過程への段階として是非必要」と考える手塚が、「研究科何んで一万円もあれば出来るんだから、誰か寄付して下される人があるとよいんですがね。……本校の設立は北方の文化開発と興業のためなのだから、道庁あたりから出してもらへるんでなからうかな」(『緑丘』第九八号、三三七年二月六日)などと未練を残して語るのは、授業などのスタッフ面では十分に実施可能という自負が背景にあるからである。

研究科の実現がまた遠のいてしまったところに、突如というかたちで商大への第二次ともいふべき昇格運動が持ちあがる。三七年二月二七日、小樽市市会で「小樽高等商業学校を商科大学に昇格する案」が建議として可決されたのである。これを報じる三七年四月二九日の『緑丘』第九九号は、「意外な方面から昇格運動の火蓋が切られ」としつつ、「これは全く学園の対社会的地位の進展を物語るもの」と歓迎する。そこに載る市関係者の説明とは次のようなものである。

北海道、殊に小樽の情勢は今後貿易方面への進出が企図さるべく、為めに貿易奨励協会の設置の議もあり、かかる方面に於ける活躍は必然実業に関する最高知識を必要とする。かゝる外部的情勢の進展と相俟ち、小樽高商は三代校長の苦心経営と二十五年の校齡とは益々基礎鞏固に、且つ斯界へ優良の材を送りて貢献しつつ、ある内部的情勢から云つても、商科の最高学府として存在すべき理由は充分である。更に北海道に於ける文化の分



『緑丘』99, 1937. 4. 29

布状態から云つても、札幌には総合大学の建設あるに對し、商業都市小樽に商科大学の設立は当然である。市当局としては、当面の犠牲を払つても高商の昇格に関しては小樽市の発展、全道の発展の点から努力するものである。

学校当局との密接な連絡・協議はなかつたようである。「商業都市小樽」として札幌との対抗や北海道のなかでの存在意義を示そうとする意図があつたと思われるが、「当面の犠牲を払つても」という割には、市全体の盛上りからの建議ではなかつた。市会の最終日に、予算案通過後、四つの建議案の一つとして提案され、そのまま採択されたもので、『小樽新聞』などでもこの昇格運動についての記事は見当たらない。その後、具体的な運動が展開された形跡はない。それでも「三代校長の苦心経営と二十五年の校齡とは益々基礎鞏固」という小樽高商の声価は、対外的にも定まったといえよう。それは、戦後の昇格運動へと地表下でつながっていく。

経常費

小樽高商において歳入・歳出はどのような状況だったのだろうか。毎年度の教職員の俸給や歳入・歳出経費などが文部省に報告されている。一九三九（昭和一四）年度を例にとると、次表のようである。

平均的な俸給の教授に比べて、校長や勅任教授、備外国人の俸給はかなり高い。歳入ではほぼ三分の二が政府支出金、三分の一弱が授業料となつている。歳出では俸給を中心に、人件費関係が全体の八割近くを占める。おそら

The image shows two tables side-by-side, representing salary progression data for 1944. The left table is titled '経費' (Expenses) and the right table is titled '職員' (Staff). Both tables have multiple columns for different categories and rows for various items, with handwritten numbers and some checkmarks.

「昭和十四年度年俸進達ノ件」(「文部省往復綴」1940)

く「庁費及修繕費」のなかに含まれる現在の研究費に相当するものは、微々たるものだろう。

この二一万円前後の経費の規模は、高砂恒三郎『全体主義商業教育の構想』(一九四三年)所収の「商業専門学校経常費予算額調」によれば、山口・長崎高商につづいて第三番目に位置する。創設順にしたがい、教職員や学生の定員などに準じたもので、不動の順序である。小樽高商が「三大高商」を自負するのも、こうした経常費の優位が認識されているからであろう。大倉高商(現在の東京経済大学)や同志社高商などの私立も並ぶが、それらを見ると全体として官立高商の財政的優位は明らかで、小樽高商でも私立高商のトップである大倉高商に比べて二倍の経常費となっている。

三九年一月一日付で文部省に報告した「昭和十三年度末賞与高等官各人別支給額調査」が残っている(「秘文書綴」、一九三八年)。教導部長卜部の四九〇円を最高に、教務・生徒両課長が四八〇円となっており、最低は一二〇円である。このボーナスの差は大きく、職務を基準とした校長の査定によって決まったと思われる。校長の裁量によってかなり左右されたようで、ここにも校長の絶大な力がうかがえる。

第二節 教育体制の転回

『教授要目』の概要

通常は『学校一覽』中に簡単な「教授要目」が掲載されているが、一九三六（昭和一一）年度は、現在のシラバスに匹敵する詳細な『教授要目』が作成された。「教授要目」「教授方針」「教授事項」に分かれ、苦米地校長就任早々の授業内容をうかがうことができる。

第二章でみたように一九三一年度に大きなカリキュラム改革があり、選択科目が大幅に増えたが、その後、学校規則の改正はおこなわれず、内部的な措置として、必修科目と選択科目の一部入替えや選択科目時間数の削減（週二二時間から一八時間へ）がなされていた。『教授要目』巻末の「昭和十一年度実学科課程表」には三七の必修科目と一八の選択科目（語学と研究指導を除く）がある。選択科目時間数は一年の第二学期で二時間、二年で七時間、三年で九時間となっている。各学年の総時間数は、いずれも三四時間である。

主な科目を見よう。まず、「修身」から。卜部岩太郎担当の一年次の授業内容の中心は「国家、国体、政体」「我が国体ノ特質」「国民道德ノ淵源及発達」、さらに「外来思想ト国民思想」である。二年次は中野清一が「倫理学」を講じる。三年次は卜部の「東洋思想」である。

「体育（教練）」は配属将校川村脩少佐と吉野隆吉講師（大尉）・斉藤直助教授（少尉）が担当する。「教授要目及方針」については第二章第二節で引用した。三年次の「指導着眼」の第一は、「小中隊戦斗教練ニ重点ヲ置き、適切ナル判断、周密ナル計画能力ヲ向上セシメ、難局ニ際シ毅然トシテ責務ヲ貫徹スルノ実行力ヲ養成ス」であった。各個教練・部隊教練では「冬季ハスキーヲ利用」した。山上グラウンドでは「実包射撃」をおこなう。各学年とも四

日間の野外演習が課せられ、「公園高台に擁護陣地を敷いた東軍に対し、西軍は急迫又肉迫、殷々たる銃声の裡に華々しい攻防戦を展開し」(『緑丘』第一〇六号、三八年一〇月)という場面が現出した。苦米地校長も新入生に対して「此教練に於て合格しない様な人であれば、其は精神上又は身体上欠陥ある者」(『新入生に与ふ』『緑丘』第九九号、三七年四月)と訓辞する。

英語は「講読」「英作文」「文法会話」「商業英語」の四つに分かれる。「講読」では「読書力ノ養成ヲ主眼トシ、日常普通ノ英語ニ習熟セシメ、会話作文ノ上達ニ資シ、且ツ欧米諸国民ノ文化ニ触ルルコトニヨリテ知得ノ練磨、並びニ国民精神ノ涵養ニ資センコト」が目的となる。教授法としては「直読直解ノ方法ニ重キヲ置キ」、「下級ニ於テハ Direct method ニヨル問答ニ依リ和訳ヲ用キズシテ理解セシムル方法ヲ併用シ、難解ノ部分ノミ Paraphrase 或ハ和訳ニヨリテ教授」するという方法を採用している。「英作文」の教授法も工夫が凝らされ、「問答式ハ主トシテ机間巡視ノ際実施シ、課題法ハ宿題及び即題ニ分ツ。宿題ハ或ハ板書セシメ、或ハ教師ニ提出セシム。共通ノ誤謬ハ全生徒ノ前ニ於テ綿密周到ニ訂正ス」という。

「商業英語」は木曾榮作と大谷敏治の担当で、苦米地の教科書を使う(各学年とも毎週二時間)。三年次では「第一、二学年ノ既習知識ヲ基トシテ、商用通信文及書式ノ解剖、語義、文節ノ節示、音読、特殊慣用語句ノ暗誦、全文並ニ語句ノ暗誦、以上ヲ範例トシテノ商用文ノ作成及び貿易手続ノ理解、電信通信ノ説明並ニ利用ヲ教授スルモノトス」であり、次のような多岐にわたる内容となっている。

1. 取引先ノ選択
2. 信用照会
3. 取引ノ申込及び応答
4. 取引条件ノ協定
5. オファー並びニ其応答
6. 契約
7. 注文並びニ其応答
8. 註文品ノ発送、船積
9. 勘定決済
10. 銀行及び信用状
11. 海運業
12. 保険業
13. 苦情及び申訳
14. 代理店トノ取引

15. 推薦状及び紹介状、端書文 16. 電報通信

こうした盛沢山の内容に学生は追いまくられたはずだが、それだけに十分な理解が身につけば卒業後は即戦力として活躍することができた。

フランス語は「商業実務ノ為メノ実用的効果」とともに「教養トシテ仏蘭西ノ一般文化ニ接触シ、之ヲ吸収スル手段ト機会トヲ与フルコトヲ目的」とする。松尾正路が「方法的理論的教授」を担当し、太黒マチルドが「平易簡單ナル實際的仏語ヲ直接的方法ニヨリ教授」する。

服部政一が担当する「珠算」は、「簿記、商業数学等ト提携シテ商業実務計算ニ必須ナル珠算力ヲ実質的ニ賦与」するために、「練習ニ全力ヲ注グ、間断ナク実力試験ヲナシテ検定ト奨励トヲナス」という。特に中学出身者の苦勞が目に浮かぶ。

「商品実験」は個別指導で、「第一学年第一学期ニ於テハ一般商品、同第二学期ニ於テハ最モ普通ニアル商品、第三学年ニ於テハ主ニ道産商品」が対象となる。その三年次には、「石炭ノ成分及熱量ニヨル鑑定」や「魚粕及「フイツシユミール」ノ成分ニヨル鑑定」などをおこなう。

一年次の第一学期（三時間）の「法学通論」（井上紫電担当）は、「法ノ社会的人生的意義ヲ明カニスル事ニ依リ遵法ノ精神ヲ涵養シ、併セテ民法商法其ノ他ノ実定法修得ノ入門トシテ法ノ基本的原理及ビ概念ヲ知ラシムルヲ眼目」とする。三年次の「商法」（木部林二担当）は「技術的方面ニ重点ヲ置き、各制度ノ基礎的理論及此等ト全体トノ関連ノ闡明ヲ期ス」ことを目的に、「総則」について「会社法」と「商行為法」をあつかう。

選択科目の一つである「憲法及行政法」（井上担当）のうち、「憲法」は「国家生活ノ本義ノ究明ト国体觀念及ビ公民常識ノ涵養ヲ主眼」とするもので、いわゆる天皇機関説の立場ではない。「手形法及ビ小切手法」（木部担当）

は三年次第一学期の必修科目となっている。

商業学においては「商業二関スル理論及実務ヲ綜観的ニ講述シ、以テ商業各論ノ講義ニ連絡ヲ保タシム」という総論的な「商業通論」（室谷賢治郎担当）を一年次に学んだあと、二年次・三年次に「経営論」（室谷担当）、「金融論」（糸魚川祐三郎担当）、「為替論」（大野純一担当）、「保険論」（久木久一担当）、「外国貿易実務」（ファミンジャー担当）などが並ぶ。たとえば「経営論」は「商工経営二関スル必要ナル智識ヲ授ケ、以テ経営者トシテノ人材ヲ養フ目的」で、「外国貿易実務」（英語使用）は「英米二国ニ対スル輸出入貿易ノ手続一般及貿易商ニ必要ナル簿記知識ノ初歩」の修得という、実務的・実践的な内容で実施されている。服部政一が担当する選択科目「商店経営及広告販売」も「従来ノ商店経営ヲ不合理ナラシメル経済事情ヲ研究シ、此ノ変化ニ適応スベキ商店ノ経営ヲ合理化スルニハ如何ナル形態ヲ取り、如何ニ仕入販売ヲ行ヒ、予算ヲ統制スルカ大体ノ指針ヲ与ヘル」もので、一部にはマーケティングという新しい要素が取り入れられている。

販売ト広告 五時間

イ、販売方法ノ決定

販売方法決定ノ基礎トシテノ市場調査、人的販売方法ト非人的（広告）販売方法、販売人ノ選定、訓練
統制及ビ待遇問題

ロ、広告

商品別ノ広告戦計画、訴求ノ選定、広告媒体、広告効果ノ測定

「商工実践及原価計算」は三年次で、「商業経営実践」（二〇時間）、「工業経営実践」（二〇時間）、「原価計算」（一

○時間)の三つから構成される。「商業経営実践」は擬営室での実習、「工業経営実践」は石鹼工場での実習を含む。一九三二年のカリキュラム改革で加わった「原価計算」(木村重義担当)は、次のようなものである。

教授要旨 本学科ニ於テハ各種工業経営計算ノ一部トシテ現実ニ行ハレツ、アル原価計算ノ雑多ナル諸形態ヨ

リ抽出シタル原価計算一般理論ト共ニ、ソノ実践的形式タル工業簿記、殊ニ工場簿記ノ大意ヲモ取扱フ

教授事項 1. 原価計算及ビ原価計算ノ意義 2. 原価計算ノ種類 3. 製品材料ノ種類及ビソノ原価計算上

ノ特質 4. 実際価額ト計算価額 5. 原価ノ直接賦課ト間接賦課 6. 間接原価ノ賦課計算法 7. 間接

原価ノ経営経済的意義 8. 工業会計ノ特質 9. 工業簿記ニ於ケル帳簿組織 10. 工場勘定体系 11. 工

業会計ノ決算及ビ決算報告書

ファミンジャー担当の三年次「海外経済事情」は、「主ニ最近ノ英文経済記事ノ講読ニヨリテ、海外ノ産業貿易金融上ノ實際ニ通スベキ基礎的知識ヲ授ケ」ることを目的に、英語でおこなわれる。

経済学関係では、総論的な「経済学原論」と「貨幣論」「商業政策」が必修科目で、「社会政策」「農業政策」「植民政策」が選択科目となっている。「経済学原論」は一年次(三時間)が南亮三郎の担当で、「国民観念」の下ニ綜統セラル、現代経済生活ノ基礎理論ヲ一貫的且ツ系統的ニ説明スルヲ目的トシ、兼ネテ経済諸科学、諸分科ヘノヨリ深キ研究ニ進ムベキ緒口ト理論的素養トヲ供センコトヲ期ス」という教授要旨である。教材には南自身の『経済原論講義』(一九三五年刊)を用いる。教授事項は「1. 経済学ノ根本観念 2. 経済学ノ史的成立 3. 近代経済学ノ發展ト現状 4. 経済ノ本質ト類型 5. 経済行為ト収益ノ理論 6. 費用概念ト費用評価 7. 資本ノ本質 8. 流通総論 9. 貨幣 10. 価格ノ理論」と進む。

二年次は手塚寿郎が「生産財ノ価格理論」を講じる。「総論」では「オーストリア奥地利学派ノ帰属理論ヨリ、ローザンヌ学派ノ平衡理論ヘノ発展」を中心とし、「各論」ではこの年度はワルラスらの「利子」学説があつかわれ、「地代、賃銀理論ニハ論及シ得ズ」とされた。手塚のこの時期の研究テーマに即した理論的な内容と推測され、学生たちには難解な講義だっただろう。手塚がもう一つ担当する「商業政策」(三年次、二時間)は「総説」「本論」A. 国際貿易ノ機構 B. 国際貿易政策思想史 C. 国際貿易政策ノ技術」という内容で、おそらく手塚の著書『国際貿易思想史研究』(一九三二年刊)にもとづいている。手塚は「統計学」も担当する。

かつて高岡熊雄が担当していた「農業政策」「植民政策」は、やはり北大の上原轍三郎によっておこなわれる。前者では「土地利用ノ問題」「土地分配ノ問題」「農家経済ノ問題」などが、後者では「植民地分有ノ現況」「植民地統治政策」「植民地経済政策」などが講じられる。

大野純一の担当する「財政学」(三年次、二時間)は「商工業経営者トシテ一國財政々策遂行ヨリ受クル各般ノ影響ヲ考慮ニオキ、財政学全般ノ講述ヲナス」ものだった。「1. 緒論 2. 経費論 3. 収入総論 4. 租税論 5. 収支適合論 6. 予算論」という内容である(大野は二年次の「貨幣論」も担当)。

三年のカリキュラム改革で大幅に増えた「所謂リベラル、アーツ」に属する選択科目は、卜部「教育学」を除いて、中野清一が「論理学」「心理学」「社会学」「哲学史及哲学概論」を一手に担当している(二年次と三年次の各学期)。そのうち「心理学」は次のような内容である。

教授要旨 心理学ハ精神現象ノ本質、様式、法則ニ関スル経験的科學ナリ。而シテ謂フ所ノ精神現象ハ個人心理的ナルモノト社会心理的ナルモノトノ二種ニ分タレ得ルガ故ニ、心理学ハコノ二部門ヲ合セ有セザル可カラズ、心理学ハコノ兩部門ニ関スル經驗論的知識ヲ与フル事ニヨツテ精神活動ノ現實的基礎ヲ指示セントス

ルモノナリ

- 教授事項 第一部 個人心理編 1. 感覚現象 2. 知覚現象 3. 情諸現象 第二部 社会心理編 1. 個人心理ト社会心理 2. 水平的關係ニ於ケル社会心理 3. 垂直的關係ニ於ケル社会心理 4. 回顧的關係ニ於ケル社会心理 5. 期待的關係ニ於ケル社会心理

「哲学史及哲学概論」の目的は「雑多知識ノ整理法ヲ會得セシムル」こととされ、「1. 哲学ノ本質 2. 思惟ノ世界 3. 体験ノ世界 4. 価値ノ世界」といふ順序の講義である。

「研究指導」の要旨は「生徒ヲシテ特殊問題又ハ分化セル学科ニツキ自主的ナル研究ヲナサシムル為メニ、個別指導ヲナサントスルニアリ」とされる。「商業、經濟、法律關係諸学科其他」の場合、次のような具体的方法がとられる。

1. 生徒ニ共通ノ、若クハ個別ノ研究題目又ハ調査題目ヲ選バシムルコト
2. 若干ノ洋書又ハ和書ヲ与ヘテ講読セシメ、又ハ实地ニ就キテ研究ヲナサシムルコト
3. 生徒ヲシテ研究ノ結果ヲ順次ニ報告セシメ、生徒ノ間ニ於テ討議ヲナサシムルコト
4. 研究ノ結果ヲ一部若クハ若干部ノ論文又ハ調査報告書ニ纏^{まと}メ、隨時又ハ学年後半ニ提出セシムルコト
5. 論文又ハ報告書ニ就テ必要ナル注意ヲ生徒ニ与フルコト

ほぼ現在の専門ゼミナールの運用方法と同じ様式が確立されており、卒論の指導も明記されている。「商品実験」「商業英語」「語学」の指導方法は、それぞれ固有の条件が加わる。注目すべきは、こうした研究指導にゼミナール

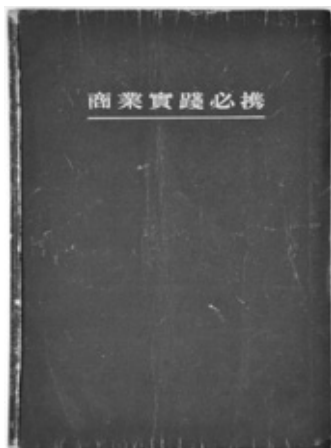
を受ける学生数が、「最近五ヶ年ヲ通ジテ第三学年生徒数ノ約八割乃至九割ニ当ル」とされていることである。この年度にはスミルニッキーと中村和之雄を含め、二〇名が研究指導教官となっている。三年次に研究指導を受ける者は、選択科目時数九時間から二時間をそれにあてることになっていた。

他の高商の『教授要目』のうち、参照できた彦根高等商業学校の一九三八（昭和一三）年度版を一瞥しよう。英語は一・二年次が各七時間、三年次が六時間で、合計では小樽高商と同じである。「訳読」「作文」「商業英語」「会話」と分れるのも、ほぼ共通している。

一年次の「商業概論」は、小樽高商の室谷賢治郎の『商事要項教科書』を用いている。大きく教授内容が異なると判断されるのは、桑原晋が担当する「経済学原論」である。一年次は自著『経済原論教材』を用い、「第一篇 方法論」「第二篇 資本主義経済概観」「第三篇 資本主義機構ノ分析 第一章 分析ノ仕方 第二章 生産機構論 第三章 売買機構論 第四章 所得・機構論 第五章 消費機構論」「第四篇 資本主義社会ト人間生活」という順序である。二年次は「流通」「企業」「所得」「景気変動」をあつかう。おそらく高等商業学校の「経済学概論」としてはオーソドックスなものであろう。それに比して、前述の南亮三郎や手塚寿郎の「経済学概論」は大きく理論に傾斜しており、小樽高商のアカデミックな学風が際立つといえる。

小樽高商にはなく彦根高商の特色といえるものは、「経営経済学」や「工業経営論」（実質は「労働論」）などである。

なお、「学業成績表」をみると、この三六年から「勤惰」という評価項目が設けられている。一〇〇点満点から〇点までの評点が付けられ、進級・卒業成績に加味されている（〇点でも卒業は可能であった）。担任が付けたものだろうか。基準なども不明である。



『商業実践必携』

『商業実践必携』

一九三八（昭和一三）年一月、同文館から小樽高等商業学校商業実践研究室編『商業実践必携』が刊行された。高等商業学校および中等商業学校における「擬営（又ハ模擬）商業実践ノ授業ヲ施行スル際、生徒ニ「ハンドブック」トシテ使用」させる教科書である。同文館からは、この前後、原価計算・簿記・商工経営・会計検査法などの分野で専門学校の教科書、参考書・独習書が多数刊行されているが、「商業実践」の分野において小樽高商が全国の高商のなかでもっとも充実整備された教育実践をおこなっていることを、この教科書出版は示している。

糸魚川祐三郎を代表者とする「商業実践研究室」には、橋本誠・久木久一・服部政一・北田和成が所属している。第三章第二節で一九三五年前後の作成と推測される小樽高等商業学校実践管理室編『擬営商業実践必携』（総説篇）と「運輸・倉庫・保険篇」という非売品の小冊子にふれたが、そうした実践の蓄積を踏まえてこの『商業実践必携』の刊行があった。

『緑丘』第一一九号（三九年一月三日）は本書の出版広告を載せるが、そこには次のようにある。

擬営商業実践は初代渡辺校長が本校創立と共に、その商業教育上有する特殊な意義に鑑み設けた原料であり、それがモデルとなつて全国の商業学科に此原料が設けられ、又本校に於ても其後幾多の工夫経験が積まれて来たのである。

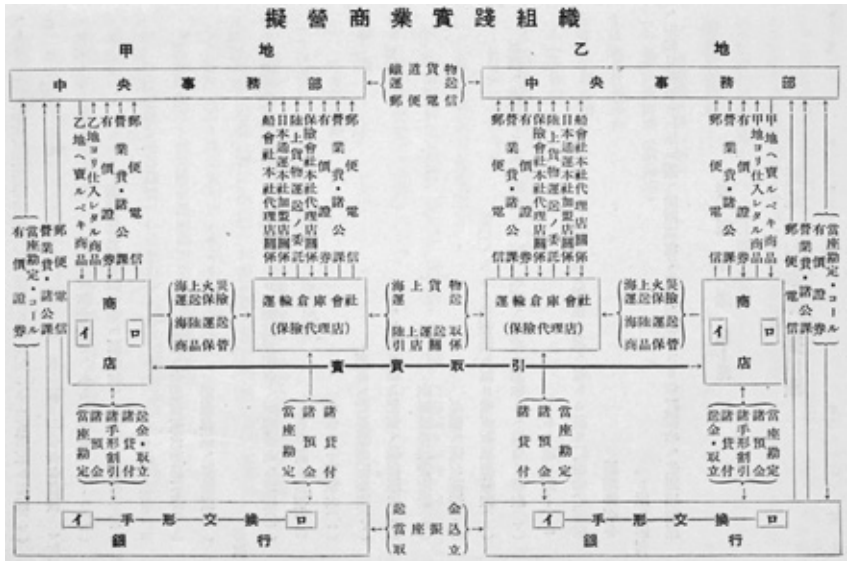
本書は本校商業実践室が試みた授業上の工夫、即ち提案制度から生れたものであつて、生徒が自主的に、能動的に諸般の計画を建て、又商業諸手続を遂行する際必要ある一切の知識を之

に就いて得る為のハンドブックである。

「序言」で指導教授法の転換について説明されている。すなわち、「商業実践」の先駆をなした小樽高商では当初「指導票制度」を採用し、それが全国的に普及していた。「指導票制度」とは「取引並ニ取引諸手續ニ関シ、固定シタ指示ヲ一律ニ与へ、生徒ヲシテ之ニ従ハシムル方法」であり、授業の管理上は容易かつ「生徒ニ予定ノ実践知識ヲ注入スルニハ正確ナ方法」だったが、「他面生徒ノ学修ヲ機械的、受動的ナラシムル短所」があった。しかし、「自由法」とすると「生徒ヲ誤謬ト混乱ニ陥レル危険ガ甚ダ大デアル」。この問題を解決するために考案されたのが、「提案制度」である。

吾々ハ之等ノ事情ニ鑑ミ、曩ニ「提案制度」ナルモノヲ創案シ実施シ来ツタ。之ハ特定ノ「ハンドブック」ヲ併用スルモノデアツテ、即チ授業ノ進行ニツレテ掲ゲラレル提案ニ基ツキ、生徒ヲシテ絶エズ「ハンドブック」ヲ参看シツツ、自ラ取引並ニ取引手續ニ関スル一切ノ計画ヲ建テシメ、教授者檢正ノ上、之ヲ実行ニ移サシメル所ノ授業方法デアル。之ヲ以テスレバ、生徒ヲ一定ノ秩序ヲ以テ誘導スルト共ニ、生徒ノ自由ナル活動ノ中ニ商業実践知識ヲ自然ニ、又正確ニ獲得セシメツ、諸般ノ訓練ヲ施スコトガ出来ルノデアル。「提案制度」ノ採用ト本書ノ利用トハ相俟ツテ、商業実践授業ノ効果ヲ大ナラシムルモノデアラウト思フ。

この「提案制度」にもとづく試作的な「ハンドブック」が、おそらく前述の実践管理室編『擬営商業実践必携』と思われ、それを大幅に増補改訂したものが本書となった。「提案制度」の創案・実施という面においても、小樽高商はリーダー・シップをとった。先の『緑丘』広告では、「提案制度の主張と相俟つて本書の出版は我国商業教育界



「擬營商業實踐組織」の図解

に多大の示唆と貢献とを与へるものであらう」と自負している。

構成は大きく「総説篇」「商店篇」「銀行篇」「運輸倉庫保険篇」「中央事務篇」に分かれ、全四一章となっている。

「総説篇」の第一章は「擬營商業実践ノ目標」で、次のような「特有ナ目標」が掲げられている。

甲 智識的ナ方面ニ就テノ目標

- 1 商業機構ヲ全体トシテ理解シ把握スルコト。
- 2 商業ノ實際ニ行ハレテキル事実ニ接触スルコト。

乙 訓練的ナ方面ニ就テノ目標

- 1 経営的ナ訓練ヲナスコト。
- 2 協同作業ノ訓練ヲナスコト。
- 3 事務的ナ訓練ヲナスコト。

つづいて「擬營商業実践組織」の図解があり、擬營組織内の各部門とその相互連絡の状況が示されている。帳

簿における記帳上の注意として、「記帳ニ用フル文字ハ楷書又ハ行書デアル。勘定科目又ハ之ニ類スル事項ニハ大字（一行ノ三分ノ二位ノ高サ）、説明事項ニハ小字（一行ノ三分ノ一位ノ高サ）ヲ原則トスル」などの詳細な記載がなされている。

しかし、ここまでノウハウを蓄積して整備確立された「商業実践」も、後述する「標準教授要綱」に準じたカリキュラムからは削除されてしまったため、僅か数年程度の実施にとどまった。四二年度の実施は確認される。

なお、本書は教科書としてだけでなく、「商業実務役事者が商手続の実際を知らうとするやうな場合にもよき手引ともならう」（『緑丘』第二一九号広告）と期待されていた。

教室の風景

リチャード・ストーリーが小樽高商に赴任したのは、一九三七（昭和一二）年六月だった。すぐに学生の人気と信頼を得る。父宛の手紙に、その授業振りが活写されている（『ドロシー・ストーリー』『リチャード・ストーリー——日本人の心の友——』）。

学生たちは快活で、意気軒昂、礼儀正しく非常に聡明です。ほくをよく脱線させて、イギリスやオックスフォードのこと、またほくの生活について話をさせようとします。「先生のご生活について面白い漫談を聞かせていただけますか」と黒板に書いてあるのです。「いいとも、君たちに外国貿易の実際について話すでしょう」と、ほくが答えると、そこで無邪気な嘆息。また「先生のロマンスを聞かせてください」と求められると、ほくはこう言わざるを得ません。「ほくのロマンスとはだね、諸君、この日本に来て君たちに教えることだよ」。なお一層の呻き声。そこで皆諦めて授業に入ります。……講義は、外国貿易業務、船荷証券等々へと、しだいに専門的教育になります。

とはいっても、実際にはストーリーも脱線好きで、「クラスの漫談要求にに応じて、オックスフォードの生活や、松竹座や日活館でみた新しい映画の印象などを話すぎたように思う」（『小樽での「緑の春」』『緑丘五十年史』〔英文〕、ここでは『緑丘』（叢目版）第五〇号、一九六八年二月から引用）と回想する。

三年の契約が満了しての帰国を前に、ストーリーは「私の小樽での生活は、私の教え子の温かい心根と共に、一生の心のオアシスとなる事です」（『緑丘』第二三三号、四〇年三月二五日）と語った。彼は最終講義で学生らの求めに応じて、黒板に「ペンは剣よりも強し」と書き残している。学生たちは「我等の親友」と呼んで、別れを惜しんだ。

太黒マチルドについての思い出も多い。一九三五年入学の中野七衛は、その授業を脱線に引きずり込んだ様子を懐かしく語る（『懐かしい先生達』、小樽商大昭和十三年会『緑丘回想（卒業五十周年記念）』）。

時間がきて、マチルド講師が教室の壇上にて出欠をとって、正にこれから会話が始まりそうになると、すかさず全生徒一斉に「マチルド先生！ シャンテモア」の連発で攻めまくると、洪々（その実、内心では嬉しいのだと思います）とした表情で可愛いメロデアで我々の為に歌を流してくれ、「皆さんもどうぞ合唱して下さい」と云う事になり、ガヤガヤと教室中が騒がしくなり、授業は半時間もやる事が出来なくなることが度々でした。然し、後で戴く点数の方は可成り甘かったようです。

一月になると、三年生は卒論の作成に追われた。図書館では「僅の休憩時間を惜んで熱心にペンを執る姿、夕暮の薄暗い館内の随所に紙面のみ明るく照らすスタンドの下に完成を急ぐ真摯な態度、冷て行くスチームにも気付かない熱心な姿」（同、第二三二号、四〇年一月二五日）が見かけられる。そして、試験は卒業を控えた三年生の最後の難関と

なる。「冷たい廊下には今し運命をかけた答案を生産し終へた重たげな頭をかしげて不安げに通る行く受験像。水呑場には赤線で一杯のノートの切れつばしが轉つてゐる。ノーシンとやらあたまにつける葉袋が投げられてゐる。ガランガランなる鐘音に「あ、つ」と、昨夜の徹夜で充滿した睡気を吐だし乍ら新講堂へ走つて行く」光景が、毎年繰りかえされる。その「殺めめいた気分」に刺激されて、一・二年生も「俺もやらにやならん」と、煙草を消してあわたしく図書館へ走つて行く」(同、第二二〇号、三九年二月二五日)。

さて、長い試験期間が終わり、解放された学生は「嬉々として坂を下つて、街へ街へ」となる。『緑丘』第二二二号(三九年三月二五日)は、「その晴々しい顔は試験ッて何だといった風情。久方振りに映画へ。街では高商生の氾濫。早や故郷へ試験疲れを医しに旅立つ気早連中らしいのがバック片手に停車場へ——此の日、生憎雪模様なれど、一年中で最も高商生の朗かデー」と伝える。

しかし、試験結果が廊下に張り出されると、「学年末試験有異常」である。一九四〇年三月では、「づらりと並んだ赤丸、一年生五十八名、二年生三十七名」(同、第二三三号)という状況となる。不合格になることを、当時の学生は「ツカム」といったが、その不合格科目が多くなると、留年＝原級にとどまることになる。

スペイン語新設

一九三六(昭和一一)年一〇月の第二学期から、英語以外の外国語の選択肢にスペイン語が新たに加わった。「輓近我国ノ海外貿易ガ異常ナル進展ヲ見ツ、アル一方、本校卒業生ノ貿易関係事業ニ従事スルモノ甚ダ多キニ鑑ミ、生徒ニ貿易語トシテ重要ナル西班牙語修得ノ機会ヲ与ヘ、我国ノ海外発展ニシスルハ緊要ノコト、思惟ス」(「小樽経済専門学校規則」、国立公文書館蔵)という理由にもとづく。ドイツ語・フランス語・ロシア語・中華民国語につぐ五番目の語学科目となった。



花村哲夫

この「我国ノ海外発展」とスペイン語との関係については、「植民地再分割問題的意義を含めての日本のラテン諸国植民地への発展は、列強の脆弱地への挑戦である、最後の余地としての中南米、南洋市場は眼前に置かれた重要な経済闘争の舞台である」と述べる『緑丘』第九六号（三六年二月五日）の解説がわかりやすい。ここでは、スペイン語担当の新任に助教授（兼書記）花村哲夫の「現在スペイン語を教へて居る学校は東京、神戸両商大、高商ではブラジルを除いた南米、並にフィリッピン等二十数ヶ国です」という談話も載る。花村は東京外語出身で、ジャパン・ツーリスト・ビュロー（JTB）に勤めていた。

『緑丘』第九六号に、同窓会札幌支部長富樫長吉が寄稿した「商業移民」は、フィリピンのダバオ開発を担った日本人が排斥されていることに「憤懣」をぶちまけ、今まで日本が「商業移民に力瘤を入れなかつたのか不思議でならない」とする。そして、「母校の二十五周年記念に当り、一人の会社重役を作るより十人の商業移民を作る事を祈つて止まない」と提言する。おそらく苦米地校長も同様な認識にもとづいて、スペイン語の新設に踏み切ったと推測される。なお、商業英語の大谷敏治は三六年五月、オーストラリアからシンガポール、フィリピンなどの経済事情調査に出張している。「主要目的は一般的には我国南方貿易の実情調査であるが、特殊的には本校所在地の關係から北方経済の發展に伴ふ外国貿易に将来の研究」（『緑丘』第九三号、三六年五月一日）だった。

実際のスペイン語を選択する受講生は少なかつたようである。三八年の第二学期開始を前に学生の選択届が提出されたが、「その結果は時節柄独語、支那語は絶対多数であるが、西語の驚くべき少数」だった。このため、糸魚川教務課長がその必要性を強調したところ、数名の追加があつたという（『緑丘』第一一六号、三八年一〇月二五日）。

「語学乙類」の新設

一九三九（昭和一四）年の新年度から、中国語を第一外国語とする「語学乙類」の二学級が新設された（従来の英語を第一外国語とする五学級は「語学甲類」とされた）。東亜科ないし大陸科、またFクラスと呼ばれることもあった。「緑丘」第一一〇号（三九年二月二五日）は「新学級新設」として、「大陸建築時代にその第一線に立つ戦士の養成機関として、本校は支那語と支那事情の学科を加味した新学級を特設、新学期から開講、学科は従来の本科の基礎学科の外、支那語一週六時間乃至八時間、及び東亜の事情に通ぜしめる地歴、商業、経済及び法律学を加へたもので、緑丘の明日の為、大いに期待されてゐる」と報じた。

前述したように苫米地校長は就任半年後には「満州国」や中国華北地方に出張し、卒業生の新たな開拓口を求めていたが、むしろ学内の状況として「帰還後にこの方面に送り出し得る人々の払底を痛感し」ていた。すでに「満州事変」後には有力な就職口としてかなりの人員を送りだしてはいたものの、地理的優位もあって先行する山口高商に比較して、教育体制面での整備が急務という判断に傾いていったと思われる。

山口高商では二歩も三歩も先んじていた。「満州事変」後の三二年には「対支商業上須要なる教育を施し、支那及滿蒙に活躍せんとする人材を養成する目的を以て」、教員九名を増員した「支那科」の新設を計画したが、緊縮財政のなかで実現には至らなかつた。そこで、「当分の間、本科の内一学級（五十名）を以て支那語専修班を編成するの方針」に転じ、三三年度から実施していた。さらにこの実績を踏まえ、三九年度から「従来の本科を第一部とし、支那科を本科第二部」とする拡充を実現する。「支那語」は各学年八時間の履修で、英語を平均三時間とし、「日本文化史・東洋比較法制・東亜協同体経済論」など、「総授業時数の約四割に相当する」関連科目を配置した（以上、「山口高等商業学校沿革史」）。また、三九年度からは彦根高商においても「支那科」（その後「本科第二部（東亜科）」と変更）が、四〇年度からは高岡高商に「東亜科」（第一外国語を「支那語」あるいはロシア語とする）が設置された。

おそらくこうした長崎高商の先駆的な試みは、苦米地の知るところであつたはずで、まず予算増を必要としない「支那語専修班」編成から取りかかつたと思われる。三九年二月一四日付で文部省に提出した学校規則の改正案の稟請に付せられた「改正理由書」には、次のようにある（前掲「小樽経済専門学校」）。

今次事変ヲ契機トシテ我國民經濟圏ガ支那大陸ヲ包括スルニ至リタルハ、極メテ明白ナル事実トス。従ツテ高等商業教育ニ於テモ能^{あた}フ限り速カニ之ニ即応スル施設ヲナサザルベカラズ。

本校ハ従来ニ於テモ毎年次卒業生二百余名中約三十名ヲ滿州北支方面ニ就職セシメツツアリ、其ノ數愈増加スル傾向顯著ナリ。而シテ之等大陸ニ進出セントスル者ニ対シテハ教育上種々ナル考慮ヲナサザルベカラザルモ、先ヅ支那語ニ堪能ナラシメルコトハ甚ダ緊要ノコトト思惟ス。

本校ハ従来英語以外ノ外国語ノ一トシテ支那語ヲ課シ、之ヲ選択履修スル者毎年數十名ニ及ブ現状ニアルモ、授業時間數少キニ過ギテ、實際上ノ必要ニ応ジ得ザル憾アリ。茲ニ鑑^こミル所アリ、本校ハ差当り支那語教授ノ施設ヲ拡充シテ、以テ卒業後、彼地ニ於テ活躍セントスル志望確實ナル者ノ勉学ニ資セントス。

「差当り支那語教授ノ施設ヲ拡充シテ」という一節にあるように、山口高商にならつて、いずれは教員陣を拡充した「支那科」への発展が意図されていたと思われる。しかし、むしろ教員数の削減が求められるなかで、本格的な「支那科」の実現は不可能だった。

こうした要望は、文部省の意向とも合致していた。三九年八月二七日の『東京朝日新聞』は「高商高農に、興亜科」という見出しで、「大陸建設の指導者を養ふ興亜学科の設置は前議会以来要望の声高く、文部省で立案中であつたが、一兩日前開かれた予算省議で、全国九高商の興亜経済科を始め、高農の拓殖科等各種の興亜関係科を新設

学年	第一学年		第二学年		第三学年		第四学年		第五学年		第六学年	
	甲類	乙類	甲類	乙類	甲類	乙類	甲類	乙類	甲類	乙類	甲類	乙類
国語	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
算術	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
理科	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
社会	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
音楽	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
体育	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
英語												
支那語												
漢文												
書道												
美術												
労働												
衛生												
家庭												
職業												
特別												
その他												

乙類昭和十五年度実施予定学科課程表

する事に決定した」と報じた。ここに小樽高商も含まれていた。「一科三十五名募集」とあるので、本科とは別に増員される計画だったが、おそらく大蔵省の予算案の査定で認められずに終わった。そのため、予算増を伴わない本科内の定員を用いての設置となる。

山口高商の「支那語専修班」、三九年度からの「支那科（本科第二部）」が、各学年「支那語」八時間と「英語」三時間だったのに比べて、小樽高商の「語学乙類」の場合、一年次の「支那語」は第一学期四時間、第二学期六時間、二年次・三年次各八時間で、英語も各学年四時間（ただし、商業学校出身者は一年次は六時間）をしつかり学ばせることにしていた。なお、この時点でそれまでの「中華民国語」の表記は「支那語」に変更された。

一九三九年の入学試験には間に合わなかったが、四〇年の入学者は応募の段階で「甲類」か「乙類」を選択することになり、「乙類」には中学校出身者が二〇名、商業学校出身者が一五名入学した。

「緑丘三十五年史稿」に「乙類昭和十五年度実施予定学科課程表」が収録されている。

第一期生金野啓一は、次のように回想する（『緑丘に在りて』、小樽高商昭和十六年後期卒業生会『金鱗——卒業五十年の星霜を偲ぶ——』）。

秀才あり豪傑あり、二浪三浪ありで、バラエティに富んだ集りであった。正科目として支那語と支那の歴史があったので、三年間組替がなかった。このため団結の気風が強く、大陸科第一回生の自負もあって、クラスはマスターの佐藤政志君を中心に、固い絆で結ばれた。特に大陸雄飛を鼓舞するような授業はなかったが、北京大学出身の周講師の会話を通じて、彼の地の文化・風俗・習慣・生活様式等を知り、大陸に興味が湧いてきた。

第一期生が二年次になると、「東亜経済史」「東亜経済地理」（いずれも仮称）が新設された。三年次には「満州国支那法制」と「東亜経済政策」の開講が予定されていた。小樽高商の特徴の一つであった選択科目の多様さと時数の多さは、「支那語」と英語を合わせて一二時間を確保する「語学乙類」では両立できなかった。この表では三年次に四時間から六時間が選択科目にあてられることになっていた。また、「体育」が従来の週二時間から三時間に増えたが、これは「教練」にあてられたと思われる（「語学甲類」を含めて全学年で）。そのため、総授業時間数は一年次・二年次は週三五時間となった。

一九四一年一月二五日の『緑丘』第一四三号は「興亜の春に 躍進する乙類（東亜科）」という見出しで、次のような記事を載せた。

現在乙類二年の如きは早や支那語に於いて陸軍二等通訳官の実力は原岡教授、周教師の等しく認めるところであり、周講師の会話等も、全員「全明白」（皆分る）とうそぶいてゐる状態、他方一二年を通じて学校当局の了解と援助の下に、支那大陸の経済、社会、産業、語学、蒙疆、蘭印、其の他の各グループを作つて、各成員そ

の志に従つてそれぞれの部門に属して東亜事情の研究にいそしんでゐる。今や明け行く東亜ブロックの領域を、北は蒙疆より南は南洋まで、彼等は新天地を求めて新秩序建設の一翼を張る日を夢見乍ら、唄ほがらかの丘に、駿足を秘めて来る日を待つてゐる。



語学乙類Fクラス

さらに同年四月二五日の『緑丘』第一四六号では「漸く春に巡り合つた大陸科 教授学科目整備さる」として、三年次向けの三つの学科目が開講されることを伝える。先の「乙類昭和十五年度実施予定学課程表」とは少し異なるが、手塚寿郎「東亜経済政策」、南亮三郎「支那民族論」（実際には「支那民族及社会」）、そして大野純一「支那貨幣金融論」（実際には「支那貨幣金融事情」）であり、第二学期には卜部岩太郎「支那倫理想史」（実際には非開講）と木部林二「満州国法制論」（実際には「満州国支那法制」）も予定された。三九年度からの学年進行で第一期生が三年次となり、ここに当初の「支那事情の学科」が整備されたのである。後述するように、それぞれの担当教員の「満州国」出張などを通じて、準備が整えられた。また、一年次と二年次には「武道」（剣道と柔道）が必修となった。

ここで、同時に設置された彦根高等商業学校の「本科第二部（東亜科）」の学科目（一九四一年度）を参照すると、「支那語」の時は数は小樽に比べてやや少ないが、「支那事情の学科」は、「近世東亜外交史」「民法商法及東亜法制」「東亜幣制金融論」「東亜経済論」「東亜商業貿易論」「東亜経済政策」「東洋史及東洋経済史」「東亜地理」、さらに「南洋経済事情」まで、手厚いものとなっている（彦根高商「教授要目」）。

『緑丘』第一四六号には「充実せる乙類」として、乙類選択の新入生を迎えて、二・三年生が「大歓迎会を催して色々組精神を鼓吹」したという記事がつづく。そこで配布されたプリントには「乙類の意義並に目的」や「指導理念」が明記されていた。「乙類生にとつて要求されるものは、将来は大陸に渡り、以て国策の第一線に立つて奮闘し、大陸に骨を埋めるといふ覚悟」が強調されている。

この「語学乙類」を担当するのは中国語の原岡武と外国人教師の周長英である。周は、関益良に代わり「語学乙類」新設直後に採用された（その採用状況については後述）。『緑丘』第一二三号（三九年五月二五日）は、北京出身の二五歳の青年教師について「長身、明朗の士で、教場に日支親善的授業の見られるのも近い」と紹介する。ほかに大野純一が主任的な役割を果していたとみられる。

なお、一九三九年四月現在の各語学科目の学生履修者数（必修・選択を合計）は、英語七七七名、ドイツ語二五五名、フランス語九二名、ロシア語三〇名、スペイン語六〇名、中国語二一名であった（庶務課「文部省往復綴」、一九四七年）。

過重な授業負担

戦時財政の逼迫にともなう予算節減として、文部省では一九四〇（昭和一五）年度から助教授の定員を六名から一名削減減することを通告してきた。実際の現員は四名だったため、直接の影響はなかったが、この指示に対して、次のような「実情」を訴えて「可然^{しかるべく}御考慮相仰キ度」という稟申書を送付している。もちろん、この要請は認められなかったが、四〇年時点での小樽高商の置かれた状況を示す史料となる。

「本校経営上、専任助教授四名ノ外二更ニ」三名の助教授が必要と訴える。まず、「身体強韌ニシテ、氣宇壮大、意力鞏固ナル志望者ヲ收容シ、支那語ヲ主トシ、コレニ東亜ノ文化、政治、経済等ノ知能ヲ修得セシムル特別学級」、

すなわち「語学乙類」を設置していたが、学年進行とともに授業負担が増加しており、「殊ニ増設学級ニ課スル毎週八時間宛ノ支那語ヲ担当スヘキ」助教授一名の採用を求める。

次に、軍事教練をさらに徹底し、「規律ヲ厳正ニシ、統制ニ服スル習慣ヲ養ヒ、併セテ身体ヲ錬磨シ、体位ノ向上ト精神力ノ振作ヲ図ル」ことが緊要だとして、助教授の採用を求める。すでに配属将校を通じて、経験に富んだ「除隊将校」に交渉中という。もう一人は「商業実践」の授業を充実させるために、「相当経験アル助教授一名ヲ以テ主任教授ヲ裨補セシムル必要アリ」とする。

こうした具体的な授業内容の拡充を述べて、定員を充足してもなお不足するところに、「減員セラル、ニ至レバ、本校教育ノ実施上、幾多ノ支障ヲ生スル虞アルハ頗ル遺憾トスル所」と訴えたが、認められなかった。その後、繰上げ卒業にともなうカリキュラム修正や教員の召集なども加わり、授業負担はますます重くなっていった。

では、実際にどの程度の授業をおこなっていたのだろうか。「昭和十六年度担任学科目並ニ其ノ毎週教授時数現状調」(「文部省往復綴」、一九四一年度)によると、専任教員二八名の平均は週一五時間(五〇分授業)となっている。最高は中国語の原岡武で二三時間、英語の小林象三も二二時間あり、総じて語学担当の教員は多くの授業をもっている(マツキンノンも二二時間となっている)。最少は七・五時間の横田弘之だが、「珠算」「商工実務」「商業実践」「研究指導」と科目数は多い。手塚寿郎は「経済学原論」「商業政策」「統計学」「東亜経済政策」「研究指導」で、一四時間である。南亮三郎は「経済学原論」「社会政策」「支那民族及社会」「研究指導」で、やはり一四時間となっている。これらは、現在の教員の授業負担に比べて、やや重いといえる。

繰上げ卒業

日米開戦を控えて、政府は一九四一(昭和一六)年一〇月一六日、大学や専門学校の徴兵猶予年限の短縮と在学

修業年限を六ヶ月以内短縮しうる勅令を發し、明春三月の卒業予定者は一二月に繰上げて卒業させることにした。すでに文部省からは九月五日付の「卒業期繰上ニ関スル件」により、「現下ノ緊迫セル時局ニ対処シ、国家ノ人的資源ニ対スル最高度活用ノ要望ニ応ズル為、出来得ル限り修業年限ヲ短縮シ、速^{すみやか}ニ国家ノ要請ニ即応スル措置ヲ講ズルハ喫緊ノ要務」として、「昭和十六年度卒業生ハ其ノ修学年限ヲ三ヶ月短縮シ、昭和十六年十二月ニ卒業セシムルコト」（庶務係「例規通牒綴」、一九四二年）という指示が届いていた。さらに一〇月八日付通牒では「教授時数ノ取扱ニ関スルコト」として、「高等商業学校 四十二時以内」の増加が求められた。

九月六日、第二学期始業式で苦米地校長は「この二ヶ月の間に時局は急展して、危機は目前に迫りつゝ、ある」（『緑丘』第一五二号）と訓辞して、学生の奮起を求めている。さらに、後述するように、三年生は七日から一週間の兵営宿泊を旭川で体験し、一九日には報国隊の結成式がおこなわれた。こうして教職員・学生に「学園の臨戦態勢」突入の覚悟が求められていた。実は、早くも「四月初旬始まるや、直ちに学生年限の短縮が噂され」（『緑丘』第一五七号、四年三月二五日）ていたという。したがって、学生たちには遂に来るべきものが来たという知らせだったが、特に三年生にとつてはやはり大きな衝撃だったはずである。

しかし、『緑丘』紙上から、その衝撃をみることはほとんどできない。一〇月二五日の第一五二号は、「今日程学徒に対する邦家の期待の大なる時代はなく、今回の措置も全く此の期待に應ずる方途の一端に他ならないのである。やがて国家の中堅として、且つ又指導者として、負荷の大任を全うすべき学生生徒は、此の際新なる覚悟と矜持とをもつて大いに奮起し、一層学業を励み、心身を修練し、以て他日の御奉公に備へなければならぬのである」と報じ、国家のために積極的に受け入れるべきという立場である。

翌一二月二五日の『緑丘』第一五三号は、論説で「年限短縮と学生生活」を取りあげる。論者は徴兵猶予短縮と卒業年限短縮の措置を「時局の推移からは必然」としたうえで、「かゝる事態に依つて、学生の有する事変への認識、

祖国への信念が変ることは絶対にあり得ない筈である」と力説する。そして、最後は「緊迫する祖国の危機、心して学徒は其の生活に対処すべきであるまいか、卒業年限の短縮こそ、学生生活への決定的なる警鐘である」と結ぶ。

学校側の『緑丘』紙面の指導統制は嚴重だったから、繰上げ卒業への違和感や不満が吐露されることはありえないが、この論説の執筆者は、卒業繰上げという非常事態こそ「緊迫する祖国の危機」に、学生が真摯に向き合う絶好の機会と真剣に考えている。むしろ繰上げ卒業に対する内心の不満により、「事変への認識、祖国への信念」が動揺・変形する懸念を一部の学生——それらの学生は雑事の「累積」に「生活の全てを忘れがち」になる——に対して抱き、警告を発していると読むことができそうである。

この卒業繰上げに直面して、積極的に受入れる者と納得しがたさを残す者を両端にして、多くの学生は「在学年限短縮は確かに大きな問題であった。然し、吾人はかゝる時局の故にこそ、残された僅かの時を思索に捧げよう」という思いでなかったろうか。『緑丘』第一五二号の「編集後記」の一節である。また、第一五七号の「昨年度を顧みて」という記事には「未来の飛躍を夢見つゝも、愛の絆切れぬ裡に、漏刻三年の砂、あわくも崩れ落ちるを静かに手にする彼等は、恐らく慟哭の想ひに丘を去つたことであらう」とある。学業を短縮せざるをえない「慟哭の想ひ」は深かったであろう。

ちょうど、この卒業繰上げにともなうさまざまな事態に対応を迫られていた一〇月一〇日、小樽高商は創立三〇周年の記念式典をおこなっている。前述の二五周年が大掛かりな記念行事を実施したのに対して、この三〇周年は記念式典と講演会、記念論文集の刊行程度にとどまった。記念式典における「我が学園モ国策ニ則リ、教職員生徒全員報国隊ヲ結成シ、入りテハ知得ノ研鑽ニ努メ、出デテハ国防体制下ニ修練シ、以テ皇運ヲ扶翼奉ルタメ、日夜勇奮敢闘致シテ居リマス」(『緑丘』第一五二号)という校長の式辞の実践として、折からの卒業繰上げは断行されていたといえよう。

小樽高商の具体的な対応をみると、急遽三年次二学期の学科課程を修正して実施するとともに、文部省に届け出た。履修期間が実質的に二ヶ月以上短縮となるため、一二月月上旬までに授業時間を増やすしかなかった（卒業試験は二月一〇日より実施）。規定上はそれまでの週三四時間が三九時間とされたが、実際にはそれ以上の延長がなされた。

修正学科課程ではまず「語学甲類」において、「商工実践及原価計算」「手形法」「海上保険論」が必修科目とされた。また、全員の必修科目である「商法」「会計学」「商業政策」「財政学」はそれぞれ規定の時間数から一時間ずつ増加となる。「甲類」も「乙類」も選択学科目は七時間となり、このなかに前述の「満州国支那法制」「東亜経済政策」「支那民族及社会」と「戦時経済法令」などが含まれていた。第一期からの「研究指導」は継続しており、学生たちはあわただしく卒業論文を仕上げていった。

この繰上げ卒業は三年生だけでなく、一・二年生にも連動した（翌年度以降は六ヶ月の短縮となり、九月卒業となる）。いつから実施されたのか不明だが、四二年一月一〇日付で実施中の「第一、二学年第二学期修正学科課程表」が報告されている。特徴は、授業時間数がやはり週三四時間から三九時間に増加したこと、選択学科目の大幅な減少（「語学甲類」のみ一年次二時間、二年次七時間。「語学乙類」はすべて必修科目）である。「語学甲類」に付随する必修科目として英語のほかに「外国貿易実務」「海運論」「銀行簿記」「経済政策一般」、「語学乙類」では「支那語」と英語のほかに「武道」「東亜経済史」「東亜経済地理」「漢文」が指定されていた。二年次に「研究指導」一時間が設定された。

多くの三年生は卒業前の臨時徴兵検査（後述）を受けて、文字通り丘を下って「入営」していったが、一部の上級学校進学者に向けて「臨時補習科」が設置された。進学の「推薦」を受けた者に三月末までの「補習教育」を義務的に施すもので、英語のほかに、法律学・経済学・商業学の各「特殊問題」をはじめ、選択学科目四時間を含め

て、週二六時間を課した（『緑丘三十五年史稿』）。文部省では上級学校への進学を定員のほぼ一割程度に抑制する方針をとったが、小樽高商ではこの「臨時補習科」に三〇名程度が所属した（『緑丘』第一五三号、四一年一月二五日）。四二年三月の入試では、東京商大・神戸商大・東北帝大・九州帝大・大阪商大・東亜同文書院大学・北大農業経済学科に、既卒業生も含めて二三名が合格している（『緑丘』第一五八号、四二年四月二五日）。

入試の激化

一九三六（昭和一一）年三月の入試から、入試期日が数日間繰り上がるといふ大きな変更があった。例年は三月三〇日前後と、全国の子科・高専のなかで最も遅い日程だった。その結果、「志望者の素質を低下した事は否めない、更に寒心すべきは学園に対する関心の稀薄となりたる点で、自己の価値を卑下する自滅的卑屈感と共に、著しく学生氣質に異分子的な空隙を与へた」という弊害が指摘されていた。こうして「学園の矜持擁護」（『緑丘』第九一号、三五年二月五日）のためとして、三月二五日からの入試と変更されたのである。

この変更に加えて、北大予科の入試と日程が重なるために、志願者の動向が注目されていたが、実際には「予想外に殺到」という事態となった。好景気にもなう上級学校進学熱の高まりという一般的な要因のほかに、「全体を通じてヒヤリング、ダイクテーション、漢文が減じ、又中学出身者よりは幾何が、商業出身者よりは商事要項が夫々削除されて、受験者の負担を減少せしめてゐる」と観測された。無試験合格者は中学が二一名、商業学校が一八名で、例年より多かつた（以上、『緑丘』第九二号、三六年三月五日）。

さらに『緑丘』第九三号（三六年五月一〇日）は入試期日の変更の結果、「新入学者の質的方面は格段の進歩を見た様」と歓迎する。また、「特に目立つ事は商業出身入学者が極めて多く七六名を数へ、前年に比し約二十名の増加を見た事」、入学者の平均年齢が満一八歳四月で前年より三月減っており、「中等学校の古い卒業者の入学が少なくなりつ、

ある傾向」もあるという。

さて、表は、ほぼ一九三〇年代の高等商業学校の入学志願者・入学者の年次別調である（高砂恒三郎『全体主義商業教育の構想』、高砂は大阪商科大学経済研究所主事）。全体的に眺めると、官立高商の場合、入学志願者数は一九三一年から四〇年の間に倍増している。総定員数は微増にとどまるため、受験競争が激化したことがわかる。おそらくこうした志願者数の増大とも関連して、三〇年代半ばには福岡高等商業学校、善隣高等商業学校、関西学院高等商業学校など、

一〇、商業専門学校入学志願者、入学者数年次別調（各年四）左右入学志願者

名 稱	學 科	年 次									
		昭和十五年	十四年	十三年	十二年	十一年	十年	九年	八年	七年	六年
山口高等商業学校	本 科	1,100	1,100	1,100	1,100	1,100	1,100	1,100	1,100	1,100	1,100
長崎高等商業学校	本 科	1,100	1,100	1,100	1,100	1,100	1,100	1,100	1,100	1,100	1,100
小樽高等商業学校	本 科	1,100	1,100	1,100	1,100	1,100	1,100	1,100	1,100	1,100	1,100
名古屋高等商業学校	本 科	1,100	1,100	1,100	1,100	1,100	1,100	1,100	1,100	1,100	1,100
福島高等商業学校	本 科	1,100	1,100	1,100	1,100	1,100	1,100	1,100	1,100	1,100	1,100
大分高等商業学校	本 科	1,100	1,100	1,100	1,100	1,100	1,100	1,100	1,100	1,100	1,100
彦根高等商業学校	本 科	1,100	1,100	1,100	1,100	1,100	1,100	1,100	1,100	1,100	1,100
和歌山高等商業学校	本 科	1,100	1,100	1,100	1,100	1,100	1,100	1,100	1,100	1,100	1,100
横濱高等商業学校	本 科	1,100	1,100	1,100	1,100	1,100	1,100	1,100	1,100	1,100	1,100
高松高等商業学校	本 科	1,100	1,100	1,100	1,100	1,100	1,100	1,100	1,100	1,100	1,100
高岡高等商業学校	本 科	1,100	1,100	1,100	1,100	1,100	1,100	1,100	1,100	1,100	1,100
計		11,000	11,000	11,000	11,000	11,000	11,000	11,000	11,000	11,000	11,000

商業専門学校入学志願者、入学者数年次別調
（高砂『全体主義商業教育の構想』）

私立の高等商業学校の創設が相次ぐ。

なお、官立実業専門学校を学校種別に見ると、商業の総定員は微増なのに対して、工業の総定員は三二年から四〇年の間に三倍強と大幅に増大している。工業系の入学志願者数が五割程度の増加具合からすると、相対的に商業系が狭き門になっている。

一九三〇年代後半、小樽高商の入学志願者は毎年増加し、とくに三九年には、志願者の殺到

した和歌山高商を除き、山口や長崎を凌いで最高となっている。

『緑丘』紙上から、入試関係の記事をたどろう。一九三八（昭和一三）年三月の入試では、志願者総数一四三八名の内、中学出身者一〇八六名、商業学校出身者三五二名となっており、入学者もほぼ同じ比率だった。ここで注目されるのは、北海道外からの志願者の割合が増大したことで、小樽試験場が四六一名に対して、東京試験場（東京外語）六八六名、京都試験場（京都帝大）二九一名となっていた。無試験入学者は、中学出身者が八名、商業学校出身者が二二名だった（『緑丘』第一〇九号、三八年三月二五日）。

出身別では、北海道が二四五名中一四六名と圧倒的多数を占める。福島・山形・宮城、さらに東京はそれぞれ八名前後である。樺太・朝鮮・関東州・満州国」からも少数ながら入学者があった（同、第一一〇号、四月二五日）。

三九年の入試は、「殺到願書、未曾有のレコード」となった。甲類一五〇〇名（中学出一〇六〇名、商業出四四〇名）、乙類三二〇名で、東京試験場八七二名、京都試験場三八二名、小樽試験場五五六名であった（無試験入学の仮合格者は三三名）。『緑丘』第一二二一号（三九年三月二五日）は、「物凄い迄の願書殺到に、先づ教務課で悲鳴をあげる」が、「此れも年々その真価を世に認められるに至つた本校の名声を慕つて、天下の隅々より馳せ参ずる優秀な緑丘人の卵であれば、又緑丘の進展を約する喜ぶべき現象である」と報じている。筆記試験は三月二二日と二三日で、体力検査が二四日に実施される。受験地別にみると、京都試験場が目立って成績がよかつたという。

入学者も過去最高の二九〇名にのぼつた。そのうち北海道出身者は一六九名である。六月一日には、新入生歓迎会があり、新入生代表からは「我々は小さな人間にはなり度くない。我々は大なる夢を孕んだ偉大なる未完成品である。この三箇年の緑丘生活を通して、より全き人格完成の為努力すべき旨」（同、第二四号、三九年六月二五日）の答辞があつた。

四〇年三月二五日の『緑丘』第一三三号では「窄き門は以前窄し、喘ぐ受験像一千六百」という見出しで、志願

者の殺到を「ダイナミックな景気の波に乗つて、その子弟を弾力性ある高商に向けんとする俸給生活者と、軍需インフレに依つて比較的余裕を生じ、子弟を進学させんとする中小業者とが、その因をなしてゐるのではないかと推測している。この年から、三日目の体力検査が強化された。何時の時代も変わらぬ試験場の情景は、次のように描写される。

十分、二十分、義務の前に何者とも妥協を許さぬ厳肅なる一時、音もなき静けさ。紙上を馳せる鉛筆の聲までが、心なしか巡回の教授の靴音に消されて遠く闇の彼方に葬られて行く、三十分、五十分、遅々たる秒速の中にも刻々と最後の審判の瞬間は綴られる。聖なる相剋だ。鉛筆なき中等校の入試にひきかへて、これは又何とした聖なる戦の一瞬だ。四百の敵を前にして運ぶ鉛筆の一筆、一筆に、灰色の生活を榮ある緑丘生活に切り換へるべきポイントの各々が含まれる。

前章でもみたように、入試問題はその社会状況を反映する。たとえば、一九四〇年三月の「国語」では、つぎのような「新日本文化」の建設を提唱する問題文である（『緑丘』第三四号、四〇年四月二五日）。

明治維新以来、西洋文化はタウタウとして流入し、著しく我が国運のリユウシヤウにコウケンするところがあつたが、その個人主義的性格は、我が国民生活の各方面に亘つて種々のヘイガイをカモし、思想のドウヤウを生ずるに至つた。併しながら、今やこの西洋思想を我が国体に基づいてジュンクワシ、以てハツラツたる新日本文化を建設し、これをケイキとして国家的大発展をなすべき時にサイクワイしてゐる。

国語の出題者は卜部岩太郎で、引用の「書取は平凡の問題であるが、誤謬が多かつた」という。出題は「国文調の問題と、漢文調の問題」であり、「漢文調の問題は他の学校ではあまり見ないものはあるが、本校に於ては漢文が独立してない関係上、漢文の知識をも験るために出題してゐる」とする。

四二年三月の英作文の問題は、「去年の十二月八日に始まつたこの戦争は、古今未曾有の大戦争である。この戦争がいつどの様に終るかは誰にも分らないが、我々は如何なる困難に遭遇しやうとも断乎としてこの戦争を戦ひぬかければならぬ」というものだったし、国語の作文では「戦時下に於ける学徒の使命」（緑丘 第一五八号、四二年四月二五日）が課せられた。

入学志願者は一九三九（昭和一四）年をピークに四〇年まで高水準を示すが、四一年にはほぼ半減する。これは全国の高商業学校に共通する現象で、高等学校と同じ受験日が設定され、いわゆる掛持ち受験ができなくなり、いずれか一校に絞らなければならなくなったのである。そのため、商業学校出身者（三七四名）に比べて、中学校出身者（四一名）の激減が目立つ。小樽試験場では四五〇名、東京試験場では二九九名、京都試験場では三六名が受験する（緑丘 第一四四号、四一年二月二五日）。

無試験入学の仮合格者は中学九名、商業三四名だった。三月一六日から試験日も繰り上がり、一日目は英語と国語漢文、二日目は数学または簿記・「国史」・口頭試問、三日目が口頭試問と身体検査だった。二七日、無試験組も含め、二四八名の合格者が発表された（「語学甲類」と「語学乙類」別）。このなかには、経済研究所と図書館の事務員として勤務していた浦島秀治と田森誠一郎がいた。

就職「黄金時代」

一九二〇年代後半の就職難が三三年（昭和八）以降に好転した後、三〇年代後半の就職状況は絶好調をつづけた。

『緑丘』の関係記事を見ると、「躍る軍需インフレの波に 決定者百名突破 百分のゴール間近に迫る」(第九二号、三六年三月五日)、「軍需景気の波に乗り 高商ボーイ朗か」(第九八号、三七年二月六日)、「時局に乗つて 早くも就職戦線活況 選択に戸惑ふ顔! 顔!」(第一〇三号、三七年九月二十五日)、「羽根生えて飛ぶ卒業生 高商黄金時代 百分の就職状況」(第一〇九号、三八年三月二十五日)、「時代の好況に迎へられ 健児の巢立近し! 既に就職大半決定」(第一一八号、三八年二月二十五日)、「今年度卒業生 全国的に各分野へ! 大陸へ四十名」(第一二二号、四〇年一月二十五日)という具合である。第九一号(三五年二月五日)には過去「数年来の就職率」が掲載されている。一九二七年は六七%(三月一〇日調)だったが、三一年・三二年は約三〇%(四月末調)に落ち込み、三四年から六七%(四月末調)と持ち直し、三五年も六六%(四月末調)という数値である。記事によれば「卒業生数は二年度の二三四名に対し、十年度は一九〇名と言ふ生産過剰であるから、同じ事とは言へ、本年度は昭和始つて以来の好成績であつた」。

『小樽新聞』でも「就職難は昔の夢 緑ヶ丘の春朗らか」(一九三六年三月六日)、「就職大量決定に春はほ、ゑむ 小樽高商の人気」(一九三七年三月六日)とされ、第一次世界大戦期に匹敵する「黄金時代」と評された。こうした就職「黄金時代」は、日中戦争の本格化によってさらに拍車をかけられた軍需景気の賜物であつた。たとえば、三八年度は「事変関係の軍需インフレ、又満支新天地開拓等々、好材料下に申込殺到し、卒業式現在に於ては就職志望者一七三名全部決定の豪華版」として、さらに詳しく次のように記している。

本年度就職状況の特異なる点は、工業鉦業運輸方面への拡大であり、又例年と異り、満州方面志望者が多くなく、内地好景気の為、大部分内地に納まつた事である。尚注目すべきは、本校開校以来初めて採用なりし会社が二十七、暫く振にて採用なりし会社十二あつた事である。

前者中著名なるものは、帝国人造絹糸、大同貿易、昭和人糸、東京電気、伊藤忠商事、兼松商店、川西倉庫、

満州拓殖、満州特殊工業、山下鋳業、東洋製罐、満蒙毛織、日本公周波重工業、大倉土木等である。

後者中主なるものは、日本郵船、興業銀行、三菱電機、塩水港製糖、古河電機、堀越商会、株式会社阿部功、満州採金等である。

三〇年代後半からの特徴の一つは、引用にもあるような「工業鋳業運輸方面への拡大」である。四〇年三月の卒業時では、銀行一八名、商事及貿易三三名、運輸一三名、保険六名に対して、工業七八名、鋳業一五名となっている（他に自営五名、進学五二名。『緑丘』第一三三三号）。四一年三月でも、工業は銀行や商事の倍以上である（第一四五号、四一年三月二五日）。具体的には日立製作所・川崎造船などの軍需産業への就職が目立ってきた。これにともない、北海道内での就職が減った。

もう一つの特徴は、「満州国」方面への就職が目立つことである。三六年には「隣邦満州国へ十数名の決定を見た事は力強い進出振り」（『緑丘』第九二号、三六年三月五日）を示す。三八年は「例年と異り、満州方面志望者が多くなく、内地好景気の為、大部分内地に納まつた」とあったが、四〇年には「滿北支」三八名、朝鮮三名、台湾一名という結果となり、「かく見る時、本校の地理的偏在は決して、その発展を制肘するものではない」（『緑丘』第二三二号）とされる。満州飛行機・満州軽金属・満州重工業・満州興業銀行などの会社名が並ぶ（『緑丘』第二三二号）。一九四〇年の『緑丘』「同窓会欄」には、緑丘会の「満州国」鞍山支部や中国の天津支部・北京支部創設の記事が載るようになる。『小樽新聞』にも「殆どが満州国入りと聞いては、北方の学校の特色が発現されたものとして、北方開発の闘志の卵として囁目される」（一九三六年三月六日）という。

高砂『全体主義商業教育の構想』所収の「高等商業学校卒業者就職先調」（四〇年五月一日）をみると、小樽高商の「満州」関係の就職は三一名で、長崎高商の四五名はともかく、山口高商の三七名に次ぐ人員であり、九州の大

校名	一三、高等商業學校卒業者就職先調		計	官	民	計	官	民
	就職先	就職先						
山崎高等商業學校	100	100	100	100	0	100	100	0
山口高等商業學校	100	100	100	100	0	100	100	0
小樽高等商業學校	100	100	100	100	0	100	100	0
名古屋高等商業學校	100	100	100	100	0	100	100	0
大分高等商業學校	100	100	100	100	0	100	100	0
彦根高等商業學校	100	100	100	100	0	100	100	0
京都山陰高等商業學校	100	100	100	100	0	100	100	0
福井高等商業學校	100	100	100	100	0	100	100	0
高松高等商業學校	100	100	100	100	0	100	100	0
高崎高等商業學校	100	100	100	100	0	100	100	0
計	1000	1000	1000	1000	0	1000	1000	0

高商卒業者就職先調 (高砂『全体主義商業教育の構想』)

分高商（二六名）、北陸の高商高商（二三名）を凌駕している。確かに「地理的偏在」というハンデを克服している。「語学乙類」設置や校長・就職担当教員の「満州」視察などの意気込みが実っていると見えよう。

『全体主義商業教育の構想』所収の表からは、全官立高商のなかで小樽高商の銀行への就職人員が最も多いこともわかる。これは長年の就職実績にもとづくものである。

一九四五年九月の「小樽経済専門学校概覧」には、五千以上の全卒業生の「就職先別」調が載っている。転職などを経たあとの四五年八月末時点の調査で、およその傾向をつかむことができるが、最多は工業の八七〇名で、商事及貿易五〇九名、銀行及信託四八七名、運輸及倉庫二九六名、鉱業二六一名とつづく。官吏と教員もそれぞれ二三三名、二八六名と多い。死亡者も五

六九名を数える。

さらに地域別の「分布状態」（四五年八月末）では、北海道は二三八八名と最も多く、ついで東京一〇〇二名、大阪二八五名とつづく。「満州」一三六名、「中華民国」一七〇名、朝鮮一〇〇名、樺太七〇名という数字も注目される。

教導部長として就職を担当する卜部岩太郎は、一九三六年四月、関東・関西方面の就職視察を終えて帰郷後、「大体系卒業生は仕事のやりぶりに就ては、真面目でよく働くと云ふので、断然同僚学校の内では光つて居る。たゞ行儀作法が良い方から云へば、素朴とか真面目とか云はれるが、人を相手にする社交上ではまづい点が多いと云つて居た」（『緑丘』第九三号、三六年五月二五日）と語る。また、松田新も高商生の長所として、「寒い所に育つた人達は整頓する特質を備へてゐる点と、頑張りが強く律儀な性質を持つてゐる点をあげる。一方で、就職先が二つが前後して定まる場合には「最初に決定した方へ必ず就職すると云ふ事は学校の伝統であり、原則」とし、「本年もこれで折角採用して戴いた銀行、会社で御断りした所もあつて甚だ恐縮して居ります」（同、第九八号、三七年二月六日）とも述べて、注意を喚起する。

さて、就職「黄金期」に恵まれて、「今こそ巢立つ 輝ける人生航路へ」と緑丘を送り出されたものの、すぐに物価高が新入社員を直撃する。「晴の支度」に「頭の前から爪先まで新しく揃へれば三百五、六十円がすつとぶと言ふ。約三割の昂騰ぶり。初任給六十円として、約半年飲まず食はずでやつとは」（『緑丘』第一三三号、四〇年三月二五日）という現実が待っていた。

第三節 研究体制の戦時化

氏名	研究題目	研究内容ノ大要	経費	研究開始年
下野隆吉	農業生産ノ研究	農業ノ生産力ノ関係 農業ノ生産力ノ関係	昭和五年 昭和六年 昭和七年 昭和八年 昭和九年 昭和十年 昭和十一年 昭和十二年 昭和十三年 昭和十四年 昭和十五年 昭和十六年 昭和十七年 昭和十八年 昭和十九年 昭和二十年 昭和二十一年 昭和二十二年 昭和二十三年 昭和二十四年 昭和二十五年 昭和二十六年 昭和二十七年 昭和二十八年 昭和二十九年 昭和三十年 昭和三十一年 昭和三十二年 昭和三十三年 昭和三十四年 昭和三十五年 昭和三十六年 昭和三十七年 昭和三十八年 昭和三十九年 昭和四十年 昭和四十一年 昭和四十二年 昭和四十三年 昭和四十四年 昭和四十五年 昭和四十六年 昭和四十七年 昭和四十八年 昭和四十九年 昭和五十年 昭和五十一年 昭和五十二年 昭和五十三年 昭和五十四年 昭和五十五年 昭和五十六年 昭和五十七年 昭和五十八年 昭和五十九年 昭和六十年 昭和六十一年 昭和六十二年 昭和六十三年 昭和六十四年 昭和六十五年 昭和六十六年 昭和六十七年 昭和六十八年 昭和六十九年 昭和七十年 昭和七十一年 昭和七十二年 昭和七十三年 昭和七十四年 昭和七十五年 昭和七十六年 昭和七十七年 昭和七十八年 昭和七十九年 昭和八十年 昭和八十一年 昭和八十二年 昭和八十三年 昭和八十四年 昭和八十五年 昭和八十六年 昭和八十七年 昭和八十八年 昭和八十九年 昭和九十年 昭和九十一年 昭和九十二年 昭和九十三年 昭和九十四年 昭和九十五年 昭和九十六年 昭和九十七年 昭和九十八年 昭和九十九年 昭和百年	昭和十三年
佐野隆吉	農業生産ノ研究	農業ノ生産力ノ関係 農業ノ生産力ノ関係	昭和五年 昭和六年 昭和七年 昭和八年 昭和九年 昭和十年 昭和十一年 昭和十二年 昭和十三年 昭和十四年 昭和十五年 昭和十六年 昭和十七年 昭和十八年 昭和十九年 昭和二十年 昭和二十一年 昭和二十二年 昭和二十三年 昭和二十四年 昭和二十五年 昭和二十六年 昭和二十七年 昭和二十八年 昭和二十九年 昭和三十年 昭和三十一年 昭和三十二年 昭和三十三年 昭和三十四年 昭和三十五年 昭和三十六年 昭和三十七年 昭和三十八年 昭和三十九年 昭和四十年 昭和四十一年 昭和四十二年 昭和四十三年 昭和四十四年 昭和四十五年 昭和四十六年 昭和四十七年 昭和四十八年 昭和四十九年 昭和五十年 昭和五十一年 昭和五十二年 昭和五十三年 昭和五十四年 昭和五十五年 昭和五十六年 昭和五十七年 昭和五十八年 昭和五十九年 昭和六十年 昭和六十一年 昭和六十二年 昭和六十三年 昭和六十四年 昭和六十五年 昭和六十六年 昭和六十七年 昭和六十八年 昭和六十九年 昭和七十年 昭和七十一年 昭和七十二年 昭和七十三年 昭和七十四年 昭和七十五年 昭和七十六年 昭和七十七年 昭和七十八年 昭和七十九年 昭和八十年 昭和八十一年 昭和八十二年 昭和八十三年 昭和八十四年 昭和八十五年 昭和八十六年 昭和八十七年 昭和八十八年 昭和八十九年 昭和九十年 昭和九十一年 昭和九十二年 昭和九十三年 昭和九十四年 昭和九十五年 昭和九十六年 昭和九十七年 昭和九十八年 昭和九十九年 昭和百年	昭和十三年
小津三	農業生産ノ研究	農業ノ生産力ノ関係 農業ノ生産力ノ関係	昭和五年 昭和六年 昭和七年 昭和八年 昭和九年 昭和十年 昭和十一年 昭和十二年 昭和十三年 昭和十四年 昭和十五年 昭和十六年 昭和十七年 昭和十八年 昭和十九年 昭和二十年 昭和二十一年 昭和二十二年 昭和二十三年 昭和二十四年 昭和二十五年 昭和二十六年 昭和二十七年 昭和二十八年 昭和二十九年 昭和三十年 昭和三十一年 昭和三十二年 昭和三十三年 昭和三十四年 昭和三十五年 昭和三十六年 昭和三十七年 昭和三十八年 昭和三十九年 昭和四十年 昭和四十一年 昭和四十二年 昭和四十三年 昭和四十四年 昭和四十五年 昭和四十六年 昭和四十七年 昭和四十八年 昭和四十九年 昭和五十年 昭和五十一年 昭和五十二年 昭和五十三年 昭和五十四年 昭和五十五年 昭和五十六年 昭和五十七年 昭和五十八年 昭和五十九年 昭和六十年 昭和六十一年 昭和六十二年 昭和六十三年 昭和六十四年 昭和六十五年 昭和六十六年 昭和六十七年 昭和六十八年 昭和六十九年 昭和七十年 昭和七十一年 昭和七十二年 昭和七十三年 昭和七十四年 昭和七十五年 昭和七十六年 昭和七十七年 昭和七十八年 昭和七十九年 昭和八十年 昭和八十一年 昭和八十二年 昭和八十三年 昭和八十四年 昭和八十五年 昭和八十六年 昭和八十七年 昭和八十八年 昭和八十九年 昭和九十年 昭和九十一年 昭和九十二年 昭和九十三年 昭和九十四年 昭和九十五年 昭和九十六年 昭和九十七年 昭和九十八年 昭和九十九年 昭和百年	昭和十三年
大野純一	農業生産ノ研究	農業ノ生産力ノ関係 農業ノ生産力ノ関係	昭和五年 昭和六年 昭和七年 昭和八年 昭和九年 昭和十年 昭和十一年 昭和十二年 昭和十三年 昭和十四年 昭和十五年 昭和十六年 昭和十七年 昭和十八年 昭和十九年 昭和二十年 昭和二十一年 昭和二十二年 昭和二十三年 昭和二十四年 昭和二十五年 昭和二十六年 昭和二十七年 昭和二十八年 昭和二十九年 昭和三十年 昭和三十一年 昭和三十二年 昭和三十三年 昭和三十四年 昭和三十五年 昭和三十六年 昭和三十七年 昭和三十八年 昭和三十九年 昭和四十年 昭和四十一年 昭和四十二年 昭和四十三年 昭和四十四年 昭和四十五年 昭和四十六年 昭和四十七年 昭和四十八年 昭和四十九年 昭和五十年 昭和五十一年 昭和五十二年 昭和五十三年 昭和五十四年 昭和五十五年 昭和五十六年 昭和五十七年 昭和五十八年 昭和五十九年 昭和六十年 昭和六十一年 昭和六十二年 昭和六十三年 昭和六十四年 昭和六十五年 昭和六十六年 昭和六十七年 昭和六十八年 昭和六十九年 昭和七十年 昭和七十一年 昭和七十二年 昭和七十三年 昭和七十四年 昭和七十五年 昭和七十六年 昭和七十七年 昭和七十八年 昭和七十九年 昭和八十年 昭和八十一年 昭和八十二年 昭和八十三年 昭和八十四年 昭和八十五年 昭和八十六年 昭和八十七年 昭和八十八年 昭和八十九年 昭和九十年 昭和九十一年 昭和九十二年 昭和九十三年 昭和九十四年 昭和九十五年 昭和九十六年 昭和九十七年 昭和九十八年 昭和九十九年 昭和百年	昭和十三年

「教官ノ研究事項ニ関スル件」(「文部省往復綴」1940)

一九四〇年の研究状況

文部省の指示で一九四〇(昭和一五)年九月三〇日付で報告した「教官ノ研究事項ニ関スル件」(庶務係「文部省往復綴」、一九四〇年)によつて、その大要をみよう。「現在研究中ノモノ」についての調査で、研究経費補助の有無や研究の開始年および「一段落予想年」の記入が求められている。

戦時時局にかなり密接に関わる研究として、卜部岩太郎「崇祖観念ノ研究」、室谷賢治郎「産業統制発展史」、高橋次郎「統制経済ノ理論的研究」、梶浦彦臣「経済統制法ノ基礎的問題」、岡本理一「計画配給論」があげられる。

また、本来の各教員の研究主題から一歩時局的なテーマに近づいているものとして、木部林二「企業法ニ於ケル公権ノ介入」、品川秀三「ゴム引布代用品ノ研究」、大野純一「樺太材」、井上紫電「法ノ目的トシテノ共同ノ福祉ノ観念」、松尾正路「思想、民族、及び社会史トシテノ東洋文化研究」、木曾栄作「国際経済ニ於ケル貿易ノ動向」、花村哲夫「西班牙語貿易通信並ニ中南米

教 員 姓 名	木 曾 榮 作	久 木 久 一	後 尾 正 路	木 村 重 義	井 上 常 雄
經濟制度ノ基 礎的研究	(一) 法蘭西研究ノ概 向ヲハ實業ノ動向 ニ對シテ	海上保險制度ノ 研究	シテノ東洋文 化研究	(一) フランス海峽 主權ノ研究 (二) 思想、民族、 及ビ社會史ト	法ノ目的トシテ 之ノ共同ノ點 點ノ研究
	(一) 經濟學ノ動向 ノ研究ニ對シテ 實業ノ動向 ノ研究ニ對シテ	一 保衛的ノ海軍の研 究 二 保衛的ノ空軍の研 究 三 保衛的ノ陸軍の研 究	シテノ東洋文 化研究	一 法蘭西海峽主權ノ研究 二 フランス海峽主權ノ研究 三 フランス海峽主權ノ研究 四 フランス海峽主權ノ研究 五 フランス海峽主權ノ研究 六 フランス海峽主權ノ研究 七 フランス海峽主權ノ研究 八 フランス海峽主權ノ研究 九 フランス海峽主權ノ研究 十 フランス海峽主權ノ研究	一 法蘭西海峽主權ノ研究 二 フランス海峽主權ノ研究 三 フランス海峽主權ノ研究 四 フランス海峽主權ノ研究 五 フランス海峽主權ノ研究 六 フランス海峽主權ノ研究 七 フランス海峽主權ノ研究 八 フランス海峽主權ノ研究 九 フランス海峽主權ノ研究 十 フランス海峽主權ノ研究
			小樽高等商業學校		
昭和十四年 昭和十六年	昭和十四年 昭和十五年 昭和十七年	昭和二十年		昭和十四年 昭和十八年	昭和十四年 昭和十六年

「教官ノ研究事項ニ関スル件」(「文部省往復綴」1940)

事情研究」などが数えられよう。ここに、南亮三郎「人口問題ノ理論的及ビ現実的研究」、手塚寿郎「國際貸借ノ理論的並ビニ実証的研究」も加えてもよいかもしれない。後述するように、南も手塚もその具体的な研究対象として「満州国」に関心を深めていく。

高橋次郎を筆頭に木曾・岡本・横田弘之が名を連ねる「北海道経済研究所」の共同研究としてあげられている「北海道工業論」「北海道貿易史」も、戦時下北方圏の問題として展開される。

これらの研究は、『商学討究』誌上に、また後述する『国家と戦争』・『戦争と経済』や『総力戦経済の研究』(いずれも『商学討究』の特集号として発刊)に収録されるほか、各人の著作・論稿の成果として出現する。時局的な要請とほとんど無縁な研究といえそうなのは、浜林生之助「英語ノ背景トシテノ英米事情ノ研究」、小林象三「(一) 英語散文律 (二) 英詩 (三) 劇(四) 英語発音学」、西田彰三「日本内地産蒟蒻植物ノ胚发育並ニ蒟蒻細胞發生ニ関スル研究」などである。もともと浜林の研究の一端はまもなく米英国民性

横濱 教授 日弘 之	岡本 教授 理一	木曾 教授 榮作	高橋 教授 次郎	所澤 教授 北澤道新 研究	横本 教授 誠	高橋 教授 次郎	教 授 野村 純一	大野 教授 純一	南 教授 高三郎	久木 教授 久一	教 授 赤川 節三郎 （「國策實踐科」） 研究ノ研究
	〔北海道実業史〕		〔北海道工業立〕 地誌		〔北海道工業立〕 地誌	経済ノ発展ニ関スルモノヲ 如何ニ奨励スルカノ道 路ノ研究	産業政策ノ研究	人口問題ノ理論 的及び現實的研究			「國策實踐科」 研究ノ研究
〔北海道工業立〕 地誌	〔北海道工業立〕 地誌	〔北海道工業立〕 地誌	〔北海道工業立〕 地誌	〔北海道工業立〕 地誌	〔北海道工業立〕 地誌	〔北海道工業立〕 地誌	〔北海道工業立〕 地誌	〔北海道工業立〕 地誌	〔北海道工業立〕 地誌	〔北海道工業立〕 地誌	〔北海道工業立〕 地誌
〔北海道工業立〕 地誌	〔北海道工業立〕 地誌	〔北海道工業立〕 地誌	〔北海道工業立〕 地誌	〔北海道工業立〕 地誌	〔北海道工業立〕 地誌	〔北海道工業立〕 地誌	〔北海道工業立〕 地誌	〔北海道工業立〕 地誌	〔北海道工業立〕 地誌	〔北海道工業立〕 地誌	〔北海道工業立〕 地誌
〔北海道工業立〕 地誌	〔北海道工業立〕 地誌	〔北海道工業立〕 地誌	〔北海道工業立〕 地誌	〔北海道工業立〕 地誌	〔北海道工業立〕 地誌	〔北海道工業立〕 地誌	〔北海道工業立〕 地誌	〔北海道工業立〕 地誌	〔北海道工業立〕 地誌	〔北海道工業立〕 地誌	〔北海道工業立〕 地誌
〔北海道工業立〕 地誌	〔北海道工業立〕 地誌	〔北海道工業立〕 地誌	〔北海道工業立〕 地誌	〔北海道工業立〕 地誌	〔北海道工業立〕 地誌	〔北海道工業立〕 地誌	〔北海道工業立〕 地誌	〔北海道工業立〕 地誌	〔北海道工業立〕 地誌	〔北海道工業立〕 地誌	〔北海道工業立〕 地誌

「教官ノ研究事項ニ関スル件」〔文部省往復綴〕1940

への発言となる（後述）。

戦争への傾斜と協力

『緑丘』紙上でも、時局的な評論が掲載される。それは、それぞれの専門領域での研究成果や知見を、学生や卒業生を対象に平易に啓発的に発信しようとしたものといえる。日中戦争後のいくつかをみよう。

まず、一九三七（昭和一二）年一〇月二五日の第一〇四号掲載の大野純一「悪性インフレは不可避か？」

である。日中戦争の本格化にともなう公債の大量発行が「通貨の膨張を来し、物価騰貴を惹き起す」のではという懸念に対して、その巨額公債の「数字に驚いて敵機の襲来でも受けた様に、周章狼狽することは、敢て大陸政策を強行せんとする大国民として恥ぢなければならぬ」。現下の情勢に於て軍事費支出が至上命題である限り、徒らに不安焦燥に駆られることなく、最少の国民経済的犠牲を以て、その捻出を図ることに努力しなければならぬ」と、国民の覚悟次第で悪性インフレを防ぐことができるとする。

手続 教授 専任	講師 本館 私志	同館 本館 一	講師 本館 一	助教 花村 哲夫	助教 玉井 武
(一) 経済学 (二) 政治学 (三) 社会学 (四) 心理学 (五) 倫理学 (六) 教育学 (七) 宗教学 (八) 美術学 (九) 音楽学 (十) 体育学 (十一) 農学 (十二) 工学 (十三) 医学 (十四) 法学 (十五) 文学 (十六) 史学 (十七) 地理学 (十八) 天文学 (十九) 地質学 (二十) 気象学	経済学 政治学 社会学 心理学 倫理学 教育学 宗教学 美術学 音楽学 体育学 農学 工学 医学 法学 文学 史学 地理学 天文学 地質学 気象学	(一) 経済学 (二) 政治学 (三) 社会学 (四) 心理学 (五) 倫理学 (六) 教育学 (七) 宗教学 (八) 美術学 (九) 音楽学 (十) 体育学 (十一) 農学 (十二) 工学 (十三) 医学 (十四) 法学 (十五) 文学 (十六) 史学 (十七) 地理学 (十八) 天文学 (十九) 地質学 (二十) 気象学	(一) 経済学 (二) 政治学 (三) 社会学 (四) 心理学 (五) 倫理学 (六) 教育学 (七) 宗教学 (八) 美術学 (九) 音楽学 (十) 体育学 (十一) 農学 (十二) 工学 (十三) 医学 (十四) 法学 (十五) 文学 (十六) 史学 (十七) 地理学 (十八) 天文学 (十九) 地質学 (二十) 気象学	(一) 経済学 (二) 政治学 (三) 社会学 (四) 心理学 (五) 倫理学 (六) 教育学 (七) 宗教学 (八) 美術学 (九) 音楽学 (十) 体育学 (十一) 農学 (十二) 工学 (十三) 医学 (十四) 法学 (十五) 文学 (十六) 史学 (十七) 地理学 (十八) 天文学 (十九) 地質学 (二十) 気象学	外国貿易ニ関スル 本館ノ研究
経済学 政治学 社会学 心理学 倫理学 教育学 宗教学 美術学 音楽学 体育学 農学 工学 医学 法学 文学 史学 地理学 天文学 地質学 気象学	経済学 政治学 社会学 心理学 倫理学 教育学 宗教学 美術学 音楽学 体育学 農学 工学 医学 法学 文学 史学 地理学 天文学 地質学 気象学	経済学 政治学 社会学 心理学 倫理学 教育学 宗教学 美術学 音楽学 体育学 農学 工学 医学 法学 文学 史学 地理学 天文学 地質学 気象学	経済学 政治学 社会学 心理学 倫理学 教育学 宗教学 美術学 音楽学 体育学 農学 工学 医学 法学 文学 史学 地理学 天文学 地質学 気象学	経済学 政治学 社会学 心理学 倫理学 教育学 宗教学 美術学 音楽学 体育学 農学 工学 医学 法学 文学 史学 地理学 天文学 地質学 気象学	経済学 政治学 社会学 心理学 倫理学 教育学 宗教学 美術学 音楽学 体育学 農学 工学 医学 法学 文学 史学 地理学 天文学 地質学 気象学
経済学 政治学 社会学 心理学 倫理学 教育学 宗教学 美術学 音楽学 体育学 農学 工学 医学 法学 文学 史学 地理学 天文学 地質学 気象学	経済学 政治学 社会学 心理学 倫理学 教育学 宗教学 美術学 音楽学 体育学 農学 工学 医学 法学 文学 史学 地理学 天文学 地質学 気象学	経済学 政治学 社会学 心理学 倫理学 教育学 宗教学 美術学 音楽学 体育学 農学 工学 医学 法学 文学 史学 地理学 天文学 地質学 気象学	経済学 政治学 社会学 心理学 倫理学 教育学 宗教学 美術学 音楽学 体育学 農学 工学 医学 法学 文学 史学 地理学 天文学 地質学 気象学	経済学 政治学 社会学 心理学 倫理学 教育学 宗教学 美術学 音楽学 体育学 農学 工学 医学 法学 文学 史学 地理学 天文学 地質学 気象学	経済学 政治学 社会学 心理学 倫理学 教育学 宗教学 美術学 音楽学 体育学 農学 工学 医学 法学 文学 史学 地理学 天文学 地質学 気象学
経済学 政治学 社会学 心理学 倫理学 教育学 宗教学 美術学 音楽学 体育学 農学 工学 医学 法学 文学 史学 地理学 天文学 地質学 気象学	経済学 政治学 社会学 心理学 倫理学 教育学 宗教学 美術学 音楽学 体育学 農学 工学 医学 法学 文学 史学 地理学 天文学 地質学 気象学	経済学 政治学 社会学 心理学 倫理学 教育学 宗教学 美術学 音楽学 体育学 農学 工学 医学 法学 文学 史学 地理学 天文学 地質学 気象学	経済学 政治学 社会学 心理学 倫理学 教育学 宗教学 美術学 音楽学 体育学 農学 工学 医学 法学 文学 史学 地理学 天文学 地質学 気象学	経済学 政治学 社会学 心理学 倫理学 教育学 宗教学 美術学 音楽学 体育学 農学 工学 医学 法学 文学 史学 地理学 天文学 地質学 気象学	経済学 政治学 社会学 心理学 倫理学 教育学 宗教学 美術学 音楽学 体育学 農学 工学 医学 法学 文学 史学 地理学 天文学 地質学 気象学

「教官ノ研究事項ニ関スル件」(「文部省往復綴」1940)

第一〇六号(三七年二月二五日)で「満州国新民法の制定」を論じた梶浦彦臣は、「日滿不可分の原則に基き、日滿両国に略同一の民法が行はれることの便宜が先づ考慮せられて、我民法を骨子として組立てられてゐることも当に然るべきこと」というスタンスである。そして、「新民法が世界最高水準を示すに足る立法たることは以て知るべく、これが実施の暁には満州国の法治国としての威容に一段の精彩を添へること、なるであらう」と礼賛する。

スペイン内乱に関連して、第一一六号(三八年一〇月二五日)に「スペイン人の国民性」を寄せた花村哲夫は、スペイン史を概観し、「彼等性来の本性なる強力に対する憧憬を満たすべき偉大なる統率者」を持たなかつたが、「この時に当り、フランコ将軍が世界の敵コンミンテルンを排除し、敢然と全体主義を振翳し、雄々しくも国家統一を目指し、聖戦に乗り出し、全国平定も最早時期の問題と見らるゝに到つたのは、防共国日本として喜ぶべき事である」と論じている。

玉井武は、実際に「満州国」各地の日本人移民地を

視察してえた見聞をもとに、第一一六号と第一一七号で「国策移民の一貌」を報告する。その結びは、「第一次移民地彌栄村、第二次移民地千振郷ともに、今や独立経済の域に達し、村行政及び農事組合の形を整へ、其の基礎を確立し、まさに第二期計画を樹立し、躍進一番せんとしつつある現況にして、第三次以下も之について鋭意経営を進めつ、あり。北満の曠野に鋤をとりて民族協和の実をあげ、産業の開発、国防の充実に貢献し、他方文化の向上に資しつつある移民の姿こそは、日満不可分の関係を如実に語るものといふべきか」（三八年一月二五日）となっている。

アジア太平洋戦争開戦直後の時評的論文をみよう。大野は「こゝでも「大東亜戦争と財政」を論じている（第一五五号、四二年二月二五日）。「莫大な戦費を負担するに足るだけの経済力が用意されてゐるか」という懸念に対して、満州事変以来の「我国財政の膨張は生産力拡充の推進力たる作用を営んで来た」と述べるとともに、新たに南方資源を獲得するゆえに、財政面からみても「英米何者ぞ」と豪語し、「我々はこの経済力の確信の上に、この世紀の決戦を勝抜かうではないか」と呼びかける。

四二年二月二五日の第一五六号は「大東亜戦争と経済」という特集を組み、木曾栄作「大東亜共栄圏と貿易問題」と横田弘之「東亜共栄圏の理論——その経済地理学的論拠に於て——」を載せた。木曾は、「日満支を一体とする工業立地政策が、この第二圏たる南方地域との貿易政策と平行的に樹立さるべき必然性を持つ」としたうえで、「貿易調節上の問題」、すなわち「軍需資源の確保を第一とすること」とともに南方地域生産品の地域調整の必要性、および「貿易決済方法」について、研究しなければならないとする。

横田は、この論文を「東亜共栄圏の確立と云ふ、所謂東亜新秩序建設のためには、そこに一定の原理乃至理論の明確な把握が必要であり、これなくして、真にその遂行は期し難い」という認識から始める。その横田は、後日、「国防産業立地の問題」を第一七四号（四三年八月二五日）に寄稿するが、その結びは次のようになっている。

翻つて想ふに、今や戦力増強の掛声は頓に激しく、しかもその裏付けたるべき生産力の増強は周知の如く、従来、一に原料資源の超重点主義、一に従業員、労務者等の真に報国的作業魂の昂揚を必須としつつあるが、吾々は茲に、先づ以てそれらの根底的配慮たる、諸産業に関する生産地帯の対空襲時安全性の確保、即ち一切の産業立地的適正配分乃至配置が、現下瞬時もゆるがせにされてはならぬ緊要な問題たることを、茲に強調せねばならぬと思ふのである。斯かの意味に於ても、一入吾ひと々は、右の国防産業立地に関する学的究明の必要性を深く痛感するものである。

これらでは、いずれもそれぞれの専門領域において、戦争遂行・戦力増強のための「学的究明」や貢献が追及された。そこには、「現下の情勢」に対する冷静な合理的な批判的姿勢はなく、所与のものとしてその事態・状況を受け入れるところから出発していた。もちろん、それは小樽高商において突出したものではなく、ほとんどの研究者の陥つたところであるが、「入りテハ知得ノ研鑽ニ努メ、出デテハ国防体制下ニ修練シ、以テ皇運ヲ扶翼シ奉ル」（創立三〇周年式典における苫米地校長の式辞、四一年一〇月一〇日、『緑丘』第一五二号、四一年一〇月二五日）という学校全体の決意を忠実に実行しようとするほど、その陥穽は大きく、深くなつていった。

『国家と経済』・『戦争と経済』

このような学内の大勢としての戦争への傾斜ないし協力は、「紀元二千六百年記念論集」を銘打つ『国家と経済』（一九四〇年二月刊）と「小樽高等商業学校創立三十周年記念論集」を銘打つ『戦争と経済』（四一年二月刊）、そして「手塚寿郎教授追悼記念論集」を銘打つ『総力戦経済の研究』（四四年三月刊）という学術的成果としてあらわれた（いずれも『商学討究』特輯号として発刊）。『総力戦経済の研究』は後にふれるので、前二者をみる。

『国家と経済』の序文で、国際貿易論に一家言をもつ苦米地校長は「現代は寔に^{まこと}学問鎖国主義時代たるの觀を呈せり。於是^{こゝに於て}苟も国家の進展を企図せんとせば、各国独自の立場に於て国家的学問の建設、真理の探究に邁往勇進せざるべからざるに至れり」と述べる。学問の普遍性の追究以上に、「各国独自の立場」、すなわち日本の立場による「国家的学問の建設」が急がれるとする立場である。

苦米地の意気込み通りに、『国家と経済』の収録論文が日本的な立場からの「国家的学問の建設」へと収斂しているわけではないが、全体的にはその書名にふさわしく戦時国家の諸政策・方向性に沿うような内容となっている。室谷賢治郎「産業統制発展史論」は「特に第十六世紀の独逸をテーマ」としつつも、その背景には「競争の生ずるところ、そこには必然的に不可分の配偶として独占運動が招来せられるのである。固より経済生活が複雑を加へるに伴ひ、独占運動も複雑な形態を示すが、併しその本質には変りはない」という現状の「産業統制」を肯定する認識がある。

岡本理一「計画配給論序説」は、現に進行しつつある統制経済を理論づけようとする。「消費の自由」論は「過去においては正当なことであつたかもしれない」が、それは「国家の政策が円満に遂行される範囲内においてのみ許容さるべきものにして、国家目的に違反してまで自由の承認される理由はな」く、「謂はゆる国策の線に沿ふ限度内においてのみ「消費の自由」は認められるべき」と断じる。そのためには国民への消費者教育が重視されるともに、「種々の違反を敢へて行ひ、国家経済の妨害をなす者に対しては嚴罰を課し、以て可及的事犯を未然に防止する」とがのぞましい」とも提言する。

高橋次郎「労働振興を繞ぐる景気問題」も、現状への理論化の試みといえる。恐慌対策としての労働振興をその調達や充當の観点から検証し、結びの一節——「国家の投資的活動を通して行はれる労働振興による再生産過程に於いては矛盾が激成されるから、かゝるインフレーションが極端に走ることを防止するためには、国家によつて統



『総力戦経済の研究』(1944)



『戦争と経済』(1941)



『国家と経済』(1940)

制経済政策が必然的に採られなければならない事になる。即ち、インフレーション防止の直接的方策としては先づ何を措いても価格統制が必要とせられ、それを補完する意味に於いて生産拡充政策と消費節約政策とが併用せられること、なる——が導かれる。

巻頭の南亮三郎「国際産児率の減退と人類計画生態論」でも、「自由主義経済は今やそのあらゆる悪と功績とともに葬り去られ、新たな型の経済がこれに代つて人類文化史上に登場しようとしてゐる」とする。ただし、主題とするところの「人口問題」も「又一拳に在来の軌道とは根本的に異なる方向に追ひ進めらるゝものと思ふの愚に陥つてはならない」と踏みとどまる。まだ、この時点ではフリードリッヒ・リストの言葉——「芸術や工業」は「自由や保護や支持の与へられる都市や国へ」避難・移動した。「到る処、これ等を放逐したものは無知と専制とであり、誘致したものは、自由の精神であつた」——に依拠しているからである。

人文領域の佐々木一義「全体的立場と個人的立場」、松尾正路「シャルル・モーラスの政治と知性」も「国家的学問の建設」に関わる論稿である。前者では「全体主義が世界を風靡する」必然性を考察している。「民主主義的政治形態を通して、個人主義と同一の基底の上に立てられてゐる資本主義経済の行詰りを全面的に打開する事は、確かに矛盾した、寧ろ不可能な、事実」に属する」として、「之が解決は、経済を組織化し再編

成する為の、個人主義とは立場を異にする別個の、そして新たな指導原理の樹立が要求」されるとする。すなわち、「指導原理としての全体主義思想の、個人主義・自由主義の全般的批判であると共にそれらの克服」である。

松尾論文が対象とするモーラスは、王道主義者でフランス革命に反対し、地方主義の論陣を張った人物だが、「モーラスの一切を拒否した祖国は、異なる民族的性格と組織を持つとはいへ、政治の基礎的理念と動向に於てはモーラスのすべてを受容したところの独裁者達によつて征服された」。その思想の核を、「国家権力の発動は、土と血の共同の面に於て絶対的に行はれる政治行動である。それは、民族国家に於ける最高秩序の支配であり、従つて最高の民族道徳は服従に在りとされる」という点に求める。そして、「モーラスの老軀、今、果して祖国の地上に在りや否や？」という問いかけに、松尾のモーラスへの傾倒をみることができよう。

一年後、創立三〇周年を期して『戦争と経済』が発刊される。苦米地校長の序文は、先の日本的な立場による「国家的学問の建設」を急務とする論から、さらに切迫したものとなっている。「口に公益優先を説き、行に私益を包蔵」する「時局便乗の徒輩」があらわれるなど、「思想が混濁し、国民道徳が遅緩し、近代科学も亦我が国風に醇化せられてゐない」現状に危機感を強めているからである。そこで、「一刻も速に現段階を経過して国民をして本来の姿に帰らしむる研究が緊喫」であり、「今日学に志すものは必ず憂国の士たるべく、其の任務遂行に当つては不惜身命の覚悟があらねばならぬ」とする。

『国家と経済』と異なつて、卒業生の論稿をも収録している。郡菊之助「戦争と経済統計学」、大泉行雄「戦争と営利の関係」、吉田秀夫「戦争と消費経済」、実方正雄「重要産業団体の法律的構造」の四編である。

巻頭の高橋次郎「戦争経済の「政治的均衡」の「緒——戦争経済の性格と其の課題」の次の一節は、この論文集全体の問題意識を反映したものと見えよう。と同時に、小樽高商（に限らずだが）の研究がこうした「戦争経済」に集中していくこと、そのリーダー・シッブをとるのが高橋であることも予測させる。

経済学の課題もまた、戦争と云ふ新なる条件の下に於いて経済の秩序の再発見をなす事となつた。吾々がその中に身を置く所の戦争経済と云ふ現実の中から、新なる経済理論を求めるところこそ、正に吾々のなすべき職域奉公に外ならない。戦争を前にして解明を求めると問題は山積して居る。嘗つて、恐慌の原因、投資不足、消費不足などに関する理論が景気論文又は動態経済理論の中心であつたが、今日では国民経済と経済統制とに役立つ様な全く違つた問題がその解決を迫つて居る。即ち、戦争経済の発展に伴れて増大せざるを得ない軍需生産のために必須なる物資と貨幣とは如何にして調達せられるか。それがためには如何なる統制的措置が採られるか。完全就業経済の均衡は何処に成立するか。そして其の機構は如何様であるか。如何にすれば現在の完全就業状態が長期間に亘つて安定され得るか。

この論稿では高橋自身の考察は統制経済の第二の型とされる「国防経済」に向けられ、さらに「広域経済」の建設が展望される。

室谷「国防経済の歴史的考察」は、「第十六世紀以来、国民国家の採つたマーカンチリズムこそは、富国強兵の術策に他ならぬものであつて、国防経済体制確立の要請は夙にこの頃に萌芽を有する」として、「国防経済の「原型」たるルイ一四世期のコルベールを論じる。

手塚寿郎「戦争の動因としての経済」は、表題についてのマルキシズムによる説明を検証・批判する論稿である。「マルキシズムの帝国主義論は資本主義体制下の戦争の説明を目指しているに過ぎない」として、ヒルファディングやレーニンの「戦争の動因としての経済を見る」ことの誤りを説くが、「吾々の考」までは展開されなかつた。

南亮三郎はその表題とする「マルサスの戦争及び移植民論」を詳細に検証して、「民族闘争の人口学的考察」を意

図している。そこでマルサスから導かれるのは、「人口過剰は戦争の原因ではあるとはいひながら、時にはその戦争の準備のために、ことさら人口の過剰が策せられることがあるといふ点」、「無用の戦乱はこれを避けるところの併し真実に強固なる「国防国家」の確立を、その人口対策を通じて祈念してゐたといふ点」である。ここではまだ、それらを現実の日本にあてはめるには至っていない。

岡本理一「計画配給と消費組織」は、『国家と経済』所載の「計画配給論序説」の統編ともいふべき論稿である。「計画配給は戦時統制経済乃至計画経済のもとにおける生産物の需給を適切に調節する目的を以て採られる政策にして、すでに生産組織並に配給組織に対しては国家意思に基く計画化の行はるべきは当然のことに属し、こゝに真に我が国情に適応したる消費組織を考究、設定する重要性が存在すると思はれる」とあるように、現実的な要請に積極的に応えようとする。「ソ聯計画配給と消費組合」を「他山の石」とし、町内会・部落会・隣保班、消費組合・産業組合・商業組合について言及している。

木村重義「軍需工業に対する陸軍の会計統制」は、「陸軍が軍需工業の経理を統制せんがために設けた規定にして、しかも主として会計技術的規定である所のものを検討」する。そのスタンスは、「決言」の「陸軍が会計統制の斯る広般な実験をしてくれることを学問の進歩のために喜ぶ」という一文に明らかだろう。

久木久一はその専門の「海運論」の立場から、「海上保険に於ける戦争危険約款」を寄稿する。「戦争危険に対する保険証券上の責任」や「戦争危険約款の解釈」などを論じたうえで、「戦争危険はその惨害は広汎深刻なる為保険者に重大な責任を及ぼすを以て、之を其の責任から排除し又は特に特別の保険料を以てその負担とするものであるから、これを他の海上危険に優先して取扱ふは当然であると言はねばならぬ」と結論づける。

戦争から離れて

大半の教員がその研究を戦争に巻き込まれていく、あるいは積極的に自らの「学的究明」を志向していくのに対して、あえて自らの研究を戦争に近づけず、意識的にか無意識にか距離を置き、それまでの研究スタイルをくずさない少数の教員が存在した。

ともに英語を担当する小林象三と岩田一男をそういつてよいだろう。そうした姿勢の堅持がおそらく困難になるアジア太平洋戦争開戦前後をみると、小林は四一年二月の繰上げ卒業式後、京都に文献探索の「研究の旅」に出かけ、その収穫を『緑丘』第一五五号（四二年一月二五日）で披露する。第一七四号（四三年八月二五日）掲載の「ギアレスとリネット」は、「アーサー王物語序詞に次ぐ十編の物語の最初の長詩」の紹介であった。

映画好きで知られる小林は、報国団文化部の懸賞映画論文の審査評を書いているが、その一つについて「論旨が少しく独断的のやうにみえた。時代の反影のためか、映画の政治性のみがあまりに重要視されすぎた傾きがある」



小林象三と映画サークル

と述べた。それは「国家が政策と云ふものを大東亜戦争完遂に置くとするなら、映画の政策性もそれと同様であり、戦争完遂に協力する事となる。茲に映画も戦つてゐる、映画は弾丸であると云ふ事が可能となつてくる」（近藤敏彦「現体制下に於ける映画の地位」、第一七七号、四三年二月二五日）という論旨の論文であり、小林の映画観はその対極の芸術性・娯楽性にあつたと思われる。推測を逞しゅうすれば、「映画は弾丸である」をスローガンとする戦意高揚映画が幅を利かすような時代と社会に対して小林は不快であり、自らの英文学の世界に没入していたのではないか。

戦後数年たつて、「実は私としては戦争中は一番よく英語の勉強の出来た時代であった」（同、第三七・三三八号、一九五一年四月一五日）と記す。それは、英語をめぐる社会

的な圧迫のなかでの孤立と、逆にそれゆえの沈潜があったことを示そう。

小林は、自らの文章の最後を戦時下でも西暦の日付で通している。先の「ギアレスとリネット」は、「八、一六、一九四三」であった。それは岩田一男にも共通する。

戦後は受験英語でもよく知られる岩田は、一九三八年に赴任し、四四年まで在籍する。『緑丘』紙上では軽妙洒脱なエッセイをたびたび載せるが、そこには戦時下の風潮にはなびかない堅い意思が秘められている。たとえば、四〇年九月二五日の第一三九号掲載の「ちよつとした話」では、デパートでみた「従軍画」（戦争画）について売却済みの絵は主に「戦闘ではなくて支那の風景」であったとして、そこに「芸術と不芸術を、ほんとうそを、ちゃんと区別するこの選択に、黙々とした民衆の心を、その確さを読みとれる」と書く。さらに、「芸術の政治的価値と芸術的価値をめぐる論争」を想起し、「芸術価値の軸は芸術的価値だけだ」と断言した中野重治に想いをはせる。ただし、中野の名は出さず、「夜明け前のさようなら」の詩人という。

第一四八号（四二年六月二五日）の「閑古鳥文」は、「さきごろの霖雨なみだで旅にもゆけず、つれづれに伊勢物語など読んでみた。心に白雲の湧くやうな青き日は、宇宙とぢかに話したし。つまり閑古鳥など鳴き呆ほうけてゐる懈怠の姿と他人には映るであらう」という調子であり、第一五三号（四二年一月二五日）の「正倉院のゲンゲの花」は、小堀杏奴あんぬ『妻への手紙』と『晩年の父』から森鷗外の創造の場について、思いを巡らす文章である。戦時下の気配はどこにもみられない。その後、岩田のエッセイを『緑丘』紙上に見出すことはできない。

同じ英語科の浜林生之助の場合は、教導部長兼生徒主事で学校運営の中核にすることもあって、原則として戦争推進の立場にいる。「大東亜戦争と英米国民性」（第一五五号、四二年一月二五日）では、アメリカがかつてその国民性の基調をなしていた「敢闘の精神」をなくし、「精神力こそは遙かに物質を超越した偉大なる力であること」を悟らぬ愚かな国になったのに対して、イギリスは老獪かつ「強靱な性格のもち主」で、「この粘り強いブル・ドッグを参らす

ことが出来るか、これが今後の問題である」とする。浜林の意図は、緒戦の大勝利で米英「与し易しと多寡をく、る」ことを戒め、「本格的な戦争はこれから」であり、武力戦以外のところで「国民は向ふの国民を相手として辛抱競べをせねばならない」とする点にある。

しかし、実際には世間には鬼畜米英視が蔓延する。「米国々民性について」（第一七七号、四三年一月二五日）は、それを痛烈に批判する。たとえば、「米国を目してダンスとヂヤズとの享楽国であるとする見方」を「誤れる米国観」として退け、「敬虔な宗教的情操」とそこから導かれる「艱苦欠乏を克服し、空拳以て新社会を創造するといふ様な不屈不撓の気概を含んでゐる」ことを論じてるのである。その一方で、「率直で子供らしい」という国民性について、それは「今では我儘育ちのお坊ちゃん式であり、手前勝手な行動で、どこへでも通るかの如く思ひあがつてゐる慢心は、この辺で一つ思ひ切り痛棒を喰はして置く必要がある」ともいう。

最後は、「若し米国民が英国式の粘りをもつてゐるとするならば、吾々としてもじつくり腰を落付けてかからねばならぬと思ふが、何れにしても日本としては、どの様な事態にも対処する覚悟をきめて置くべきだと思ふ」と結ぶ。その論調はもちろん反戦論に傾くものではないが、神国日本の非合理的で唯我独尊ぶりに冷や水を浴びせるものであり、こうした日本人の国民性が変わらない限り、敗北という事態に至ることも「覚悟」せざるをえないと判断しつつあるように読める。

応召と転出

次節の範囲を含め、日中戦争からアジア太平洋戦争期の教員の応召と転出をみておこう。一九三七（昭和一二）年一二月、助教教授兼書記で軍事教練を担当していた斉藤直と、職員（雇傭人）正木勝俊と吉田幸蔵が応召となつた（庶務係「秘書書綴」、一九三七年）。吉田は最初の戦死者となる。

四一年には齊藤仁太郎（体育）と梶浦彦臣、四二年には片岡喜右衛門（体育）、四三年には大野純一、四四年には速川浩（英語）、峯村文人（国語）、久木久一（商業学）、石河英夫（商工経営）、川上久寿（中国語）、馬屋原博（ドイツ語）が応召となった。一九四五年五月八日付で文部省に報告した文書によると、教員（専任）では三〇名中の八名が、職員（専任）では七名中二名が応召となっていた。

そのなかで際立つのは大野純一である。大野は三度の軍隊経験をもつ。第一回目は小樽高商・東京高商専攻部を経て、母校に赴任して助教授に任ぜられた直後、一九二二年一月に一年志願兵として入隊、二三年一月、予備役将校として満期除隊となり、学校に戻る。その後、三八年八月、陸軍少尉として臨時召集され、四〇年七月に召集解除となる。さらに、四三年一月、臨時召集により入隊、四五年九月二日、召集解除となる（陸軍大尉）。

二回目の応召の際の全校挙げての壮行式で、大野は次のように述べている（『緑丘』第一一五号、三八年九月二五日）。

国防は国民全体の連帯責任である、私は銃後にあつて今迄思想戦、経済戦に備へ、或はマイクを通じ、或は街頭に出て国民の自分を尽して来たが、此度念願叶ひ、勇躍晴の征途につくを得るは私の最も喜びとする所である、私の背後には三千の同窓生及八百の学徒がついて居る、私は今胸中に何らの不安もなく極めて安らかな気持ちで、喜び勇んで戦線に赴く事が出来るのも、皆国の恩、学校の恩である。今こそ緑丘精神を発揚する時である。立派に戦つて来ます。

この時は、旭川の第二六連隊司令部の副官を務めている（三回目応召では根室に駐屯）。召集解除となり、学園に復帰する際の『緑丘』第一三九号（四〇年九月二五日）は、「戎衣を脱いで再び教壇へ 銃後総力戦への召集」という見出しで報じた。

戎衣を脱いで再び教壇へ

銃後總力戦への召集

大野純一教授歸還



大野純一教授は、戦時体制下の戦況に、銃後の総力戦への召集を命ぜられた。彼は、戦時体制下の戦況に、銃後の総力戦への召集を命ぜられた。彼は、戦時体制下の戦況に、銃後の総力戦への召集を命ぜられた。彼は、戦時体制下の戦況に、銃後の総力戦への召集を命ぜられた。

戦時体制下の戦況に、銃後の総力戦への召集を命ぜられた。彼は、戦時体制下の戦況に、銃後の総力戦への召集を命ぜられた。彼は、戦時体制下の戦況に、銃後の総力戦への召集を命ぜられた。彼は、戦時体制下の戦況に、銃後の総力戦への召集を命ぜられた。

【緑丘】139, 1940.9.25

戦局の窮迫するなか、四三年二月、教務課長・報国団総務部長という要職にある大野に三度目の召集がくる。その壮行式の様子は、「生徒代表は「我等直に先生の後に続き、再び先生に相見えん」と意気壮んな辞を述べれば、軍装に身を固めた教授は、「先に出陣した若き学徒諸君と心ゆく迄戦はん。諸君の続くを待つ」と烈々の鬪魂を披歴して降壇され、大野教授万歳の雄叫びは丘にどよもし」（同、第一七八号、四三年二月二十五日）た、という。

これは応召された教員は「幸い終戦後一年たらずのうちに学園にもどることができたけれども、久木教授は終戦後なお四年近くの歳月をシベリアの収容所にすごさなければならなかったし、馬屋原助教は終戦直前の昭和二十年六月二十日、沖縄を死守しようとして壮烈な戦死をとげ、また梶浦教授も南太平洋に転戦するうちに病をえて、昭和二十年八月二十二日、戦争終結の宣言が発せられてから一週間後に、戦病死された」（『緑丘五十年史』）。

転出者や退職者をみよう。社会学や心理学など「リベラル・アーツ」を一手に引き受けていた感のある中野清一が、一九三九年四月辞職し、満州建国大学に赴任する。おそらく満州建国大学の「副総理」となる作田荘一と、中野の恩師にあたる高田保馬からの誘いによるものだろう。『創立二十五周年記念論文集』には「民族及国民の本質」



糸魚川祐三郎



中野清一

を寄稿したように、この前後の中野の関心の第一は民族にあり、それが建国大学への転出の要因の一つにもなったと思われる。四三年五月、母校での講演は「民族問題に就て」であり、「大和民族と漢民族の民族的感情関係」を取りあげた。そこには「時によつては力の倫理も必要だ。そこに根柢に愛の倫理が存在するからである」(「緑丘」第一七二号、四三年六月二五日)という一節もあった。まもなく中野は高田が所長を務める民族研究所に転じる。

苦米地校長下で教務課長を務めていた糸魚川祐三郎が、一九四二年七月、文部省の督学官に転じたことは、ちょうど手塚寿郎が東亜同文書院大学に転じることと重なったため(後述)、小樽高商にとつては大きな衝撃であった。後日の糸魚川からの通信によれば、「着任以来、教育制度改善の渦中に投ぜられ、殊に時局下変革期にある商業教育の技術的立案指導者の責」(同、第一六五号、四二年一月二五日)を負っているとい

う。
手塚と糸魚川の転出を前に、緑丘会小樽支部主催で開かれた送別会の席上、苦米地校長は、糸魚川について次のように述べている(同、第一六二号、四二年八月二五日)。

糸魚川師は不断の研究者であり、又実践家である。難解な事柄も平易に、理解し易く説く教育方法は他の追隨を許さぬものがある。而も籠に居て峻峰を測らんとする徒輩に恬淡たる態度を持たれて来た。又本校の誇りとし、特色としてある商業実践教育の拡充と基礎の確立と方法の完成は、全く師に負ふ所で、文部省も小樽高商の商業実践が一番良いと折紙を付

けられたのである。平常煩雑なる事務の処理にも、個人的世話も、洵まこと

行届き、春風駘蕩たる人格は何人にも敬慕せられ、真に得難き教授である。

戦後の糸魚川は、横浜経済専門学校校長、和歌山大学学長や長野県の松商学園理事長などを歴任している。

一九四一年九月、修身・国語漢文を担当し、教導部長・生徒主事を務めていた卜部岩太郎が第一線を退いた（その後、半年間、講師として残る）。一九一九年に赴任して以来、一三年間の緑丘生活であった。

外国人教師たち

この時期の外国人教師の採用も、ほぼ以前と同様に、在外公館に対して適当な人物の探索を依頼したり、身許の照会などをおこなうなどの方法をとっている。

「外国貿易実務」などの担当者として採用されたリチャード・ストリーリーの場合をみよう。一九三七（昭和一二）年一月二一日付のロンドン総領事宛の「外国人教師備聘ニ付依頼ノ件」によると、「本年モ一名採用致度、目下牛津^{オックスフォード}大学其ノ他ニ照会中ニ有之」として、候補者選定の際には「御引見被下度、貴官ノ御意見拝承ノ上採用決定致度」となっている。その後、東京帝大の英文科元講師で、オックスフォード大学マートン校の英文学部長エドモンド・ブランデンの推薦により、三五年、同校を卒業し、「前記大学ニ於テ一年間国際貿易及時事問題ヲ研究シ、併テ英語及英文学ノ研究ヲ継続」（「履歴書」、庶務係



R. ストリーリー

「秘文書綴」、一九三六年）していたリチャード・ストリーリーの採用が決まる。

ストリーリー伝の側からは、卒業後の「一年コースの英語教程」取得の過程でブランデンと親しくなったことが、その「生涯に決定的な影響を与えることになった」という。ストリーリーの妻ドロシーの執筆した『リチャード・ス

トリー——日本人の心の友」(池田清訳)には、次のように描かれる。

一九三七年初頭、ディックが就職の口を探していたところ、オックスフォードの就職課から、日本の北の島、北海道の一カレッジに職があるとの通知があった。ブランデンもかつて日本で教えていたのを知っていたので、助言を求めると、ブランデンはこう話した。「よし、行き給え。日本ではみすばらしい街々も数多く見るだろうが、そんな所でも礼儀は守られている。政治の事は心配するな、村の子供たちを君の道案内にし給え」。

この人事は三七年二月一三日付で文部省に稟請し、三月一九日に採用が許可された。契約書の内容によれば、着任から四〇年三月末までの契約期間で、一カ月三八〇円の手当と官舎(無料)の提供という待遇だった。契約を更新して長期にわたっていたマッキンノンが「勅任取扱」で月四四五円だったことに比べても、新任のストリーもかなり高給で、日本人教員の倍以上だった。それでも物価上昇のためか、「日本滞在中のディックは、常時金欠病で困っていたようである」(同前)。ストリーは、飛行機で津軽海峡を渡ってきた最初の教員となった。

ストリーに関する授業関係の資料がないので、後任のマルコム・ダンカンの場合でみると、「外国貿易実務一〇時間、貿易実務二、タイプライター三、商業実践三、英語二」(文部省往復綴、一九四〇年)であった。

来日からまもなく日中戦争がはじまり、それから三年間を過ごした日本は、ストリーの生涯をかけて解明すべき対象となった。「私の日本に対する興味、現代日本史に対する関心は、こうした高商の人達の親切な心根、熱心な研究心」(「小樽での緑の春」『緑丘五十年史』(英文)、ここでは『緑丘』(暮目版)第五〇号、一九六八年二月から引用)などによって触発された。その一方で、「それまで母国で自由の尊さを享受し謳歌していた私は、この時代の警察の統制や新聞の検閲、また不合理な超国家主義などに、しばしば不満や驚き、また悲しみの念を感じさせられました」(講演「春風驟雨四十年

——私と日本」、一九七七年、『リチャード・ストーリー』所収」という。ストーリーは、イギリスにおける日本近現代史研究の先駆者となる。

三八年四月、ストーリーより一年前に赴任していた日・メーチンが、日中戦争前夜の政治・経済・社会の危機的構造を解明して輸入禁止となっていたフリーダ・アトリーの著書『日本の粘土の足』を学生に薦め、物議を醸したことがあった。学校当局も外国人教師の採用や動静に注意を払った。なかでも、「支那語」担当の中国人教師採用の際には神経をとがらせた。三九年五月に採用となる中華民国人周長英の場合である。周が候補者となった経緯は不明だが、三月二日付で、在中国大使館に「支那語教師候補者ノ人物性行等」を照会している。学歴や家庭の状況、発音などのほか、「思想（特ニ左傾及対日ノ思想）」について調査を求めた（庶務係「秘文書綴」、一九三八年。これに対して、三月二四日に回答があり、「思想」に関しては「何等思想偏行的傾向ヲ認メス、対日態度モ良好ナリ」（「秘文書綴」、一九三九年）だった。なお、この調査は北京の領事館警察署が実施している。周の手当は月二〇〇円で、欧米人の約半分だった。

小樽に一三年勤めたのち、山梨高等工業学校（現山梨大学工学部）に移ったフランクは、「外人教師にとつて愉快なる事」の一つに、「学生が、吾々の文化及び生活様式に関する知識を、飽く事なく、貪るが如く聞きたがる事」をあげている。「勿論彼等は、講義や書物によつて既に随分知つて居るのではあるが、尚それでは満足をしなない。常により多くを知らんとし、よりよく理解せんと欲して居る」（「私の見た日本の学生」『文部時報』一九三八年九月）という。小樽での経験も、この観察のもとになっているだろう。マッキンノンも「日本の教育に関する一私見」（『文部時報』三八年一月）という文章のなかで、一般に日本における外国人教師は「校長及教授のザツクバランの批判、指導並に懇切なる協力」をあまり得られぬために不本意な結果に終わりがちなものに対して、「小樽高商に於ては自分が赴任して以来それ等のものが十分に与へられ、その為に仕事が円滑に、且つ愉快に遂行し得られた」と述べている。

四〇年六月時点で、備外国人教師としてマツキンノン、スミルニツキ、F・ギルボーイ、ダンカン、周長英の五名と外国人講師としてマチルド、クロル、C・ギルボーイの三名が在籍していたが、四一年六月にはギルボーイ夫妻とダンカンはいなくなっていた。四〇年六月二五日の『緑丘』第一三六号には、「刻々危機に瀕せる故国を偲びて暗然！」と題して、ギルボーイ夫妻とマチルド夫人へのインタビューを載せている。

経済研究所への拡充

一九四〇（昭和一五）年六月二五日の『緑丘』第一三六号は、「学理と実践」との緊密なるタイアップを敢然積極的に出た北海道経済研究所」という見出しで、「益々本道経済界に貢献すべく、全所員一九となつて大いに張切つてゐる」と報じている。「統制経済の運営上に及ぼす諸影響、諸対策の確立等についても学理的の研究がより必要とされ」として、小樽の経済界のメンバーと月一回程度の懇談会を開くこととなった。第一回は、七月一四日、横浜正金銀行支店長の「国際金融情勢」、高橋次郎「統制経済と物価問題」などの発表が予定された。

前述した「教官ノ研究事項ニ関スル件」には、北海道経済研究所の共同研究として「北海道工業論」「北海道貿易史」があげられていた。前者は九月現在で「八分通り完了」で、後者は一〇月に開始されることになっていた。それは、具体的には「北海道ニ於ケル主要商品ノ販路ノ変遷、北海道ニ於ケル輸出入商品ノ変遷」の考察が課題とされていた（『文部省往復綴』、一九四〇年）。

また、「支那事変発生以来、兎角人々の眼が滿蒙支方面へ向けられおる傾向があり強く感ぜられるが、併し乍ら北海道方面にあつて、北海道を知る事の至つて肝要なる事」（『緑丘』第一三六号）として、学生の懸賞調査論文の応募を促している。四一年三月、入賞者が発表された。一等は該当者がなく、二等に「北海道木炭の調査」と「アスバラガス」の研究が入った（同、第一四五号、四一年三月二五日）。



学生集会所と経済研究所（1942年頃）

ところが、四一年一〇月八日を以て、この北海道経済研究所は経済研究所に拡充される。その理由の一つは、後述する『北方経済研究』第一号の「改題の辞」で苫米地校長が語るところによれば、「支那事変の進行につれ、大陸の経済問題に関心を持つ傾向が次第に濃厚となり、北海道だけでは狭隘に失するといふ説が抬頭し」たことにあった。これに関連して、苫米地は経済研究所への拡充時に次のように述べていた（「研究所並に会館の竣工」、同、第一五二号、四一年一〇月二五日）。

経済学の基本原則は総ての人類に普遍にして且つ妥当なるものであり、又さうなくてはならぬ。而して未だその発見せられざるものは更に学究の研討に待たなければならぬことは勿論であるが、経済の構成運営は各国の持つ自然的条件に制約せられ、其の政策面に於ては常に必ずしも普遍妥当を需めることが出来ない。問題は単にそれに止まらず、国際情勢の変化に即応した政策樹立を緊要とする。此の点まで来ると、産業の国家的順応貢献に対する国民性如何が問題となり、国

民教育より国体にまで踏込むだ研究が要請せられる。否寧ろ国体觀念が明徴になり、国民性も判然とし、教育方針も従つて定まるといふべきであらう。

普遍的な「経済学」の上にそれぞれの国の「経済学」が存在するゆえに、国際情勢の変化に対応し、「産業の国家目的順応貢献に対する国民性如何」を研究することが第一義的に要請される、とする論である。「吾人の所信は、日本国民は人類の普遍性の上に更に特異な国民性を持つ」とし、「国粹主義」についても「現代文化の尖端を行き、而も日本特有なものを保持し、且つ進歩発展せしむる」（「思ひ出づる儘に」、同、第二九号、三九年一月二五日）というのが、苦米地の持論であった。

ただし、経済研究所への拡充の直接的な契機は、卒業生の栗林徳一による、研究所と学生会館の建設費の寄贈であった。四一年春に起工し、一〇月の竣工とともに、それまでの各研究室と北海道経済研究所を統合することになった。その目的は、「1、日本経済及日本ト密接ナル關係ヲ有スル諸外国ノ経済ノ調査並ニ理論的研究 2、研究成果ノ普及」（「文部省往復綴」、一九四二年）とされた。『緑丘』第一五一号（四一年九月二五日）では、「経済研究所誕生」として、その概要が次のように報じられた。

一、研究所長に苫米地校長を戴き、その下に設置せられる研究室及主任を挙げれば

経済政策研究室主任 高橋教授

経営経済研究室主任 室谷教授

統計学研究室主任 手塚教授

貿易研究室主任 木曾教授

財政金融研究室主任

大野教授

民族社会研究室主任

南 教授

経済法研究室主任

木部教授

各研究室には夫々所員として教授が属して研究に励むことになる。

一、以上各研究室の主任が委員となり、教導部長生徒主事浜林教授、教務課長糸魚川教授が加つて委員会を構成する。この委員会にて、経済の総合研究をなし、採り上げられた問題を、学問の分科別に各研究室に於て鋭意研究される訳である。

委員長は手塚教授である。

一、更に各委員が横に集り、恒久的研究部門として「東亜経済部」（主幹大野教授）、「北海道経済部」（主幹高橋教授）の研究室が設置せられる。

他に委員会に於て臨機的に「戦時下ニ於ケル経済」問題を研究題目として取りあげる。

建物としては、大研究室（総合研究用）が四室、中研究室が四室、小研究室が六室配置された。語学関係の教員を除いた教員が、これらの研究室に所属することになった。

付随的な理由として、苫米地は「教育上教授が学校に常勤することが望ましい」こと、さらに戦時態勢との関係で「防護上教授が常勤する」（「研究所並に会館の竣工」）ことをあげている。

しかし、実際には目論見通りの「総合的研究」は実施されなかった。後述するように、四四年四月、経済研究所は「北方経済研究所」に転換となるのである。

第四節 学生生活の戦時化

学生論の活況

一九三〇年代前半の左翼学生思想運動の高揚と退潮後、三〇年代後半には河合栄治郎『学生生活』（一九三五年）が多くの読者を獲得し、さらに河合編『学生叢書』の刊行がつづくように、混迷する社会のなかでのあるべき学生像を求めて、学生論が活況を呈した。戦争の影に不安を抱きつつ、学問や人生のあり方について煩悶し、模索する多くの学生が教養書や哲学書を貪り読んだ。小樽高商の学生も例外ではない。

一九三七（昭和一二）年一月五日の『緑丘』第九七号は、巻頭に向坂逸郎の「私の青年論」を掲げる。労農派への圧迫も強まるなかで、向坂は「敵が、その人生が、大きいからだで、強い力で、飛びか、つて来るときは、身をひく、して、じつと耐へてゐる外に仕方はない」としつつ、「凡ゆるものを撰取して自分の成長の營養にする。……あらゆる境遇に適應する屈伸性に富む人間となる工夫をするといふのである。たゞ消極的に沈み込むのではなく、何か歴史的進歩の上に積極性をもつことを少しでもやる」と述べる。

同号の部説も「教養と教育に就て」である。さらに茂作「学生論に寄す」という投稿もある。この学生は「学生論が如何に叫ばれても指導性を持ち得ず、又叫ばずには居られないのが現状ではあるまいか、学生自身がセンチメンタリストである事が又学生の誇りなのだから、問題は一筋縄で行かない」と論じる。

『緑丘』第一〇五号（三七年一月二五日）の「学生」見つけよ！「学徒」の結びは次のようになっている。

無気力なニヒルも、頹廢性そのもの、ダグ、凡ゆる文化病からも取残され、そして進歩性のない姿、かゝるも

のを現代学生として許容する事は出来得るものではない。「就職の為の学問」は余りに「実用的」であり、且「実用的」ではない。そこに現代社会の深い錯誤暗溝が見られ、インテリ層の凋落が表面化して来る。

かゝる故に狭激な思想の中に沈溺せよと云ふのではなく、それは誤りであり、それがインテリの「蒼白さ」を救ふ道であると云ふでもない。只、インテリとしての学生の——その地位——を凝視し、その課せられた社会的割賦の意義を探索せねばならないのではなからうか。

この文章自体がT生の煩悶彷徨する姿を如実に示す。何とかして「インテリとしての学生」の社会的役割を見つけようともがいている。『緑丘』第一〇七号(三八年一月二五日)では、卒業生で高松高等商業学校教授の大泉行雄に「一九三八年と青年」という題で寄稿を求めた。大泉の主張は「極端に一方的な、且狭隘すぎる思想と智識」に限されるな(ナチス・ドイツへの批判が込められている)として、「事物の動きと思潮の根源に、常に透徹せる判断を加へ得ねばならない」ということにある。

三八年五月二五日の『緑丘』第一一一号は「学生と生活」の特集号となった。巻頭は神戸商大教授津村秀松の「青年の今昔」で、「普及のみに走つて、派生を考へぬ教育や統制のみを重んじて型破りの学校を考へぬ」ことから脱して、「余裕綽々たる青年」の養成を提言する。津村のたとえでは、紡績会社の綺麗な製品一辺倒ではなく「手織木綿」も必要とするのである。部説「高商と高校」では、「高商生活への或る種の背反者」、つまり「文化的傾向の学科を好む学生」および「高校に対する青春的な憧憬を持つ者」に対する、高商側からの具体的な解決策を論じている。こうした問題設定そのものが、卒業後就職にはほぼ直結する高商学生の存在意義や主体性のあり方について、自負と不安が交錯するものとなっている。

そして、多くの原稿のなかから四編が選ばれ、「学生と生活」が特集される。「批評家達に於てではなく、現に此

の非常時に学生生活を送つてゐる我々の中に、「現代学生に対する痛烈な批判」を聞く試みである。四人の論者は、実感を込めて自らを含む学生の現在の姿を見つめる。「吾々学生は極めて非特質的な特質をもつて居る。言葉を換へると、特徴をもたない事が我々学生の特徴の様である」(新津義彦「学生々活検討」)、また「現代学生気質、そんなもの、無くなつて居る事が、恐らく現代学生気質であり、学生も亦それを捨てるに何の躊躇もしなかつた」(服部敏雄「現代学生の一様性」という認識はほぼ共通している。

編纂部の「編輯後記」にはもつと力強い「一つの生活理想の一試案として論策が欲しかつた」とあるが、おぼろげながらもある方向は示されている。もつとも鮮明なのは杵淵雄一「現代学生と明日の学生」で、「此の大なる世紀過渡期に対する適応性なくしては、その社会的存在は全面的に否定されねばならぬ事は明かである。然して全体主義的動向を示しつゝある現代に於て、個人は全体をその想念より逸する事なく、その与へられた個人的分野に於て、全体の線に沿へる自己発展の為に自律的訓練を旨とすべきである」と論じる。小林明「学生論への一瞥」でも、ドイツの「学生集団勤行」を例に「消極性脱却の温床がより其処に見いだされるを期待する」とある。新津は「吾々学生ははつきりと自己を掴み、戦時体制下の帝国臣民として強く正しく、そして明るく進んで行かねばならない」と述べていた。こうした積極性の志向・「全体」への親和性は、後述する「集団勤労働員」の受容の下地となつていく。

一九四〇年五月二五日の『緑丘』第一三五号の論説「学生の不安」は、さらに一歩進めたものとなる。「現代学生が実社会の動向に対して比較的関心が薄く、又学生としての意気甚だ低調なりと非難せられる理由」を考察したうえで、次のような論を導く。

今幾多の殆ど同年輩の青年が正義の戦争に於て武器を手に執り、身命を擲つて君国のために尽す時、銃後にあ

る学生が学問といふ殿堂を守護するに真剣なることを得ずして理性の戦線から敗退し、享樂的退嬰的方面に進むが如きことはどうして出来よう。学生は先づ何者にも屈せざる批判的精神を以て、自覚と自己否定と盲目的現実肯定とを判然と弁別し、現実と理想とを対比し、現実を理想へ引上げる為に苦闘しなければならぬ。(中略) 次代を背負ふて立つの真剣さを以て、矛盾の統一と祖国への愛との飽くなき苦難の道を進むことこそ、現在我々にとつて喫緊事であるまいか。

ここでは躊躇なく「祖国への愛」と「自己否定」が学生に求められている。それでも、多くの学生はこれらの論者のように「不安」を払拭することはできず、時勢の急転にとまどいや躊躇を感じていたと推測される。新体制の下で「生活の方向転換」を強いられつつも、「麦と兵隊」に感激し、「生活の探求」を耽読し、「三太郎の日記」に哲学する学生も、一歩外に出れば、新しい不馴れな生活にとまどひを感じて、思ひなしか彼等の顔にニヒルが覗いてゐる」(『緑丘』第二三九号、四〇年九月二十五日)と観測されるのである。

食糧事情の悪化

一九四〇(昭和一五)年四月から学生食堂の経営がオリンピックピックに代わった。「定食が二十五銭で一吋味もい、が、水をかけた様なライスカレー二十銭は値段に比較してまづい」(『緑丘』第一三四号、四月二五日)という評判である。しかし、まもなく九月から節米切符制が始まると、学生たちの食生活はきびしさを増していた。まず、それは学校の食堂にあらわれた。下宿生は三食付きから朝晩二食に減らされたため、「校内食堂の利用者は頓に増加」した。学校側では切符制を実施した。「献立は肉うどん、紅茶付パン、スープ付パンの三種に限定し、値段は何れも二十銭、学生は之に対し前日日付入の食券を買はされるのだが、四時限終了を一寸遅れて駆け付けると、もう狭い食堂は一杯の

満員、カウンターの前に一列にずらりと並んで待たされて、腹は減る、時間はない、学生は全く気が気ではない。前日に食券を買いたれた学生は、「青い顔をして校庭に寝そべつてゐる光景」〔緑丘 第一三九号、四〇年九月二五日〕が日常化するのである。

オリンピック食堂も四一年の新学期には閉鎖されてしまう。代用食のみの提供となったために利用者が減少し、赤字がつづくためという。このため、学校側では「代用パン」を配給することになった。「但し之も十分に当らず、各級八ヶ宛とし、然も二三学年生徒の下宿より通学するものに限り配給せられる」〔同、第一四六号、四一年四月二五日〕だけにとどまった。

学校側は、校内荒地の開墾による食糧増産の取り組みなどもおこなう。四一年四月以降、「熊笹の根、石と戦つて開墾、それにつづく播種、草取、間引」などをおこない、「開墾地は傾斜面にして水捌共すかに良い」ため、九月には南瓜や豆などの「予想以上の収穫」〔同、第一五一号、四一年九月二五日〕をあげた。さらに学生の勤労作業（後述）により、開墾地を五畝拡張する。

しかし、この程度では焼け石に水で、食糧事情の好転は望めなかった。一九四一年六月一六日付で文部省に送った「小樽高等商業学校ニ於ケル食糧状況報告」〔庶務係「文部省往復綴」、一九四一年〕では、北海道内においても「最モ恵マレザル地位」にある小樽の配給事情の悪化や、代用食としての「郷土パン」（小麦粉に各種野菜を混ぜたもの）の割高なことなどを述べた後、下宿生・寮生・通学生の実状の深刻さにふれる。代用食は米食よりも約三割五分高く、雑費も倍となっているため、「学費総額ニ於テ二割余増加」の状況という。二寮の場合、「一週二十一回中米食（米七分、豆三分）七回、代用食十二回、二回欠食」だったという。

四一年六月の節米実施以降、学生たちの「体重減少」し、郷土パン代用時には半数以上の寮生に下痢や腹痛の患者があったとする。こうした「体位並ニ健康ニ及ボセル影響」を指摘し、次のように「将来ニ対スル希望」を述べる。

發育旺^{ぶか}リノ青年ノミ集合セル学校、寄宿舎ニ一般家庭並ノ配給ニテハ、不足ヲ生ズルコト当然ナリ。又市街地ヲ遠ク隔レタル山上ニアル本校ノ通学生モ、又下宿ヨリハ弁当ヲ供与セラレズ、而モ下宿ニ米ノ配給アリトノ理由ニテ、学校ノ食堂ニハ一粒ノ米モ配給セラレザル現状ニ於テハ、通学生ニ欠食者ヲ生ジタルコトアリ、現在モ尚一個ノ郷土パン若クハ一袋ノ乾パンニテ飢ヲ一時凌グニ過ギズ。寄宿舎モ亦公然欠食日ヲ設ケ、各自ニ食ヲ求メシムルガ如キハ、訓育上甚ダ面白カラズ。更ニ又近年本校卒業生ノ約八割ガ入営スル事実ニ鑑ミ、低位落ハ国家ノ為甚ダ憂慮ニ堪ヘズ。本省ニ於テ關係各省ト合議セラレ、学生ニハ輕労働者並ノ給米及代用食確保ニ付特別ノ考慮アランコトヲ切望ス。

この学校側の現状報告は実際にはやや誇張が含まれていたようである。一九四二年四月入学の方のお話によれば、卒業近くまで、寮では昼食が提供され、通学生は弁当を持参することが一般的だったという（田中祐司・三嶋弘談）。本州に比べて、北海道の食糧事情は相対的にまだ益しであった。

次節の範囲となるが、四四年入学の寮生の回想には「食べ物絶対不足で、朝はおかゆがドンブリに七分目。そしてうすい味噌汁というまるで病人食。みんな食堂に入ると一杯でも多く味噌汁にありつこうと、できるだけ鍋の近くに席を占め、先を争ったものだ。腹が減って軍事教練はつらかった」（小笠原基生、「小樽地獄坂」とある。その一方で、市内の飲食店では「まだ食糧はそれほど窮迫しておらず、寮生揃って「たこ寅」での会食は最高の美味、大いに満足した。公園通りのフルーツパーラーに時々行ったが、大人になった気分だった」（三浦一民、同前）という回想もある。

四二年四月、学生ホールが新設されると、そこにオリンピック経営の食堂が再開された。「此の食糧難の折柄、昼

食に苦しむ下宿生に対する学校当局及び共済班の暖い親心の甲斐あつて、相当分の昼食（カレーライス、チキンライス）、飲物を販売した。四月二日、共済班から「食堂、本日ヨリ開始」として、次のような告示がなされた（庶務係「通知綴」、一九四二年）。

- 一、米食券ハ日付入りリトシテ通用当日限り
- 二、下宿生徒ニシテ昼食ヲ携行シ得ザルモノハ、昼食時、翌日分ヲ購入ノ事
- 三、ソノ他ノ生徒ハ放課後購入ノ事
- 四、職員中米食券御希望ノ方ハ、一般生徒購入後（凡ソ三時半頃）御購入相成度
- 五、代用食ハ自由販売ノ予定ナルモ開始期限未定

この学生ホールには共済班の管理下に、丸井今井の共済部と理髪部がすでに開設、営業していた（同、第一五八号、四月二五日）。

四三年二月から、食堂は値上げとなつた。その代わりに、定食は毎日二種類が用意され、増量になるといふ。共済班では「乞ふ！ 食堂への積極的協力を！」と呼びかけている（同、第一六八号、四三年二月二五日）。

「共済部」のしおり（四三年版）によれば、いずれも市価の一割か二割引きで、制服は三三〇円と三〇〇円の二種類があつた（実際には商品は不足気味で、中学などの制服着用が奨められた）。「高商ノート」は二五銭と三〇銭、ルーズ・ノート三五銭、「高商鉛筆」（打）三〇銭などという価格だった（『燦々会の記録』）。

体力・体位の向上

一九三六（昭和一一）年七月の実業専門学校長会議の協議事項として小樽高商から提案した一つに、「近時生徒ノ健康状態頗ル憂慮スヘキモノアル事実ニ鑑ミ、早期診断及ヒ衛生施設ヲナスノ必要ナキヤ」（庶務係「秘書書綴」、一九三六年）があった。これは、小樽高商で実際に健康を害した学生が多く、その「健康状態頗ル憂慮スヘキモノアル」という現状認識にもとづくものだった。

苦米地は、校長就任直後からいくつかの対策を取りはじめていた。まず三五年五月、「校医の来校を乞ひ、生徒の健康診断」を実施する。二六名の受検者のうち、二名に「要休学」との診断がでると、すぐに休学を勧告したという。翌年五月には、「胸部疾患の為死亡又は退学、休学の止むを得ざるに至る生徒多数なる実情」に対処するため、レントゲン写真撮影とツベルクリン反応の検査を実施したところ、「休学治療を要するもの七名、更に診察の上、治療上の相談を受くべきもの二十二名」におよんだ。また、この年から毎月一回、生徒の体重測定をおこない、健康状態を把握する資料とした（以上、「緑丘三十五年史稿」）。

こうした学校側の措置にもかかわらず、学生の健康状態が改善することはなかった。文部省に提出した一九四一年度の「教育概況」において、学生の「健康状態」の項には「概シテ良好ナレドモ、毎年三十名内外ノ休学者アリ（四パーセント）、内平均三分ノ二ハ呼吸系疾患ナリ」とある。その対策は「毎日ラジオ体操ヲ励行シ、換気、日光浴ヲ奨励」するほか、ツベルクリン反応検査や体重測定によって結核などの「予防及早期発見ニ努力」している、というものであった（庶務係「文部省往復綴」、一九四一年）。

なお、一九三七年『山口高等商業学校一覽』中の「身体検査統計表」によると、六七七名の検査人員中、「胸郭（異常アル者）」は一七名であり、小樽と同程度とみられる（「弱視」は二九四名におよぶ）。

四〇年度の「半途退学者」一五名のうち、「疾病」を理由とするものは三名であった。死亡者も六名を数えるが、



室内プール開き

そのなかには結核などの病魔に倒れた学生もいたはずである。四一年度では、「半途退学者」一〇名中五名が「疾病」である。死亡した学生も三名いる（文部省往復綴）。

戦時下の食糧事情の悪化も、学生の健康状態にさらに暗い影を投げかけた。一九四一年六月一六日付の、文部省実業学務局長宛の「本校ニ於ケル食糧状況報告ノ件」で、学生の「体位並ニ健康ニ及ボセル影響」が大きいと訴えていたことは前述した。

こうした健康状態悪化の対策を一つの理由として、柔道やスキートの先達を自負していた苦米地は、校長就任とともに、学生たちの体力・体位の向上に熱心に取組んだ。

その第一弾が室内プールの設置であった。すでに一九三二年には校友会理事会で設置が決議されていたが、経費の問題で頓挫していた。三四年の学生大会でも建設促進が決議され、ようやく三五年五月から工事が始まる。総工事費二万六千円で、場所は実験室裏で外国人教師官舎の横手だった。幅九メートル、長さ二五メートルで、「東北以北唯一の室内プール」（『緑丘』第八八号、三五年六月三〇日）となる。二〇度程度の水温を保った。一月三日、オリンピック選手を招いて、落成式をおこなった。

三七年夏から「学校の事業の一つとして学生全部の水泳講習が行はれ」た。その指導にあたる水泳部では「二日通計五十名近い学生」が泳いでいるとして、さらに「このプールがスポーツの一般化とい

ふ大切な事業に役立つて、国民体位の向上といふ国策に少しでも貢献しうる」（同、第一二二号、三八年五月二五日）ことを希望していた。

三六年一〇月の行幸の際の「校務奏上文」では、とくに「体育並ニ武道ヲ奨励シテ、身体ノ鍛錬ト剛健ナル気風ノ振作トニ留意」（『行幸記念誌』所収）していると記した。さらに翌三七年一〇月の行幸一周年の式典では「学究的人物にして、先づ健康たれ」という訓辞があり、「スポーツの一般化普遍化、即ち大衆化の見地より、ラヂオ体操を毎日続行すること」のほか、一週間の「強調週間」が実施された。後半の三日間は「十七日 当時朝礼後より前日の雨余韻を引いて豪雨と化す中、赤誠に燃えて住吉神社に参拝せり。十八日 勤労報国の日。全生徒強行遠足。十九日 非常時心身鍛錬の日」（『緑丘』第一〇四号、三七年一〇月二五日）という具合である。

三八年には春と秋に校内競技大会を取り込んだ「健康週間行事」が展開された。五月には「先づ計れ 国民体位向上を」として、校長杯争奪の競技大会が開催された。健康標語募集で、一等に入選したのは「浴びよ日光、親しめ大地」であった（同、第一二二号、三八年六月二五日）。さらに九月二五日の『緑丘』第一一五号では、「銃後学生として、我々積極的に体位の向上に務めねばならぬ」として、ハイキングさえも鍛錬の場とする。

小樽は散策のコースに恵まれてゐる。遙か増毛ましげの連山を眺め、紅葉なす連山を眼前に、我々は札幌国道を進み得る。絶壁の下を蘭島、忍路おしのに至るコース。すぐ後には天狗山が控えて居るではないか。幾度でも登らう、それが鍛錬になるので。出来るだけ我々の足で進まう。そして、自己の力を覚さつて行けたら、最も現下に即応した鍛錬法だと思ふ。（中略）

各運動部は又進んで学生を運動に参加せしめるやう其の門戸を開放してくれ、ば良いと思ふ。全学生揃つて青空に飛び上れ、心地よい秋風が全身をつ、むでくれるであらう。鍛錬の秋はすでに来てゐるのだ。

一九三九年一〇月には、厚生省の主催する「体力章検定」を実施している。「走」（二〇〇m、二〇〇〇m）、「跳」（走幅跳び）、「投」（手榴弾投げ）、「運搬」（五〇m）、「懸垂」の四種目で、六二八名中一九二名が合格（初級以上）となった（『緑丘』第二二九号、三九年一月二五日）。翌四〇年一〇月の検定会では六一一名中四三二名が合格している（『緑丘』第一四一号、四〇年二月二五日）。四一年二月には厚生省より学校を通じて、各自に「体力手帳」が交付された。この「成績頗る好良」は、学校ぐるみの体力作りの成果の一つであった。『緑丘』第一四六号（一九四一年四月二五日）の論説「鍛錬部各班に望む」では、次のように論じている（「鍛錬部」はそれまでの運動部が変更されたもの）。

従来運動、即ちスポーツなる語が兎角遊戯的意義に解せられ、それと共に運動部は多分に斯様かまな目をもつて見られた事はいなみ得ないと共に、弱点でもあつた。然し今、運動と云ふ言葉に代ふるに、既に其処には体育を通じての精神の練磨は勿論、時局に即して更に任務は過重せられることを意味してゐる。

学生は学問によつて知育を磨き、徳育に精励し、運動によつて体育の練磨に努め、学生々活を通じて自己を磨くといふ義務を負ふべきものである。

此の点より見て、運動競技の普及を計ることは喫緊事である。

さらにこの論説では、鍛錬部に向けて「単なるリクリエーションの意味に止まらず、一步高い地位に立つて、常に時局下における自己鍛錬意識を基礎として行はれんことを望む」と結ぶ。

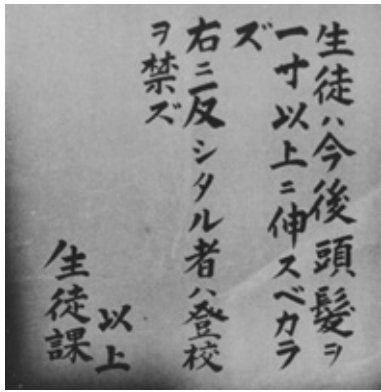
四一年一〇月、卒業生栗林徳一の寄付により、研究所とともに学生会館が建設された。場所は、学校正門より坂を少し下ったところで、斜面を均し、上に研究室、下の道路に面して学生会館が建てられた。学生会館はそれまで

未整備だった福利施設として活用されることになる。食糧難にともなう昼食の提供、「更に又修練や勤労乃至食糧増産作業で汗みどろ、土だらけになつた」学生の入浴施設を完備した（『緑丘』第一五号、四一年一〇月二五日）。「栗林会館」と称することになった。

こうした運動の推奨や健康管理の重視は、自ら柔道やスキー、狩猟を愛好する芥米地の資質から発するものであることに加え、戦時体制に突入して「健兵健民」を待望する日本の社会的な気運に照応するものであった。

学生生活の統制へ

芥米地校長の謹厳な学校の運営方針に加え、戦時体制の深まりは、日々鍛錬と集団勤労に追われ、のんびりした、あるいは自己思索にふけるような学生生活を遠ざけていった。



断髪令

報じていたが、小樽でも一九三九（昭和一四）年六月、「現下の非常時局に際し、動もすれば青年の意気文弱に流れ、剛健なる美風を失はむとする世相を嘆じ、茲に緑丘学園の真実なる伝統を固守せんとする意図の下」（『緑丘』第一二四号、三九年六月）、断髪令が発せられた。「本校生徒にして未だ断髪せざる者は、六月七日までに断髪すべし。当日までに断髪せざる者は、爾後登校を停止す。尚断髪は一寸以上にする事を得ず」というもので、学生たちは記念の写真をとって「元気で散髪屋に向つた」と『緑丘』は記すが、しばらくの間、ポマードで髪を固めてなごりを惜しむ学生も多かったという（大津博士談）。

このショックが薄れて、とくに三年生を中心に髪が「規定以上に伸びて来始め」と、四〇年二月、生徒課では再び断髪令を發した。「就職の一準備として折角分けん許りに伸ばしてゐた三年生、此の寒空に急に冷え冷え身に沁みる青坊主の頭をか、へて、残念相な、而も照れ臭さうな顔付をしてゐる者もある」(『緑丘』第一三三号、四〇年二月五日)と云つた。

三九年九月、第一次近衛文麿内閣は国民精神総動員を展開する。その一環として、小樽高商では、次のような「公私生徒ニ於ケル刷新自肅ノ件」を実践している(文部省『高等諸学校ニ於ケル国民精神総動員実施状況』、三九年三月)。

- 1 昨年十月十三日、戊申詔書ノ奉読及訓話ヲ行ヒ、日常生活ニ対シテ反省セシム
- 2 同日、国民精神総動員強調週間ニヨリ、生徒ニ対シ公私会合ノ飲酒ヲ禁止ス
- 3 同日ヨリ、カフェーノ出入、玉突、マージャンノ演技ヲ禁ズ
- 4 同 全生徒ニ早寝早起ノ奨励ノ結果、欠席遅刻著シク減少セリ
- 5 本年四月十一日ヨリ十七日マデ、生徒ノ禁酒禁煙週間ヲ実施ス

学生の娯楽や趣味だけでなく、早寝早起きという日常生活の領域まで統制が強められていった。

一九四〇(昭和一五)年九月には、文部省から、二キロ以内の徒歩通学、映画などの興業場やビリヤードなどの遊戯場への入場制限や禁止、「享乐的飲食店への出入禁止」という学生生活肅正の指示が出された。これによって、平日の映画館への入場が制限されることになったが、実際には小樽においては一九四三年ころまで邦画・洋画とも学生は自由に映画を見ることができたし、ビリヤードも楽しめた。『緑丘』でも四四年二月まで、市内の洋画映画館の広告が載る。

こうした「生活の方向転換」に関連する投稿のなかで、ある学生は「米のないこと、下宿のないこと、それが如何に深刻な現実であるにせよ、学生の話題がそんな末梢的なものでしかないならば、これほど情けないことはない」（『緑丘』第一三九号、四〇年九月）と述べていたが、戦争への急傾斜にともなう「深刻な現実」の襲来は学生の生活と言論を窮屈なものとしていったことは否めない。

一九四〇年卒業の北条恒一は、軍事教練の査閲や断髪令に「不快」を感じつつも、「私は私なりにどんな時代になっても「考えることだけは自由だ」とできるだけ現実を離れたことを考えて暮らしていた」と回想する。「軍国主義は人間性の尊重に先行し、囚われた学生の多くは「考えること、自由」も失いつつあった。暗い雲に覆われた生活である、カビの生えた身欠き鯉のようにかさかさ乾いた夢をみながらその生活は足音もなく過ぎていった」という。そうした圧迫感・閉塞感を痛感させた出来事を北条は記している。三七年九月の始業式のと、配属将校のS大佐が顔を真っ赤にして、何だかどなり出した」。その憤激の原因は、『緑丘』第一〇二号（八月二五日）の「編輯後記」の次の箇所にあった（以上、北条「緑丘でてから二十年」、『緑丘五十年史』）。

帝国主義ファツシズムの爆発に酔ふてゐるこの時代に、感情を排した正しき現実主義の観点より時代の推移を見守つて行くは、我等学生の使命かも知れないが、かゝる時我々の意欲がいかに燃えさかつて、言論の圧迫は我が「緑丘新聞」紙上にもおしよせて、真に第三者的公平的立場から鋭い分析をおし進めて行け得なかつた事を深く謝します。

確かに盧溝橋事件（一九三七年七月七日）とその後の日中戦争拡大に関する記事はなく、直接的には学校内外の検閲にはばまれて「第三者的公平的立場から鋭い分析」をおこない得なかつたことに編纂部の面々は忸怩たるもの

を感じていたようである。それでも、あえて第三面を「銷夏隨筆集」とし、第四面を「ブック・レビュー」に充て、一般の報道と異なり、「帝国主義ファシズムの爆発」の気配を微塵も感じさせない編集に徹したことは、あるいは意識的なギリギリの抵抗だったかもしれない。しかし、その「帝国主義ファシズムの爆発に酔ふてゐるこの時代」という箇所にも、配属将校の嗟嘆大佐は憤激した。嗟嘆大佐は温厚な、学生への理解ある将校ではあったが、この軍国主義批判を見逃さなかった。経緯は不明ながら、「編集部の全員がパージされ」（北条「緑丘でてから二十年」、北条らが新たな編集部長となった）。

小樽で教えはじめたばかりのリチャード・ストーリーの手紙の一節——「当初七月には、中国侵略政策に対する批判が聞かれましたし、ここの学生の中にも大学新聞で政府を「ファシズム」と攻撃した者も、何人かいました。これが波紋を呼び、以来はよく知っている学生たちは、軍部権力を激しく嫌悪すると口では言いますが、こうした嫌悪感も頼りにはなりません。戦争が有利に進行する中で、国全体としては政府を支持しています。日本の知識人たちも胸奥では戦争を非難しながら、抵抗はできないのです」（ドロシー・ストーリー『リチャード・ストーリー』——はおそらくこの事件に関連しており、興味深い）。

報国団・報国隊

日中戦争が全面化した一九三七（昭和一二）年以降の苫米地校長の発言をみると、『緑丘』第一〇四号（三七年一月二五日）の「支那事変と外交問題」は「支那事変は不可避、必然性を帯びたもの」という立場からの論である。同第一〇七号（三八年一月二五日）の「軍国の新年を迎へて」では、「冷静を保ち、貿易の増進、国交の醇厚を計るを賢とす」としつつ、日本は「無上菩提心を以て破邪降魔の剣を抜いた」とし、「此の大慈悲心が徹底するまでは矛を収めない断乎たる決意を以て、貴重なる人命と莫大なる国費とを犠牲にしてゐる」と述べる。三八年一〇月二五日の『緑

丘』第一一六号の「時局と世界の動き」では、「^{あやま}過てる平和思想、これに基いた平和機構の如何に危険にして有害無益なるかを世界に知らしめるのが、現下国民の負はされた義務である」と論じる。

戦時体制へのこうした協調は、緑丘の教育研究体制に反映する。三八年三月の卒業式の校長告辞において、「北シテ滿蒙北支ヲ拓^{ひら}キテ皇道日本ノ建設拡張ヲ企ツルモ、亦大和男児ノ真骨頂ナラズヤ」(『緑丘』第一〇九号、三八年三月二五日)と檄を飛ばす。また、四一年一〇月の創立三〇周年式典の訓辞では、「入リテハ智徳ノ研鑽ニ努メ、出デテハ国防体制下ニ修練シ、以テ皇運ヲ扶翼シ奉ルタメ、日夜勇奮敢闘致シテ居リマス」(『緑丘』第一五二号、四一年一〇月二五日)と述べる。

学園の戦時体制化の画期となったのは、一九四〇年一月の小樽高商報国団の結成と、翌四一年九月の学徒報国隊の結成である。いずれも文部省の直轄学校校長会議などで方向性を定められていたもので、報国団は、それまで比較的学生の自主的な運営にまかされてきた校友会を解散し、「俱学俱進の修練道場組織」の確立をめざした。半年前にはまだ「緑丘から校友会を引抜いては何も考へる事は出来ない」「緑丘の歴史を作るものは教授でもなく、先輩でもない。実に現在ある学生自身の手でなされる」(『緑丘』第二三三号、四〇年三月二五日)とその存在意義が強調され、五月の応援団長推戴^{すゐたい}式では「学園の向上は校友会の向上発展にある、この為には我は学園に於ける真の意味に於ける自治を欲するものである」(同、第一三五号、五月二五日)という発言もなされていた。そうした自治的な志向は、「学校ガ教学ノ本義ニ基ク修練道場タルノ体制」の確立という大義名分を前に吹き飛ばされてしまう。小樽高商報国団では、次のような三カ条の「綱領」が規定される(『緑丘』第一四一号、四〇年一月二五日)。

- 一、小樽高等商業学校報国団ハ国体ノ本義ニ透徹シ、文ヲ修メ武ヲ練リ、尽忠奉公ノ信念ヲ涵養スベシ
- 一、小樽高等商業学校報国団ハ礼儀ヲ正シクシ、気節ヲ尚ビ、廉恥ヲ重ンジ、賢実剛健ノ気風ヲ奨励スベシ



報国隊の結成 (『緑丘』151, 1941. 9. 25)

一、小樽高等商業学校報国団ハ強健ナル身体旺盛ナル気力鞏固ナル意志ヲ錬成シ、肇国ノ理想顕現ニ邁進スベシ

「在来ノ校友会其ノ他ノ校内団体ヲ再組織シ、之ヲ現下重要ナル諸種ノ修練施設ヲ加へ、学校長ヲ中心トシ、教職員生徒ヲ打ツテ一丸トスル団体ヲラシメ、以テ其ノ活動ヲシテ一元的有機的タラシメントス」という趣旨の下に、校長を团长とし、その下に総務部・鍛錬部・国防部・文化部・生活部をおいた。当初、鍛錬部には野球・スキー・柔道など一一の班を、国防部には射撃・国防競技・防空訓練・端艇の四班をおき、共済は生活部が担当した。総務部には、『緑丘』を編集刊行していた新聞部を新たに情報班として所属させた。

四二年四月段階では、团长∥校長の下に本部を置き(本部長 浜林)、総務部(部長糸魚川)、鍛錬部(部長室谷)、国防部(部長嵯峨)、文化部(部長手塚)、生活部(部長木部)で、各班長も大半が教員となっている(庶務係「通知紙」、一九四二年)。

これらのなかでも中心は「武ヲ練」ること、つまり鍛錬部で、全学生は強制的にいずれかの班に属し、毎週「鍛錬日」が設けられた。一九四一年五月七日の最初の「鍛錬日」には、「校庭に

各班毎に整理し、皇居遙拜、鍛錬実施上の注意を受けた後、約二時間に亘つて最初の鍛錬を行つた。各班は夫々道場に、プールに、山上グラウンドに、校庭に、国防競技場に、或は遠く手宮グラウンドに報国団綱領に則つて剛健なる鍛錬を行ひ、頗る良好なる成績」〔緑丘 第一四七号、四一年五月二五日〕を残したという。毎週水曜日、放課後二時間を費やした。

応援部は一度解散となつたものの、まもなく「推進隊」として復活した。「推進隊は、報国団の中にあつて、報国団長の命を受け、率先躬行、報国団の各班の運営を円滑ならしめる推進力となる」〔緑丘 第一四七号〕ことが求められた。隊長は校長によつて任命された。

報国団結成後も、依然として運動班関係は北大予科戦や高専大会を主要な活動としていた。ある学生の報国団への期待は「文化的なスポーティな相互のつながり」〔緑丘 第一四四号、四一年二月二五日〕というものであつた。文化部の活動も以前と変わらない。音楽班では「音楽の真の喜びは自ら演ずるところにあるといふことも真理であらう。されば班員は各部に属して練習に努め、本年は校内発表会をも開催せんと意気込む」という具合であり、文芸班に至つては「およそ異色が我緑丘の特色ならば、文芸熱の旺なることも緑丘の一つの異色である、而して現在の如き時代にあつて、兎角文化問題が忘れ勝なことがあるのである。されば斯る時こそ、下から上る文化問題に対する情熱は、大なる意味をもつてゐるであらう」〔緑丘 第一四六号、四一年四月二五日〕と意気込むほどである。

校友会から報国団に転換されても、学校側が意図する「国体ノ本義ニ透徹シ、文ヲ修メ武ヲ練リ、尽忠奉公ノ信念ヲ涵養スベシ」という方向は、タテマエにとどまつていた。『緑丘』第一五一号（四一年九月二五日）の論説「学校報国団の結成」には、「国家の要求する線に、団員の肉体的精神的向上を最高度に発揮する如く学生団員の奮起が要望されたにも拘はらず、それが自覚的な熱意となつて報国団の意図する所を実現するといふことの余りみられなかつたのは遺憾であつた」という一文があり、報国団が十分に機能していないことをうかがわせる。四二年四月二五日



防空演習（1942年頃）

縦の組織というべきもので、「文部省の命令一下、適時出動して要務に服し得る組織」であった。やはり校長を隊長に、軍隊式に各学年を大隊、各クラスを中隊、さらに中隊を三つの小隊に分け、指揮指導系統を明確にした。これ以後、報国隊は中隊単位で「農業増産に、生産力拡充に、国防事業に対する作業や防空訓練等」にあたることになる。

迫る戦争の影

一九三五（昭和一〇）年七月、「皇軍聖戦ノ跡ヲ実視セシムルト同時ニ、満州国発達ノ情况ヲ観察セシメ、以テ我對満国策ノ真髓ヲ把握セシムル」という目的で、全国の学生三〇〇名を派遣した学徒至誠会の派遣団に、校長や配

の『緑丘』第一五八号の論説「報国団への積極的関心」でも、「昨年は試験時代とは云へ、報国団の行動には殆ど刮目して見るべきものがなかつた。殊にそれは文化部に於て低調を極めてゐた」と述べる。

これは小樽高商以外でも同様だった。そのため、四一年八月、文部省は大学や高校・専門学校に「指導系統の確立した全校編隊の組織編成」を新たに指示する。高度国防体制の整備のため、必要な業務と諸訓練の実践について、文部省では一カ月以内の学業の廃止を認めるほど、この臨戦態勢の確立に躍起となっていた。

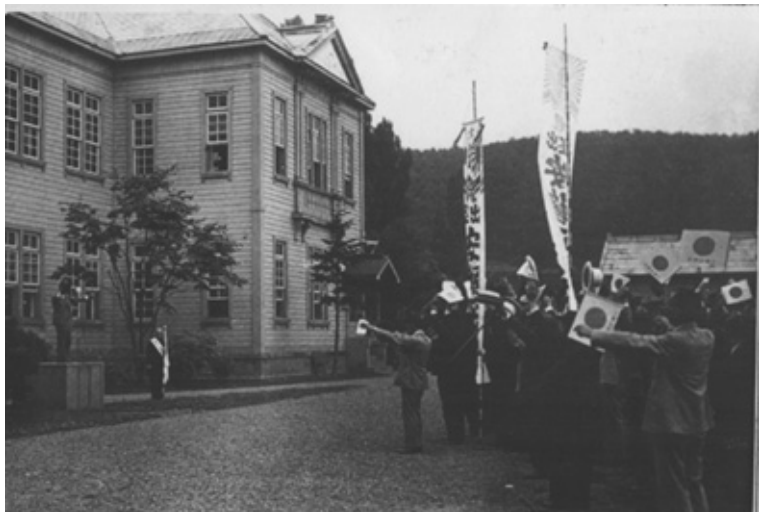
小樽高商でも九月一九日、「学園の臨戦態勢確立」を図るために「報国隊」が結成された。報国団を横の組織とすれば、報国隊は

属将校の「詮衡」により小樽高商からも二名の学生が加わっている。そのひとり高木重信は「満人の生活と気質」と題する感想文のなかで、「吾々日本は同人種たる東洋民族としてのみでなく、又東洋平和の為に今後其の責任の如何に重大なるかを知る者であります。日本は侵略国でなくして、真に東亜の平和を希ふ余り、満州国の誕生に正義心を發揮して、その発展を助長してやつてゐるのであります」（『学徒至誠会派遣団研究報告 第一篇 満州篇』、一九三五年）と述べていた。こうした優越意識は、帰校後、友人たちに伝播していっただろう。

三八年七月の修学旅行では、小林象三と玉井武を引率者に、四七名が朝鮮・満州を回っている。帰校後の「満鮮視察旅行 感謝報告会」では、「満州大豆に就て」「満州の労働事情」「満州の大陸経営」「弥栄村に就て」などを報告している。第一次武装開拓移民として知られる「弥栄村」に分宿した経験をもとに、「同化し難い日本人が、満州に於て現実を前視して生活するためには、祖国愛を以て骨を埋める覚悟を必要とする」（『緑丘』第二一五号、三八年九月二五日）と語る。玉井は『緑丘』紙上に「国策移民の一貌」を執筆した（第二一五号、第二一六号）。

日中戦争本格化の発端となった一九三七年七月七日の盧溝橋事件について、学校側では、七月二〇日、「正シク時局ヲ認識シ、如何ナル場合ニ臨ンデモ本校生徒タルノ襟度ヲ失ハザルヤウ心掛ケラルベシ」と付言して、政府声明を印刷した文書を夏休み中の在學生に送った。中華民國の首都南京が陥落すると、一二月一四日、校内で祝賀式をおこない、翌一五日には全教職員・學生が参加して、住吉神社で「戦勝報告を行ひ、非常意識の新たな昇揚」（『緑丘』第二一〇六号、三七年二月二五日）を図った。

『緑丘』紙上にも、戦争に直接関わる記事が増えてくる。第一〇七号（三八年一月二五日）には「本校最初の戦死者」として「南支の野」に散つた 噫！ 吉田幸蔵氏¹が、第一一三号（三八年七月二五日）には「本校学生最初の出征 安藤正巳君 勇躍征途に」という記事が載る。この最初の出征では、校内で壮行会をおこなった後、小樽駅まで全員で送った。安藤はまだ一年生ながら二二歳であり、陸軍歩兵第一補充兵として、丸亀の歩兵第一二連隊に入隊し



学生の出征風景（1940年頃）

た（なお、安藤は「満州」国境方面で軍務につくが、病を得て帰還し、四〇年四月、復学した）。

少し遅れて三九年一〇月に召集となる三年生の杵淵雄一は、「愈々征くことになった、幸ひ健康には自信があるから充分働ける。自分にとつて戦闘は生命の浪費ではない。生命の尊さを知らしめることであるべきだ。たゞ小樽が一段と懐しい」

（『緑丘』第二二八号、三九年一〇月二五日）と語る。

『緑丘』掲載の「同窓会欄」には「応召者芳名」が掲げられるほか、各地の支部での壮行会開催の報告や「戦線便り」などが多く掲載されるようになる。たとえば、「中支派遣軍〇〇部隊」諸橋昌保の送ってきた「弾下雑記」には、次のような戦闘の描写がある（『緑丘』第二一九号、三九年一月二五日）。

一、九月三日より富金山の攻撃に参加、敵は要害に拠り、味方は少数、十数日間は上海戦線以上の大激戦が展開され、彼我共に犠牲者続出、我砲弾の爲め、山の形が変りました。（略）

一、山を奪ふも次の山に敵陣ありて、右を取るも左の山腹より射撃を受くといふ困難なる山岳戦に、魚の鱗一

枚ずつ取る如く悪戦苦闘をつづける事月余、その間宿るに家なき、谷間に糧秣の配給も意の如く行はれず、煙草は吞尽し、只甘藷と谷間の清水に生命を託し、糊摺り及石臼にての原始的米搗も十分経験致しました。

そして、戦死も報じられる。四一年七月二五日の『緑丘』第一四九号は、「尊き生命を興亜聖戦目的遂行のため国家に捧げられた我が緑丘出身の名誉ある戦死者の写真及略歴」を掲げる。その一人、三二年卒業の岡田良太の「戦死状況」は、「中支方面ニ出勤、各地ニ転戦中ノ処、本年一月三十日、中支信陽戦線ニ於テ大殲滅戦ニ参加、奮戦中、午前一時三十分、壮烈ナル戦死ヲ遂ゲラル」というものであった。こうした「戦線便り」や戦死の通知は、学生たちに戦争がすぐ隣まで迫っていることを実感させただろう。

一九三九（昭和一四）年五月に「青少年学徒に下し賜はりたる勅語」が出されると、「本校ハ今後一層国民精神総動員ノ強化徹底ヲ喫緊時ト認め、教職員及生徒ノ精神的団結ヲ強固」（『緑丘三十五年史稿』）とするため、校長を総裁とする「精動強化委員会」を設置している。

日中戦争本格化以後は、かつての軍教事件当時の、のんびりした軍事教練の風景はなくなっていく。三七年一月の「積雪の中に果敢なる戦対を展開した」教練査察では、「殊に生徒の気合いが非常に充実して居つた」（『緑丘』第一〇六号、三七年二月二五日）という査閲将校の講評を受けている。三八年六月には一年生が札幌月寒連隊で三日間の兵営宿泊をおこなっている。一〇月には、二・三年生が小樽西北でおこなわれた第七師団の秋季演習に参加し、「氷雨をおかし 壮烈払暁遭遇戦」を展開した。前日には「過激なる運動はこれ慎まねばならぬが、演習に於ては此の事は当嵌まらず、又形式上は学生であつても、その実質に於ては何等将兵と異るところなし」という校長の訓示がなされた（『緑丘』第一一六号、三八年一〇月二五日）。

日常的にも軍事教練は励行された。三八年一〇月時点での目的は、「一、国防能力の増進 二、重点教育 三、時



軍事教練

艱克服 四、体力気力増進」(同前)であった。四二年の「教育概況」として文部省に報告したものによれば、「体育ハ主トシテ教練ノ時間ニ於テ軍事教育ノ基礎トシテ之ヲ行フ、ソノ重キヲ置ク点ハ耐久力、特ニ行軍力ノ養成」(庶務課「文部省往復綴」一九四一年)がめざされていた。

冬季になると、教練の時間はすべてスキー教練となった。四一年一月には、「時局の変転に北方の重要性緊急を告げる今日、本校のスキー教練にも新たなる注目が向けられてゐる」として全校スキー教練が実施される。その要項には、「各組スキー錬達者十名ヲ選定、小銃ヲ携行セシムベシ」(緑丘 第一四三号)とあった。

「臨戦態勢に入り、時局益々重大を加えつゝある」四一年九月、三年生は旭川で一週間の兵営宿泊を実施した。その「日誌」によれば、「各自防毒面をつけ、瓦斯室に入り催涙ガスの体験をした。不完全な防毒面をつけた面をつけ、瓦斯室に入り催涙ガスの体験をした。不完全な防毒面をつけた者はひどいめにあつた」、「夜は一寸先も分らぬ闇の練兵場で夜間演習。静かな晩を声一つ立てないで、じりじり攻めてゆけば敵も声を殺して警戒する。不気味な実感に襲はれた」などの実戦さながらの体験をしている。

報国隊結成直後の四一年一〇月には、防空に対する学徒動員計画として特別防護団が設置されている。その最初の総合準備訓練が、一九四二(昭和一七)年四月、全校参加で実施された。

勤労働員

国民精神総動員運動の具体化の一つとして、一九三八年から勤労働員が実施された。一九三八年五月の文部省直



勤勞奉仕

轉学校長会議で決定されたもので、小樽高商では第一期として、七月一三日から一週間、二・三年生と教職員が参加して、花園公園の地均し作業、山上グラウンドの射撃場の構築、校内シャンツェ下の開墾作業などでモッコ運びなどがおこなわれた。この間、学生たちは寮で共同生活を送り、朝四時半起床、作業は八時開始、午後四時半終了という日課である。この場面は古いフィルムに残っている。これを報じた『緑丘』第一一三号（三八年七月五日）の論説では、時局認識の足りない学生という世評を払拭して、「振り上げる鍬、打ち下ろす鶴嘴、全員嬉々として与へられた仕事に専心従事する学生を見よ。これが「小樽のゴミ」と呼ばれる高商生の真の姿なのである」と論じている。

一九四〇（昭和一五）年になると、勤労働員は日常化していく。五月中旬より一〇月中旬まで、全学年が週に三回、各二時間、紀元二千六百年記念事業として山上グラウンドに射撃場を構築することになり、土工事や植樹に従事した。また、二・三年生は七月中の三日間、一年生は九月中の二日間、各六時間の作業もおこなった。その第一日目は「二年生は出射地点の切崩し、三年生は的の土手作りに夫々それぞれ従事、土手は高さメートル五米巾十二米といふものだけに、早急には出来上りさうもない。急に夏らしくなつた太陽のぎらぎ

らした光線の下で、鍬を振ふ肩に、腕に、玉の如き汗が湧き出てゐる」〔緑丘 第二三七号、四〇年七月二五日〕という作業ぶりである。こうした「作業ノ前後ニハ、宮城遙拝及武運長久、祈禱黙禱等ヲ行フ」〔文部省往復綴、一九四〇年〕。

一九三九年から、文部省主催の興亜勤労報国隊に小樽高商からも学生と引率教官が参加している。三九年には、道場七郎（のちに特攻死）ら五名が茨城県内原訓練所で一週間の予備訓練後、新潟から出港し、「満州国」東寧で道路修繕などにあたった。四〇年にも五名が参加し、北京について、済南では「約一週間は付近の工場（主として紡績工場）に於て勤労作業に従事し、他の三分の一に当る一週間は官庁や教育施設等を見学し、残りの一週間は付近の軍隊と協力して警備に当」〔緑丘三十五年史稿〕った。

そのひとり太宰曹徳は、一か月余りの派遣から帰った感想として、「兵隊の忍苦の生活」を垣間見て、「物資の不足、生活の改善、色々の日常生活に我等はあまりにも不平が多すぎる」と記す。彼は「自分の進むべき方向なり、使命なりがいよいよ確乎たるとともに、一方に於て何かしら重苦しい大きな力が私の中に何かわからない渦巻を活動せしめつつあるのを感じる」ともいう〔緑丘 第一四〇号、四〇年一〇月二五日〕。

休暇中に勤労奉仕に従事する全国的な学生の自主的な集団である学生義勇軍にも、高商生は参加している。四〇年一二月、内原の冬季訓練に参加した大庭定男は「午前六時起床、午後九時消灯に到る迄、或は畑の耕作に、堆肥運搬に、溝掘りに、駄足」、著名人の講話などの日々を過ごし、「心身の洗濯、心身の鍛錬にはこの学生義勇軍の訓練程よいものはない」〔同 第一四三号、四一年一月二五日〕と語る。この刺激を受けてであろう、四一年三月の春季訓練には「語学乙類」のメンバー一名が大府と長野県の訓練に参加する。参加を呼びかけるパンフレットの掲げる合言葉は、「明晰なる頭脳とゴリラの如き肉体」であった〔同 第一四五号、四一年三月二五日〕。

一九四一年春からは、クラス単位で食糧増産のための校内の開墾作業も始まった。この目的も食糧増産にとどまらず、「行的訓練による心身の錬成」〔緑丘 第一四六号、四一年四月二五日〕にあった。「作業中は「黙つて働く」と云ふス



閲覧禁止図書（附属図書館所蔵）

ローガンに基き、全員黙々として、泥と汗に塗^まれて」（同、第二四七号）、校内シャンツェ付近の笹藪を切り開き、カボチャや豆類を栽培した。開墾から播種、草取りなどに「延人員約二千四百名、作業延時間数八七五〇時間」を費やした結果、秋には「予想以上の収穫」（同、第一五一号、九月二五日）をあげた。

閲覧禁止図書

小林多喜二を輩出し、軍事教練反対事件の先鞭を切った小樽高商では、一九三〇年代半ばにも社会科学の読書会事件を惹起していた。日中戦争も本格化するなかで、校内の思想的引締めも強まった。毎年の行幸記念日は、「恐懼感激ひたすら皇恩に報い奉らんこと」を誓う場となった。しばしば「日本精神」に関する講演会も開かれている。

学生が社会科学関係の著作に接する機会を減らすため、文部省は出版法などで発売・頒布禁止となった各大学・高専などの図書館の所蔵図書の閲覧禁止の指示を、一九三〇年代、たびたび出している。一九四〇（昭和一五）年七月一九日付「発売頒布禁止処分図書ノ取扱方ニ関スル件」では、「該当ノモノ有之ラバ、図書館ニ備付アルモノハ勿論、其ノ他学生生徒ノ閲覧シ得ベキ場所ニアルモノハ直チニ閲覧、貸出ヲ禁止シ」などと通牒していた。これに対して、その該当図書についての処置を、七月二七日、次のように報告している（図書館主幹は手塚寿郎）。

- 一 閲覧室ニ於ケル図書カードヲ除去シ、生徒ヲシテ本校ニ所蔵セルコトヲ知ラシメザルコト、ナセリ。

一 本校ニ於テハ一般閲覧者ノ書庫出入ハ禁セラレ居ルモ、特ニ書庫内ニ特定ノ戸棚ヲ設ケ之ヲ収容シ、嚴封ヲナシ、一切ノ閲覧、貸出ニ供セザル様特別ノ取扱ヲナセリ。

閲覧禁止となつたのは、福本和夫『社会構成並に変革の過程』（一九二六年）や鈴木茂三郎『日本独占資本主義の展望』（三二年）、河上肇『第二貧乏物語』（三〇年）・『資本論入門』（三二年）などの四一冊であつた。主に「社会問題」の分類に集中している。このリストは同時に小樽警察署長宛に報告されている。

戦後になつて、ふたたびこれらの図書は閲覧に供されたが、現在でも背表紙には「閲覧禁止」のラベル、内表紙にはこの処置に関する張り紙が残され、戦時下の言論統制の痕跡がうかがえる。

そうした図書館の閲覧の自由が失われるなか、学生の読書傾向はどうなつただろうか。「緑丘の沈滞」の声が高まつた一九三〇年代前半に比べ、学生の閲覧は増加したようである。一九三八（昭和二三）年のある月の閲覧者数は、「和書に於ては二年は一年の倍、三年は又二年の倍」であり、「経済を筆頭に商業、法律、文学此れに次いでゐる」（『緑丘』第一一八号、一九三八年二月二五日）。一年は文学・語学が圧倒的に多く、二年と三年では商業と経済・財政が上位を占める。三年生では雑誌の閲覧も多い。

一九四〇年一〇月の調査では、二年前に比べて各学年ともかなり減少しており、「全国高商中優秀を誇る本校図書館の利用者がこれ程迄に低下したことは驚くべき事」（『緑丘』第一四二号、四〇年一月二五日）と嘆かれている。一日当りの貸出数は、一年が一九冊、二年が四九冊、三年が二九冊であり、各学年在籍数から見ると、その一割か二割の利用にとどまる。一年では経済・哲学・文学の順で、二年は哲学・経済・雑誌の順、三年では雑誌・経済・法律の順となつており、全学年では経済が首位で、哲学、雑誌の順となる。この哲学書閲覧の多さは「本校特異性の一端を示す」とされるが、学生たちが戦時下で生きる意味を真剣に模索していることを示している。

一九三八年の生計調査中の学生の読書傾向では、火野葦平の『麦と兵隊』が群を抜いており、島木健作『生活の探求』、火野『土と兵隊』とつづく。『学生と教養』などの河合榮治郎編の学生論、出隆『哲学以前』や西田幾多郎『善の研究』など、哲学書もよく読まれている。雑誌では『中央公論』と『文芸春秋』が双璧で、次いで『改造』、『日本評論』となる。新聞では『東京朝日新聞』が圧倒的で、『北海タイムス』と『小樽新聞』はかなり引き離されている。『東京日日新聞』や『読売新聞』も含めると全国紙の割合が多く、就職活動との関連があるかもしれない（『緑丘』第一一七号、三八年一月二五日）。

その後、しばらく時間が空くが、四二年五月二五日の『緑丘』第一五九号に詳細な「読書調査」が載る（『経済』関係は次号とされたが、掲載されなかった）。二年生と三年生を対象にしたもので、「文芸」作品別では夏目漱石『草枕』、中河与一『天の夕顔』、ドストエフスキー『罪と罰』、ジイド『窄き門』の順（ここに一冊だが小林多喜二『蟹工船』が入っている）、作家別の海外ではドストエフスキー、ジイド、ヘルマン・ヘッセ、国内では漱石、中河与一である。火野葦平とその著作はあげられていない。

哲学では、純哲学として出隆『哲学以前』と西田『善の研究』が、教養書として倉田百三『愛と認識との出発』と『出家とその弟子』、三木清『哲学ノート』が多い。雑誌では『中央公論』がトップで、『改造』と『日本評論』がつづく。新聞では『東京朝日新聞』について『小樽新聞』が多く、ついで『東京日日新聞』と『北海タイムス』の順である。全般的には、戦時下においても学生たちの読書傾向は堅実といつてよい。

図書館利用者が減少するなかで、街の書店は賑わう。S生の投稿「読書寸感」には、「いつものことながら町の本屋に高商生の姿が絶えたことはない。寮生等で毎日のやうにあの山の上から下りて来て、熱心に書物を探してゐる人がある。皆如何にも悠然として書棚に眼を通してゐる。恰も満ち足りた人にやうに」とある。このS生の主張は「趣味的な好事的な」読書で足れりとせず、高商図書館の良書を読むべきだ、という点にあった。

第五節 アジア太平洋戦争と緑丘

一二月八日の情景

『緑丘』第一五四号（一九四二年二月二五日）は、一面トップに宣戦布告の「詔書」を掲げ、その下で一二月八日の「歴史的なる緑丘の姿」を描写している。

此の日、緑丘の朝は白銀の中に静かに明けていった。例へ講義が十時からある者も、異常な興奮につ、まれて緑丘へと詰めかけるのだった。ちつとして居られないと云ふ気持が期せずして登校を早めたのである。今日はまた挨拶が平常のそれとは変つてゐた——いよいよやつたね——うん、始まつたな——そこに話題が始まる、さつそく世界地図を持つて来た用意のいい一人の生徒を囲んで、正に談論風発、既に敵を呑むの慨……

授業が始まると、学生も教員も緊張気味である。休憩時間になって、スピーカーの前は黒山の人だかりとなり、「皇軍の戦果」が「一つ発表される毎ごとにどつと揺れて、「すごいなあ」の歓声があちこちに洩れる」。宣戦布告の詔書の放送について、愛国行進曲・軍艦マーチが流れると、学内の興奮は最高潮に達した。そして、このとき、後述するように外国人教師D・マッキンソンは、教室からすでに小樽警察署に連行されていた。午後になると、雪にぬかるむ道を学生・教職員は「隊伍堂堂市中行進」し、住吉神社に戦勝祈願をおこなっている。一三日にも暴雪雨のなかを小樽市主催の「市民大会」に参加している。

授業が終わって「街に出てみると、西村、オリンピックといつた行きつけの喫茶店はどこも、興奮して試験のこ

とも手につかぬ高商生でいっぱいであつた」（杵淵雄一「あのころのこと」、小樽高商昭和十六年後期卒業生会『金鱗——卒業五十年の星霜を偲ぶ——』）。

一二月二六日の繰上げ卒業式の告辞のなかで、苦米地校長は「国力ヲ挙ゲテノ長期戦ナルコトヲ覚悟シ、隱忍持久、徹底的ニ凱歌ヲ奏セズバ、百年^ほヲ収メザルノ感慨ナカルベカラズ」と必勝を誓う。また、「今次ノ聖戦ハ単ナル勝利ノ決戦ヲ以テ満足スベキニアラズ、東亞民族ノ解放、大東亞共栄圈ノ確立ニアリ、帝国ノ此ノ使命達成ニハ泰西文化ニ比シ、更ニ高度ノ文化ノ建設、卓越セル徳性ノ培養、鞏固ナル精神力ヲ錬成セザル可ラズ」（『緑丘』第一五号、四二年二月二五日）とも述べた。

それに対して、『緑丘』第一五五号の論説「戦時と我等」は沈着冷静である。緒戦の勝利に酔うことなく、学園・学生の本務を貫け、と説く。「動もすれば之が興奮にかられて、学園本来の使命を忘れ、眼前の事象に対してのみ汲々として、学業にいそしむ心掛を喪失する様な事があつてはならぬ」と論じているのである。同号「編輯後記」でも、「起つ時は決然起つて銃をとる、それまでは学徒の使命に極力邁進する……徒らに戦争に沈着を欠き、研鑽を外に、世論に走るの是最も慎む可きである」とする。

このように論説などであえて「学徒の使命」に言及するのは、やはり校内において相つぐ戦勝に興奮し、「沈着を欠き、研鑽を外に、世論に走る」状況が生まれてきたからであろう。最初の「大詔奉戴日」となった四二年一月八日は始業式を兼ねておこなわれ、校長から「熱烈な訓話あり、多大の感銘を与へた」（同前）。学年末試験中の二月一五日には、「東亞侵略の根拠地」シンガポールの陥落のニュースが伝わり、歓喜にわいた。一八日には第一回戦勝祝賀会に「吾校に於ては市内在住学生一同は花園公園に参集して、共に此の感激に浸ると共に、戦没将兵に対して心からなる感謝を捧げ、住吉神社にて皇軍の武運長久を祈つた」（『緑丘』第一五六号、四二年二月二五日）。

その一年後、一九四二年の「大詔渙発一周年記念行事」は、神社参拝・式典・講話と一日が費やされた。住吉神

社の参拜では、二年生は武装し、銃を携行した。午後の講話は南亮三郎の「戦時経済ニ関スル講演」と嵯峨大佐の「軍事講話」だった（庶務係「通知綴」、一九四二年）。

マッキンソンの検挙

英語教師D・マッキンソンについて、逸話は数多い。伊藤整も教室の内外で発せられた「だじゃれ」の名手ぶりを伝えているし、ロバ先生（この愛玩したロバの剥製は現在も小樽市立緑小学校に保存されている）、「赤い円屋根の家」などは、小樽の街の人たちに馴染みの深いものであった。

ところが、戦争の影が忍び寄る一九三〇年代半ばころから、マッキンソンに対する警察の監視の眼が光りはじめ、「外事要注意人」（北海道全体では九名）として言動が監視されるようになった。その理由は、学生に課した夏季休暇などの英文文「わが故郷について」が各地の軍事機密の探知・収集にあたるということだった（内務省警保局『外事警察概況』一九三七年版）。

そして、一九四一（昭和一六）年二月八日のアジア太平洋戦争開戦の朝、授業中の教室において小樽警察署の警察官によりスパイ容疑で検挙された。英語の教員太田朗は「小樽の思いで」（『緑丘五十年史』所収）のなかで、次のように回想している。

十二月八日の真珠湾攻撃の報が伝わったときの異常な昂奮をつつんだ空気。しかし、それとともに忘れられないのは、その少し後で起こったマッキンソンさんの拘置であった。「日本の方がアメリカより民主的です。私はアメリカより日本の方が好きです」と、断末魔のように息を切らしながら教官室で叫んでいる彼を、有無をいわず二、三人の刑事が連れ去って行った。私は思わず、傍らに居られた二人の先生に、「この戦争の目的と意

「マッキンノン教師収容ニ付報告」〔秘文書綴〕1941.12.17

義が何であるか、よく考えて見る必要がありますね」といった。一方の先生は即座に「君、今頃そんなことをいっているとぶんなぐられるぞ」といわれた。もう一方の先生は、暫く考えた後で、「そう、もつとよく考えて見ることが必要だね」といわれた。このどちらの先生の言も誠にもつともな当時の情勢であった。われわれの心の中には、自分自身よく分らない、とんでもない事をやり出しているのではないかという不安と、しかし真珠湾攻撃の成功でわき立って「米英撃つべし」と張り切っている世間にうっかりそんな不安をもらせば、大変なことになるという気持ちとが同居していた。

マッキンノンは小樽警察署の取調べにおいて、全身の負傷や前歯が折れるほどの暴行を受けた。その後、北大の英語教師レーン夫妻らとともに、札幌の大通拘留所に拘留され、四二年六月、日米交換船により強制送還された。

このマッキンノンの検挙について、一二月一七日付で学校当局は文部省に「本月八日午後二時本校ヨリ連行収容セラレ候」と報告している（「午後二時」は誤り。「連行収容」は当初案では「逮捕」。庶務係「秘文書綴」、一九四一年）。その後、文部省からの指示を受け、翌四二年一月には拘留中で登校できないためとして給料を減額し、さらに三月末日には契約破棄を通告している（契約は四〇年四月に更新され、四三年三月までの期間となっていた）。なお、フランス語の大黒マチルド、ドイツ語のW・クロルの嘱託契約は四二年四月に更新されている。

マッキンノンを襲った悲劇は家族をも直撃した。後日、苦米地英俊はその事情を「預金も避暑地の海岸に建てた家屋も、ピアノ、タイプライターその他一切の家財道具も警察に差押さえられ、二束三文に売り飛ばされ、その金で当時入院中の夫人の入院料が払われたが、その収支決算は今も明確にされていない。夫人は小使銭にも不自由して淋しく此の世を去り、卒業生、在校生の有志が葬儀を執行した」(「元備外国人教師マッキンノン氏に対する年金給与方申請書」中の苦米地「推薦書」と記す)。

のちの日本文学研究者となる長男のR・マッキンノンは、小樽中学(現小樽潮陵高校)を卒業し、金沢の第四高等学校在学中だったが、取調べのため小樽に連行され、やはり強制送還された。

この事件のわずかな慰めは、戦後になって、マッキンノンが卒業生の招きで来日し、小樽や各地を回り、旧交を温めたことである。

「標準教授要綱」に準じて

一九四一(昭和一六)年一二月の繰上げ卒業に対応した前述の措置は、暫定的なものであった。『緑丘』第一五三号(四一年一月五日)は、「曠古の時艱克服へ 明年度諸対策近く決定」という見出しで、「六ヶ月間の短縮を受け、明年九月卒業予定の現二年生に就ては、その及ぼすところ甚大にして、学課目の整理統合、授業時間数の増加と共に、学生の時局に対する認識の飛躍的前進が切に期待される」とした。この時点では、学課目の減少については「重点主義」で臨むだろう、と観測された。

四二年四月の新年度に向けて学校規程第二条の学科目表の改正が実施されるが、半年の繰上げ卒業とともに、そのカリキュラム改正を促したのは高等商業教育の「標準教授要綱」であった。

文部省主導による教学錬成の推進は、各校に前述のような報国団や報国隊を設立するだけにとどまらず、教育内

容そのものの転換を迫った。戦時に不急不要のものと見なされかねない商業教育の転換はとくに急角度でなされた。文相を会長とする実業教育振興中央会では、一九四一年一月に高等商業学校教授要綱調査委員会を設置し、早くも五月に「標準教授要綱」を決定していた。「国体ノ本義ト興亞ノ大使命ヲ体シ、職分ヲ通ジテ皇運ヲ扶翼シ奉ルノ信念ヲ涵養スルコト」など五項目から成る「日本商業精神」の確立をめざし、学科目数の整理減少、「国史、日本産業論、東亜経済論」などの必修科目の新設、報国団活動にともなう授業時間数の減少などが打ち出された（『実業教育』第三巻第七号、四一年七月）。

この高等商業教育の転換は、苫米地自身の語るところによれば、「従来大学化した授業内容の簡易化と、体育奨励の強化」を主眼点し、小樽での具体化は「三十一時間の授業時数の中に教練体育平均四時間、哲学論理的学問は廃止、放課後の勤労作業の強化等々」（『緑丘』第一四八号、四一年六月二五日）となる見込みという。これらは、小樽高商の特色をもたらししていた多様な選択科目や外国語の時間数の減少などを余儀なくさせるものであった。その直後に繰上げ卒業にともなう暫定的なカリキュラムの修正に追われたが、新年度から「標準教授要綱」に即した根本的なカリキュラム改正の実施となった。

次のような学科目表である。

まず外国語の時間数が大幅に減少し、それが全体の時間数を週三二時間に引き下げた。それまでは英語および「支那語」とそれ以外の選択外国語で最大週一二時間までの履修が可能だったが、合計九時間ないし七時間（二・三年次）となった。「海外経済事情」「外国貿易実務」など、それまで英語でなされていた科目は廃止となる。新設されるのは、「国史」「日本産業論」「東亜経済論」の三つである。従来の「体育」（二時間）は、「体操」（一時間と「教練」（二時間に拡大される。「体操」は、柔道・剣道・銃創術・水泳・「国防競技」（陸上競技で、手榴弾投擲や障害物競争など）からの選択となる。

第五節 アジア太平洋戦争と緑丘

商法	民法	算外 英語 通商 学	第一 外國語 学	数学	国語 及 漢文	国史	数 学	體 操	修 身	学科 目
		二	六	二	二	一	二	一	一	第一 學年
		二	六	二	二	一	二	一	一	第二 學年
		三								第三 學年
		三								第四 學年
		二								第五 學年
		二								第六 學年

大 次 臣 了
官 官 官 官
總務課長 主任

小樽高等商業学校規程中改正、併
令 案
文部省令第126號
小樽高等商業学校規程中左ノ通改正又
年 月 日
文 部 大 臣
第一條 中等科目及其程度未ノ左ノ如ク改ム

會計学	商数数学	商学	商工業学	工業概論	演習	特別講義	備考	簿記	保険論	交通論	經濟無情論	商業概論	東亞經濟論	日本產業論	統計学	金融論	財政学	經濟地理	經濟史	經濟政策	經濟學論	
甲一	乙一	乙一				三二	一本表中(前)印ア附シタルハ商業学校出身者及之ニ準 ズル者(中)印ア附シタルハ其他ノ者之ノ課ス 一體表中ハ武道ヲ含ムモトス 第一外國語ハ語学甲類ニ於テハ英語トシ語学乙類ニ於	乙二	乙二	乙二	乙二	乙二	乙二	乙二	乙二	乙二	乙二	乙二	乙二	乙二	乙二	乙二
乙二	乙二	乙二	乙二	乙二	乙二	乙二	乙二	乙二	乙二	乙二	乙二	乙二	乙二	乙二	乙二	乙二	乙二	乙二	乙二	乙二	乙二	

学科目表 (1942、「小樽經濟専門学校」〔国立公文書館〕)

実際にどこまで忠実に実施されたかは不明だが、「標準教授要綱」にはそれぞれの学科目に「教授方針」や「注意」点が定められていた。「国史」の場合は「国初ヨリ現時ニ至ル各時代ノ歴史的変遷ヲ知ラシメ、特ニ我が国民精神、政治、経済、文化ノ国体ニ淵源スルモノナルコトヲ示シ、皇国発展ノ跡ヲ明ニスルコト」というものであり、「東亜経済論」では「従来ノ経済事情又ハ東亜経済事情等ノ学科目ニ於テ教授セルモノニ統一性ヲ与へ、東亜共栄圏建設トノ関連ニ重点ヲ置ク」とされた。また、「商業概論」では、それまでの「市場論」「配給論」などを統合して、「国家ト商業トノ関係ニ留意シ、又市場分析、配給統制等ノ教授事項ヲ設ケテ経済界ノ新情勢ト即応スル様留意ス」ることが求められた（「緑丘三十五年史稿」）。

「研究指導」は「演習」となり、二年次一時間、三年次二時間となる。それまでの小樽高商の特色であった多様な選択科目（一年次三科目、二年次一七科目、三年次一九科目）の名残りとして三年次に「特殊学科目」五時間分が置かれた。第一と第二分科に学生を分け、それぞれ八学科目中から五科目を校長が指定して履修する。また、不定時の「特別講義」や随意科目（「計算実務」や「商業文」など）も配置された。

修学年限短縮のために、四二年度は早くも三月一九日に始業式があり、入学式も三月三一日に実施された。夏休みは七月二日から八月三日までで、四日から第二学期が始まった。しかも八月中は早朝からの授業となった。三年生の卒業試験は八月三一日から、卒業式は九月一六日という慌ただしさだった。第二学期も二月上旬で授業が終わる。

ただし、三年生は九月卒業のため、この改正とは別に「臨時規則」にもとづく学科目の履修となった。「語学甲類」では英語六時間となるが、選択学科目時数は三時間のみとなる。「語学乙類」は英語四時間と「支那語」八時間で、すべて必修科目の履修となる。週授業時間は両類とも三九時間である。教務課長は「六ヶ月間に一学年間の授業の大半を行はんとするのであるから、新三年生の授業は大量に、大速度を以て行はれる為、休暇中に準備し、あわて

「昭和十八年度本科ヲ卒業スベキ者ニ対スル臨時規則」
(1943、「小樽経済専門学校」〔国立公文書館〕)

る事のない様」(『緑丘』第一五六号、四二年二月二五日)と語るが、早朝や放課後に授業時間を増やしても限界があり、また勤労働員や軍隊宿泊もあり、未消化な部分を残したと推測される。

翌四三年九月卒業に向けて、四月から「臨時規則」が一部変更された。「語学甲類」は週三六時間、「語学乙類」は三七時間となっている。すべて必修科目で、前年度に比べて、「甲類」には「農業及植民政策」や「簿記」などが、「乙類」には「東亜経済政策」などが復活している。

戦時下の授業風景

高商第三二期(一九四二〔昭和一七〕年四月入学、四四年九月卒業)の方々の卒業五〇周年記念誌『春とこしえの緑が丘』(一九九四年)に「生かされて来た日日」という文章を寄稿した深井明雄は、在学中の各学年の授業時間割表を詳しく紹介している。深井は「語学乙類」に〇分終業となっていた。週の授業時間数は一年次で三七時間、二年次で三八時間であった。在学期間が六カ月短縮される影響で、早くも一年次から時間数が増加していた。

深井によれば「全体的に授業密度は高く、一週支那語六時限、英語四時限、その他経済、商業、法学他多彩な課目があるが、軍事教練が二時限の割当ですんだ事は戦中とはいえ学問の自由がまだ優位に立っていた」。二年次になってもこの質がまだ維持されていた。一九四四年の春休みには、南亮三郎「社会政策」など教科目の集中講義がおこ

時間表 昭和17年 4月1日 1学期		時間表 昭和18年10月11日 2年 2学期		時間表 3年 1学期 (40分授業) 昭和19年4月24日より実施														
月	火	水	木	金	土	月	火	水	木	金	土	月	火	水	木	金	土	
8.00																		
8.10	1	地	物	商	国	商	商	交	民	民	支	1	1	東	商	支	商	支
8.20		理	化	算	英	史	経	品	品	品	支			経	法	法	支	支
9.00		理	化	算	英	史	経	品	品	品	支			経	法	法	支	支
9.10	2	支	支	支	支	支	支	支	支	支	支	2		商	保	計	商	支
10.00		支	支	支	支	支	支	支	支	支	支			英	法	計	法	支
10.10		支	支	支	支	支	支	支	支	支	支	3	教	英	法	計	法	支
10.30	3	支	支	支	支	支	支	支	支	支	支			東	商	計	支	支
11.20		支	支	支	支	支	支	支	支	支	支			経	計	計	支	支
11.30	4	商	経	学	支	支	支	支	支	支	支	4		支	支	支	支	支
12.20		商	経	学	支	支	支	支	支	支	支			支	支	支	支	支
1.00	5	算	商	支	支	支	支	支	支	支	支	5		支	支	支	支	支
1.50		算	商	支	支	支	支	支	支	支	支			支	支	支	支	支
2.00	6	算	商	支	支	支	支	支	支	支	支	6		支	支	支	支	支
2.50		算	商	支	支	支	支	支	支	支	支			支	支	支	支	支
3.00	7	算	商	支	支	支	支	支	支	支	支	7		支	支	支	支	支
3.50		算	商	支	支	支	支	支	支	支	支			支	支	支	支	支

授業時間割表 (1942~44年)

なわれた。南の担当する授業では、アダム・スミスやマルサス、限界効用学説などが解説され、「為すにまかせよ、過ぐるにまかせよ、経済はひとりで行進する」という名調子は学生に強い印象を残した。

繰上げ卒業にともない、九月には二年生に向けてゼミナールの募集が始まる。意欲に燃えた二年生は「教室でも、寮でも、将又地獄坂の登り下りにも此の話」に熱中しているという。「秋から冬への大自然の成行とは逆行して、熱い研学熱が丘に澎湃として湧き上がる」と、『緑丘』第一六三号（四二年九月二五日）は報じる。

戦時下にもかかわらず、自由な、アカデミックな雰囲気も一部に残っていた。荘子直「憶い出すまゝ、に」（『春とこしえの緑が丘』）には、次のような回想がある。

学校であれほど戦争を鼓舞謳歌されてきたのに、此処は至って静寧であり、例の赤レンガの角から、赤い派手なスーツをモダンに着こなしたフランス語のマチルド先生と、松尾先生が、にこやかにフランス語で語らいながら、そぞろ歩いて来たり、陽光のふ

りそ、ぐ校庭の片すみに生徒をあつめて、ロシヤ亡命貴族のスミルニツキー先生が、ロシヤ民謡を楽しそうに教えながら授業を続けている光景などをみていると、いま日本が生きるか死ぬかの戦争をしているというような悲壮感とはおよそ縁遠い、何かおのずから解きほぐされてゆくようなどかで平和な歓びにつまれるのであった。

戦争の狂気にあえて抗するように、今までどおりのスタイルを貫き通す授業もあつたために、学生たちは戦争の「悲壮感とはおよそ縁遠い何かおのずから解きほぐされてゆくようなどかで平和な歓び」に驚き、束の間の時間ながらそれを享受するのである。

もつとも、太黒マチルドにとつては「精神的につらかった」。「戦争の終りごろは、このままの状態が続いたら頭がおかしくなりそうに思いました」と回想するのは、小樽に通う度に憲兵の誰何を受け、「学校と駅の間以外、絶対誰の家にも寄つちやいけない」などとされたからである。しかし、受講する学生は「全然人数は減りませんでした」、親切にもしてくれました」（太黒マチルド「札幌半世紀」『北方文芸』第一号、一九六八年一月）という。

学生たちも戦争を相対視し、戦争に迎合しようとする学問に疑問を投げつけた。戦後に学長となる長谷部亮一の「*Natura non facit salum*」（『緑丘』第一七四号、四三年八月五日）は、後年の回想によれば「本当のねらいは、当時華々しく流行していたゴツトルの構成体論的経済学や、日本経済学の創設といった風潮に、疑念を呈することであつた」（『緑丘』新聞への初めての投稿『春とこしえの緑が丘』所収）。それは、「新しい時代の到来せるが故に、全然別個の科学が以前の科学の地位を剥奪し、これを葬り去る事によつてその成立を許されると考へる事は速断に過ぐるものではなからうか」という一節などによくうかがうことができる。

高商第三三期（四三年四月入学、四五年九月卒業）の燦々会『燦々会の記録 卒業三十三周年記念』に、定期試

験に関する史料が収録されている。一年次には七月に一ヶ月の集団勤労動員があり、第一学期の試験は九月に入ってからとなる。九日から一七日まで、毎日二科目から三科目の試験がおこなわれた。たとえば、「商業英語」では「十日間ノ支払猶予懇願申上候」や「御信任ノ栄ヲ賜ラバ粉骨碎身、御信任ニ応ヘ奉ルベク候」など八題の英作文が課された。「経済地理学」では「近来に於ける我が経済地理学界の情況について」という論述問題である。「商品学」では「毒瓦斯ノ生理的作用上ノ分類ヲ挙ゲ、其ノ例ヲ付記スベシ」、「商業概論」では「商工組合法（昭和十八年三月十二日公布）に於ける「統制組合」の特質を述べよ」という出題である。

この時期の試験成績は、「優秀（甲乙）」「良好（甲乙丙）」「普通（甲乙丙）」の八段階に分かれ、「欠点学科目」「欠点二近き学科目」を明記して個人に通知された。戦時下においても「落第」で進級できない学生もいた。四三年四月の時点で、一年生のうち一四名が、二年生のうち一二名が原級にとどまった。三年生で卒業できなかったものも八名いた（庶務係「文部省往復綴」、四三年度）。

後述する学徒出陣で在学生数が急減したことに加え、勤労動員が本格化する事態に対処するため、四三年一〇月、それまでのクラス編成を第二外国語別に変更している。一クラスは二七、八名の人員となった。

後述する集団勤労動員や援農によって授業時間は大幅に減少するが、それにとりまう学力低下に対処するため、次のような応急策をとったと、経済学担当の長尾義三は回想する（「樽居追憶」『緑丘五十年史』）。

小樽高商では援農の出動する学生を数班に分けて一カ月位の輪番に派遣し、何れか一班だけは必ず学校に残ることとした。この在学班には、その間に在学する教官により集中講義で一年分相当の講義を聞かせ、知識が中途半端に終わることを防ぐ工夫をした。従って一カ年の所定科目数中、四分の一位の科目数しか受講せしめ得なかつたけれども、とにかく基礎的科目の概略は終始一貫して修得せしめた。

この効果は予期しなかった方面であらわれたという。東京商大、神戸商大および東北大学を受験した一〇名が一名を除いて全員合格したのである。他の経專がほとんど総倒れになるなかでの好成績だった。

手塚寿郎の離学と死

誰もが小樽高商の「至宝」と敬してやまなかった手塚寿郎が、一九四二（昭和一七）年九月、中国・上海の東亜同文書院大学に転じた。単身赴任での生活のなかで体調を崩し、一二月に小樽に帰省するが、そのまま病床に就き、四三年五月三日、四八歳の若さで死去する。『緑丘』第一七一号（一九四三年五月二五日）は、「巨星地に墜つ 手塚元教授逝く 丘哀悼に咽ぶ」と報じる。当時、手塚の小樽高商辞職は驚きをもって迎えられ、その上海行は強く危ぶまれた。なぜ、手塚の転身はなされたのだろうか。

『緑丘』編集部員として接していた杵淵雄一が繰上げ卒業後、四二年一月に手塚から送られた手紙には、次のような一節があった（「喪星——手塚先生の思い出」『手塚先生の追憶』）。

一 两年来私も色々と考えて見ましたが、此春四月からは十中の八・九の確率をもって、上海の東亜同文書院大学の方に留学（私費）することになるかも知れません。尤も同大学で教授になるのですが、とに角留学するのです。まだ自分の決心だけで校長の許可を得ず、どういふことになるやらと思っ
て行きます。夏休み（六・二〇—七月末）には帰って来る積りです。まだ公になって居りませんが、君にだけ申し上げます。噂は噂にして。



「噫!! 手塚先生」(1943年卒業アルバム)

この手紙からは、すでに四二年年初には手塚の決心がほぼ固まっていたこと、「留学(私費)」と「校長の許可」を重ねあわせると、この割愛には大きな壁が立ちあがるも、なお「私費」でも敢行するという手塚の決意が固いこと、手塚転身の「噂」が広まっていたことなどが推測される。そして、この転身への気持ちの揺れが「一兩年來」、つまり四〇年頃からつづいていたこともわかる。図書館員として信頼を寄せていた木田橋喜代慎に「学校関係では一番先に話しをするのだと前おきして、上海行きを告げ」たのは、四二年二月八日だった(「生きている手塚先生」、同前)。

手塚の離学の要因には、主として大庭定男が推測するような「大東亜戦争が激化してくるにつれ、「統制経済学」というようなものが学問の世界にも入って来たことへのレジスタンスではなかったか」(回想の手塚寿郎先生、同前)があるだろう。大庭の記憶する「人間の本生はそんなに急に変わるものではない」という言葉と、杵淵の記憶する「世の中もずい分変わったが、学校も変わったよ」(杵淵が在学中に出征し、二年後に帰校した時)という言葉の落差が、手塚のなかで広がり、抑えきれなくなっただけで済んだと思われ。その「統制経済学」への違和感の兆候は、四〇年以前にさかのぼる。『緑丘』紙上の論説から瞥見しよう。

「資本主義は何処へ行く」(第一一五号、第二一八号)について「純粹経済学と日本経済学」(第一一九号、三九年一月二五日)

を寄稿した手塚は、「我経済学界には日本経済学樹立の機運が澎湃として漲つて来た」として、それは「世界の経済学界の重要な場面に根強くびまんし行かうとしてゐる純粹経済学、平衡論派の経済学に向つて批判の鋭鋒をつき立てる」と観測する。しかし、こうした潮流に対して「日本経済学は純粹経済学上の理論を駆使して始めて存在することが出来る現象の認識もろくなさないうで、日本の経済政策を支持しようとしても、到底なし得られるものではない」と鋭く批判する。そして、第一二九号（三九年一月二五日）掲載の「歴史に見たる経済の自由と統制（一）」（続編掲載の第一三〇号は欠号）では、冒頭で次のように論じる。

可成り深刻な経済統制が、大規模の戦争をなさねばならぬときに絶対的に必要であることに對しては、我國民の誰一人でもが寸毫の疑念をもたない。だが私が注意して近來の我思想界の動向を見てみると、単に当面してゐる事変処理の立場からではなく、ノルマルの状態として、資本主義体制は終焉を告げねばならないものであり、統制経済の体制の黎明の鐘が響き渡つてゐると叫ぶ声が支配的になつて來てゐる。思へばわづかに十年足らずの昔マルキシズムの死命を制したものがリベラリズム——決して無制限な、アナーシズム的なりベラリズムではなかつた筈である——であつたのに較べて、何と云ふ蒼桑そうそうの変であらう。そして往年のマルキストは統制経済主義者となつた。また或リベラリストも統制経済主義者となつた。

「資本主義体制論者」である手塚は、「統制主義者」によつて自身も「今や講壇から追放されねばならぬ運命をもつてゐるのではあらうか」とさえいう。少し前の『緑丘』創刊一五周年記念号（第二四号、三九年六月二五日）でも、「一部の統制経済論が謳歌するが如き、資本主義制度の全面的否定は我「緑丘新聞」の採る所のものではない。それは過去に於て我紙がマルキシズムの受容を拒否したのと、其軌を一にする」と述べていた。

一〇年以上にわたって『緑丘』編纂の責任者であった手塚は、小樽高商報国団の発足にともない、その役割を交代するにあたり、最後に「科学の振興」を寄稿する（第一四四号、四二年二月二五日）。そこにも「昨今は、資本主義体制を擁護でもしようなら、生命さへ危い世の中である。それにしても、もし一貫した経済組織の体制論があつてもよいやうな気がする」という箇所がある。この論説は「科学の振興は科学の創造的所産の振興に他ならない」ということにポイントがあり、裏返せば統制ばやりの社会や学界の動向への痛撃が込められている。ところが、その後の『緑丘』紙上には、「最早前時代的、いはば残骸と化しつつある、自由資本主義的経済体制」（横田弘之「所謂「空聞」概念の経済地理学的考察（上）」、第一四六号、四二年四月二五日）というような立場からの論説が主流となっていく。おそらく、手塚は自らの居場所が小樽高商にも、日本にもなくななりつつあることを実感していったと思われる。そのことは、四二年八月八日、緑丘会小樽支部での送別会席上での謝辞のなかで、はっきりと表明された（第一六二号、四二年八月二五日）。

静かに自己省察を用ふれば、既に發揮すべき余力を残さぬ自分であることを知らしめられるのみである。殊に僕が堅持し、その研究の根本をなす純粹経済学は最早存在しない時代となつた。強いて自己の道を求め、立場を得んとせば、夫は外地である。而もその様相が刻々変化しつゝ、ある日本人を対照とするのでなく、支那人であると思料する。東亜同文書院は従来日本人のみであつたが、新国民政府に移管されてから支那学生をも收容する事にならう。此処に新天地を求める事は、自己を生かし、邦家にも微力を致す所以と考へたからである。

学生に向けた送別会での席上で「自分の経済学はもはや古い、むこうの学生を教えるにふさわしい」などと話したことを、長谷部亮一は記憶している（「垣間見」、「手塚先生の追憶」）。

「外地」を「新天地」とみなすことになる遠因には、「満州国」を含めた中国への関心があつたと推測される。手

塚は、一九三七年六月、大連で開催された図書館大会に出席する際に、「満州国、関東州の関税制度調査」(第一〇〇号、三七年六月一九日)を試みていた。もう一つの手塚のテーマである国際貿易政策という観点から導かれたもので、論文として公表されることはなかったが、『緑丘』紙上にはいくつかの論説を寄稿している。

「東亜の経済的基礎」(第一三三号、四〇年二月二五日)の結論は、「我国が満州又は支那迄もアウトタルキーを行ふ上からは、日滿関税同盟が絶対的に必要となる」というものであった。手塚の論が「満州国」の存在を肯定し、中国関内に日本の支配がおよぶことを当然視していたことは、先の「満州国」視察後の講演の一節——「満州国における一般資源、就中軍需資源の開発は期待された程でない。現状よりすれば、国防安全感確立の為には、北支こそ真の吾生命線である」(第一〇三号、三七年九月二五日)——に明らかである。

その後も手塚の「満州国」・中国への関心は持続している。四一年九月、対満事務局の募集する「満州に関する民族思想並に文化施設研究事業」に「日滿関税同盟ノ利害得失ニ関スル研究」という論文で応募し、研究補助金四〇〇円の交付を受けている。その際の「四年程前、満州視察旅行の途次、直観的に日本人がどしどし入れる高等専門学校設立の必要と、日滿関税同盟の必要性とを感じたのが動機となつて、それを実証的に理論的に研究して基礎づけようとした」(第一二二号、四一年九月二五日)という談話が注目される。「外地」での「高等専門学校設立の必要」という意図は早くから芽生えていたことになり、東亜同文書院大学からの誘いに心が動いたといえよう。

四四年二月、手塚の蔵書七一一三八冊は「手塚文庫」として小樽高商図書館に設置された。遺族の理解と小樽の実業家板谷宮吉(二代目)の寄贈になるもので、早川三代治らが尽力した。その早川は「手塚さんの研究論文や著書を読むと、該博、精密、真摯な仕事振りに心をうたれずにはゐられない。どんな短い研究論文でもその隅々にまでこの研究精神がにじみ出ている。私は学問にも広い学問、深い学問、高い学問といふものが考へられると思ふ。併し、広さ、深さがあつても必ずしも高い学問の境地に登り得るとは限らないが、手塚さんの研究の成果にはこの得

難い高さが備つてゐると思ふ」(『緑丘』第一八〇号、四四年二月五日)と、最大限の敬意を払っている。

実方正雄は、「手塚文庫」は手塚が留学中に「一冊一冊其の血と汗とに依つて蒐集し、購つたものである」ゆえに、「緑丘学園の学的生命の糧」になるという。また、中野清一も、文庫設置を「あの体系意欲の体現ともいふべき、原據執着の気魄が緑丘の一角に鎮まつたといふ事」と評する(同前)。

四四年三月には、「手塚寿郎教授追悼記念論集」として『総力戦経済の研究』が刊行された(『商学討究』第一八卷特輯)。手塚の遺稿(訳)「ワルラス価格決定理論の幾何学的説明」を掲げるとともに、校内からは高橋次郎・岡本理一・大野純一・室谷賢治郎・南亮三郎が執筆している。高田保馬・井藤半彌・中山伊知郎の寄稿は、手塚経済学への評価の高さを物語る。ただし、それらの多くは、手塚が対峙しようとした「統制経済学」ないし「日本経済学」だった。

学校教練の強化

一九四三(昭和一八)年六月一四日付の文部省への報告「学校教練ノ件」によれば、「支那事变勃発後は教練の教授力を充実し、術科の向上進歩に一段と拍車を加へ、夙に実施せるスキー教練を強化し、又近時は戦技及び指揮方に特別訓練を施し、其の成績大に見るべきものあり」という。とりわけ配属将校の嵯峨大佐は「在任長く、有能にして、熱誠、厳格にして温情溢れ、よく薫化の責任を全うす」と、吉野大尉は「稀に見る有能、練達、熱誠の人物」と高く評価されている。

それでも通常の授業内の軍事教練では、まだきびしく絞り上げられるという状況ではなかった。一九四二年四月入学の莊子直は「入学当初の小樽の学校教練は極めておだやかなものであった。草履ばきでゲートルをまいた学生もいた。教官は原中尉という同窓の先輩であり、休憩時間も数多くとり、「皆さん、煙草を喫つて下さい」という丁寧な教官の言葉が下りてくる」(『春とこしえの緑丘』)と回想する。八月の一年生の一泊野外演習後には、「飯盒炊飯の焚

火に楽しい頬を輝かせながら、祝津の野は暮れて露宮の夢路を辿つた」(『緑丘』第一六二号、四二年八月二五日)。もつとも、四月二二日、「爾今、警戒警報発令中登校ノ際ハ、必スゲートルヲ着用スベシ」(庶務係「通知綴」、一九四二年)という通達が発せられていたが。

しかし、四三年になると、きびしさを増していった。二月一六日には全校野外スキー教練がおこなわれ、東西両軍が天狗山北麓で対峙し、「果敢なる突撃」を繰りひろげた(同、第一六八号、四三年二月二五日)。六月からは「不時の空襲に備へよ!」として、常時ゲートル着用が義務づけられた(同、第一七二号、六月二五日)。七月一六日から四日間、一部の学生に「教練特別訓練」が実施された。文部省の指示を受けて、「戦闘間及陣中勤務に於ける中、小隊長の指揮法徹底及各個教練の教育に於ける助教、助手の動作を完全ならしめ、自ら一部の教育を担当し得る如く教育を施すもの」であった。八月二五日の第七師団による教練科査閲を前に、夏休み中の「軍人勅諭」の暗誦とその「主旨を日常生活に具現す」ることが配属将校から指示された(以上、同、第一七三号、七月二五日)。

その炎天下の査閲は、次のように実施された(同、第一七四号、八月二五日)。

緑丘八百の健児は武装に身を固め、戦時下皇国学徒の気魄をその眉宇に漲らせ、八時十分、歩武堂々の閲兵分列式により査閲の幕は切つて落された。本年度は全面的に行軍、銃剣術、射撃訓練に全重点が置かれた。九時半、第三学年は八咫ヤマトの負担量、一六キロメートルの行軍が開始された。この間第一学年の敬礼、射撃予行演習、戦闘各個教練、銃剣術及分隊戦闘教練を査閲し、次で第二学年の銃剣術、小隊教練及戦闘教練、陣中勤務、射撃訓練及銃剣術の査閲を受けた。午後からは一人の落後者もなく元氣旺盛に帰校した第三学年の中隊戦闘訓練を開始、次に銃剣術、射撃予行演習、突撃動作を査閲、引続いて簡単なる学術口頭試問が行はれ、これを以て査閲を全部終つた。

査閲官の講評は「良好」とされた。「昨年度より一段の進歩が見えた」とする一方で、「教練の日常化」という注文も付された。

四四年二月、文部省は学徒の「軍事教育強化要綱」を発表する。「指揮能力を向上せしむると共に、特別訓練の強化を図り、以て当面の戦争遂行能力の増強を期す」という方針で、具体的には「概ね毎週一回半日、若くは終日連続教練を課す」ほか、新たに「軍事学」五〇時間、「兵器学」三〇時間を課すなどであった。一年生の教練延べ時間は一九六時間、二年生と三年生（半年）は一・二時間と規定された（同、第一八二号、四四年三月五日）。これは、後述する経済専門学校への転換にもなつて改正されるカリキュラム上で実施されていく。

こうした強化される軍事教練や集団勤労働員に体力面で不安があるとされた学生たちには、集中的な「健民修練」の合宿（学生会館）をおこなつた。四三年七月一六日から二週間、約六〇名を対象にした、「日常生活ノ全般ニ亘リ、規律アル心身両面ノ健康生活ヲ実践味得スヘシ」というもので、午前と午後の「修練」時間には「国防競技場除草」「体操皮膚鍛錬」「柔剣道」「行軍」「水泳」などが連日実施されている（緑丘三十五年史稿）。

空襲に備えた防空訓練もおこなわれた。四二年八月には、全教職員と一年生・二年生を対象に、二四日から二八日まで集中的な訓練が実施される。たとえば、第一日目の「室内外待避訓練」では、「地形地物等掩護物ヲ利用シ、迅速ニ伏臥シ、目耳鼻ヲ手ヲ以テ塞クコト、室内ニアリテハ特ニ窓際ヲ避ケルコト」（庶務係「通知綴」、一九四二年）とされている。

「専門学校教育の刷新充実」案

一九四一（昭和一六）年四月から、官立高商すべてで「標準教授要綱」に即したカリキュラム改正が実施されて

いたが、その一律的な実施への批判や不満が出てきたのだろう、文部省では四三年五月、「時局下専門学校教育ノ刷新充実ヲ図ルハ緊急ノ要務」として、各校から「学科並ニ二科目ノ増設廃止及ヒ統合ニ関スル件」などについて意見を求めた。これに対して、苦米地校長は高等商業学校教育の「特異的性格」として、次のような見解を示している（庶務係「文部省往復綴」、一九四三年、以下同）。

皇国を中心とせる世界現勢を把握し、各国の歴史的性格の由つて来たれる政治経済及び思想並にそれらの動向に関する総合的知識及び洞察力の養成に努め、産業の経営能率を昂揚し、生産と消費との調和整理を図り、以て国力の増進、国民生活の安定に資し、進んで海外雄飛の基礎を確立し、興亜の大使命を達成して、皇運を扶翼し奉る高潔なる皇国民を養成する

「皇国民」の養成という戦時下の絶対的な要請を除けば、商業に関わる「総合的知識及び洞察力の養成」という性格づけは、現在でも通用する。こうした理念に立つて、現行の「標準教授要綱」の実施上の問題点をあげる。廃止すべき科目はなく、統合すべき科目として「日本産業論」と「興亜産業論」を一科目とし、「互に連繫一貫」させる。

この「標準教授要綱」にもとづくカリキュラム改正により削除されてしまっていた「哲学及び論理学」を、増設すべき科目とする。「心理学」の復活も希望するが、時間配当上、上記二科目を一科目に統合して一週二時間の実施をかける。「科学研究上」、論理学の重要性は「改めて絮説するを要せざるべし」として、哲学の必要性も力説する。第一に「学科目の性質上、兎角学徒の思行が物質対象に傾き易き嫌」ある高商においては、「正しき人生観、世界観を把握せしめ、皇国民としての批判力を強化し、国民的信念を醇化固成せしむるの必要」があること、第二に

年齢的に「哲学的思索の欲求に燃ゆる」学生の「哲学書乱読の風潮」を統制し、「懷疑思想を招来し、過る思想に感染する等の惧」を事前に防ぐために、「寧ろ正課として指導するの勝れる」という判断である。小樽高商の固有な学風を醸成するうえで不可欠であった「哲学」への志向や関心が学生間に希薄になってきていると、苦米地は憂慮したものと思われる。

これらを踏まえ、「標準教授要綱」にいくつかの修正を施して「理想的学科課程表案」も添付する。それは「共通学科目」と「特殊学科目」とに大別され、さらに「共通学科目」は、外国語や「哲学」などを含む「普通学科目」と「専門学科目」に分かれている。「特殊学科目」は「経営科」と「貿易科」の二分科（五科目ずつ）で、いずれかを選択する。戦後の新制大学における学科目の区分に近いものとなっている。いずれの学年も週三四時間という時数である。

もちろん、この「理想的学科課程表案」は集団勤労動員などで授業が中断・縮小される状況のなかで、実現されなかった。後述するように、さらに経済専門学校への転換によって、現行カリキュラムは圧縮されていく。

急遽作成された、机上の案ではあるが、文部省に提出した「専門学校教育刷新充実二閣スル件」には、苦米地校長の考え方がよくうかがわれる。まず「修練」に関して「学科の教授、生徒の自発的研究調査及びその発表、心身の練磨、勤労乃至食糧増産等による勤労精神の涵養、及び生活訓練を綜合連繫せしむるにあらざれば、その効果を期し難し」とする。教室にとどまらず、あらゆる場所・場面での日常的な「修練」が志向される。報国団・報国隊での活動にとどまらず、「全寮制度を速に具現し、友和信頼、往古の塾的教育を実施し、且つ生活全般を規正薫化する」という発想は、新たな第五寮の設置につながる。また、「集団又は個別に工場鉱山その他に於て、休暇を利用して勤労又は実習をなさしむること等は、学徒修練に必要欠くべからざるもの」という部分については、まもなく七月に一年生の集団勤労動員の実施を手始めに、大々的に実施されていく。

実現の可能性は皆無といつてよいが、苦米地は「興亜研究科」新設にも言及する。大学昇格運動に代わる研究科設置の期待も一九三六年を最後に途絶えていたが、ここで「大東亜共栄圏を建設し、之を完成せしめんとせば、商業経済部門を担当する人材を要すること、蓋し一般の想像を絶する多数に上るべく、各種新興産業の組織を樹立し、之を整備し、又原住民の指導に当り、その育成に完璧を期せんとせば、高等商業学校の教育を以て足れりとせず」という観点から、また実際に卒業生からも「南方要員に必要な短期再教育」の要望が多いとして、「興亜研究科」設置を「緊喫の要務」であり、時宜にかなっているとす。かつての貿易や拓殖、経営などの「研究科」構想とは異なる、便乗的な発想である。

施設面では、本格的な講堂の建設や貧弱な雨天体操場の改築を求めている。

臨時徴兵検査

一九四一（昭和一六）年一月五日から七日にかけて、繰上げ卒業にとまなう高学年（満二〇歳以上）の臨時徴兵検査が小樽市議事堂でおこなわれた。通常は本籍地での検査となるが、文部省・陸軍省の指示により、学校所在地での一括の実施となった。事前にレントゲン撮影などの事前検査をおこない、当日は呼吸器系を中心とする内科検査後、徴兵官より「体格等の宣告を受け、甲種及第一乙種と宣告されたる者は現役兵として間もなく入隊」となる。同時に幹部候補生志願の書類も提出された。

配属将校の嵯峨大佐の講評によれば、高商生の結果は「一般壮丁の徴兵検査に比し、決して遜色なく、寧ろ良好」であった。現役兵として即入営の甲種・第一乙種は全体の六〇％に達し、やはり入営が確定的な第二乙種も二三％おり、全体で八三％が校門を出ると入営となる道が決まったのである。第三乙種の大部分は「呼吸器疾患」であった（『緑丘』第一五四号、四一年二月二十五日）。一月二六日の卒業式に、苦米地校長は「諸君が戦陣ニ参ズルモ、産業ニ立

幹部候補生に採用されると、予備士官学校などで教育を受けたあと、一定期間の見習士官を経て、少尉に任官する制度で、通常は二年かかるが、戦時下には速成教育が必要となり、一五ヶ月に短縮されていた。嵯峨大佐は、その採用と甲種・乙種の区分は入隊前の準備勉強に左右されるとして、在学中の「軍人勅諭」・「歩兵操典」の暗記や「戦陣訓」の熟読などを必須としたうえで、「兵卒は軍旗の下に悦んで死ぬ気持は、即ち本校卒業生は緑丘学園の為に死命を賭して働くのと同じである」（『緑丘』第一七〇号、四三年四月二五日）と叱咤する。

学徒出陣

一九四三（昭和一八）年九月の全国の大学・高専の繰上げ卒業予定者に対し、パイロット不足を補うために、「海鷲」と呼ばれた海軍予備学生、および「陸鷲」と呼ばれた陸軍特別操縦見習士官の募集が大々的におこなわれた。小樽高商からも多くの学生が志願し、海軍の方へは全員合格、陸軍の方でも第一次試験を志願者の七割五分が通過した。それを『緑丘』第一七四号（四三年八月二五日）は、「今ぞ蹶起せん我等学徒 先輩に続け！ 決戦の大空へ！」と報じる。

志願者の約半数の合格者は、九月の卒業を前に入隊となった。この「海鷲」「陸鷲」のなかから、多くの戦没者が出た。四三年九月卒業の戦没者二八名のうち、一四名が航空隊関係という。壮行式で苦米地校長は、「諸君達に愈々御召が来た、今や何を置いても出陣すべき秋である。形式的な卒業試験も何らこれを受ける必要はない。これがために飛行錬成に一日でも遅れては、国家に対して申し訳ない」（『緑丘』第一七五号、四三年九月二五日）と述べて、送りだした。その記事中には「吾々学徒が続く限りは、断じて勝つ！ 勝たずば学もなし……の決意を沸かす緑丘学園」ともある。

そして、ついに一般学生を戦場に送り出す「学徒出陣」がはじまる。一九四三年九月二日、政府は「国内態勢

強化方策」を発表し、法文系学生の徴兵猶予の停止を決めた。一〇月二日の勅令「在学徴集延期臨時特例」により、満二〇歳に達した学生は本籍地に帰って臨時徴兵検査を受け、陸軍へは二月一日入営、海軍では二月一〇日入団となったのである。

すでに九月の繰上げ卒業で三年生はいなくなっていたため、いわゆる浪人などを経験して二〇歳に達していた二年生と一年生が対象となった。この学徒出陣について、『緑丘』第一七六号（四三年一〇月二五日）では「滅賊の気 丘に満つ 光栄のお召しに応へまつらん」などと報じるが、該当の人数については防諜のために伏されている。一・二年の在籍数は約五二〇名で、そのうち一〇〇名以上がこのときに戦場に赴いたと推測される。二年生では、各クラス四〇名ほどの約三分の一が該当した。それらの学生たちは、わずか一年半ないし半年で緑丘を下ることを余儀なくされたのである。

前掲『緑丘』の論説「出陣学徒を送る」では、次のように論じている。

学半なみかばにして征途につくとも、豊富なる体験を得て帰還すべく、それはまたと得難き人生の試練であると共に、社会に関する学問に於ては、却つてその認識に寄与する所甚だ大であると云はなければならぬ、諸君を送る学園の門は厳然として揺らぐことなく、憂国青年志士が肅然として帰還し来る時、その門も亦光輝を増して凱旋の門となるであらう。

征いけ学徒、祖国の血管は逞しく脈搏ちやくて。

ここでは「国なくして学も亦なし、君国に報すべき秋とせは今こそ来たのである」と報国・献身を強調しつつも、まだこの出征は死を当然視するものではなく、「凱旋」とはいえ緑丘への「帰還」が期待されている。それは、一年後

論 説

論 説

學徒決戦體制に巨歩

我等既に此の秋を期す
— 半千の精鋭起ち上る —

我等既に此の秋を期す、我等既に此の秋を期す。我々学生は、戦場へ出て行く。我々学生は、戦場へ出て行く。我々学生は、戦場へ出て行く。我々学生は、戦場へ出て行く。我々学生は、戦場へ出て行く。

我等既に此の秋を期す、我等既に此の秋を期す。我々学生は、戦場へ出て行く。我々学生は、戦場へ出て行く。我々学生は、戦場へ出て行く。我々学生は、戦場へ出て行く。我々学生は、戦場へ出て行く。

滅賊の氣丘に満つ

光榮のお召に應へまつらん
九日感涙の壯行式舉行

我等既に此の秋を期す、我等既に此の秋を期す。我々学生は、戦場へ出て行く。我々学生は、戦場へ出て行く。我々学生は、戦場へ出て行く。我々学生は、戦場へ出て行く。我々学生は、戦場へ出て行く。



九日感涙の壯行式、我々学生は、戦場へ出て行く。我々学生は、戦場へ出て行く。我々学生は、戦場へ出て行く。我々学生は、戦場へ出て行く。我々学生は、戦場へ出て行く。

海の日

實に優秀

我等既に此の秋を期す、我等既に此の秋を期す。我々学生は、戦場へ出て行く。我々学生は、戦場へ出て行く。我々学生は、戦場へ出て行く。我々学生は、戦場へ出て行く。我々学生は、戦場へ出て行く。

我等既に此の秋を期す、我等既に此の秋を期す。我々学生は、戦場へ出て行く。我々学生は、戦場へ出て行く。我々学生は、戦場へ出て行く。我々学生は、戦場へ出て行く。我々学生は、戦場へ出て行く。



「學徒決戦體制に巨歩」(「緑丘」176, 1943. 10. 25)

の特攻による「戦死」を報じた四四年二月二十五日の『緑丘』第一九〇号が、「緑丘學徒こそ明日の血戦場へと還らざる離陸をせねばならない」と記すような、出征＝死と直結する認識とは、まだ少し距離があるといつてよい。

勇壯な壮行の辞で送りだされたとはいえ、多くの学生の心情は「仕方のない事、国家存亡の危機に、戦場に行く事は当然の事と云いつ、思いつ、何か空しい思ひはどうする事も出来なかつた」(西澤春雄「積乱の雲」「春とこしえの緑が丘」所収)ではなかつたか。戦後数年が経過し、再軍備反対運動が高まるなか、ある寮の壁に書き残された「別離の言

「葉」が写し取られている（前山一郎「北国の学生」『緑丘』第三五号、一九五一年二月一五日）。

私は再びこの部屋に戻れるかどうか知らない。祖国の危機に私はペンを銃に替える。ミルの『原論』も半分しか読んでゐない。私はこの本を開いた儘にして征く。若し再び生きて戻つたら読み続ける為に。

戦争！ 戦争！ 戦争！ 愛国心？ 理解出来ないけれど納得できないけれど俺は征く。

学徒出陣の決定から本籍地での徴兵検査までわずかの時間しか残されていなかったため、寮や各運動部ではあわただしく壮行会をおこなった。北斗寮では「新聞室に於て出陣学徒最後の寮内レコードコンサート開催、ベエトーベンの『運命』、ベルリオーズの『幻想』に深夜聴き入り、音楽の夢幻境にさまよひ、運命に打ち勝つて進む出陣寮生を激励」、野球の対寮試合、そして一〇月一四日には壮行式をおこなっている。ラグビー部（闘球班と呼ばれた）では一〇日に最後の北大予科戦をおこない、接戦に勝ち、感激の凱歌をあげた。学校側では、一日の行幸記念式典のあとに壮行式を挙行したが、学生たちにその記憶はあまりないという。

本籍地で徴兵検査を受けると、たとえば藤井貞雄の場合は「十二月十日、横須賀第二兵団（のち武山海兵団）に入団、その後第一期海軍飛行専修予備生徒となり、零戦搭乗員として終戦を迎えた」。前田良章は「十八年十二月、舞鶴海兵団に入団。二ヶ月後久里浜の海軍対潜学校での予備学生隊に入隊。……十九年十二月任官、……佐世保市の相浦海兵団の分隊士兼少年兵の教官配置の海軍少尉で終戦」（以上、『春としえの緑が丘』）となった。

入隊や入団の前に、小樽高商では一〇月二二日、仮卒業証書授与式をおこない、小樽や近隣の学徒出陣組が参列した。すでに故郷に帰っている学生には仮卒業証書が郵送された。その後、翌四四年九月の正規の卒業時には、家族のもとに卒業証書が届けられた。



松橋忠光「答辭」(松橋『ある、とくべつな幹部警察官の戦後』)

一九四四春にも、卒業を待たずに、いわゆる陸軍・海軍の幹部候補生の募集に応じる学生がいた。五月二七日には、一五名が陸軍特別操縦見習士官として入隊した。そのほか陸軍特別甲種幹部候補生(経理)や海軍主計見習士官などの試験を受け、繰上げ卒業前に入隊する学生も少なくなかった。その場合は卒業が認定され、葉書大の「仮卒業証書」が送付された。

スキー部で活躍していた末岡達弥は宇都宮陸軍飛行学校に入校し、「学鷲」として訓練に励んでいた。「訓練の進むにつれ、スキーほど飛行と共通的条件に左右されるものはないと痛感してゐる」として、強健な体・敢闘精神・運動能力と感覚などの共通性を指摘する。これは「大空にッスキー精神」学鷲、神宮大会の猛者が語る体験」として、四四年一月二六日の『東京朝日新聞』に大きく掲載された。

一九四四年九月の繰上げ卒業式の松橋忠光の答辞には、「出づル門ハ直チニ戦場ヘノ門ナリ、生等今ヤ見敵必殺ノ銃剣ヲ引提ゲ、挺身誓ツテ醜敵ヲ粉碎セム、生別即死別ヲ兼ヌル此ノ訣別ノ日、想ヒ此所ニ至リテ感慨真ニ無量言フ所ヲ知ラズ」(松橋忠光・小林道雄『ある、とくべつな幹部警察官の戦後』所収)という一節があった。「先輩諸靈ノ列ニ連ナリ」という部分には、「校門から営門へ」のその先にある死の必然の自覚があった。「人生三五年」ならぬ「人生二〇年」が覚悟されていたのである。

一九四五年五月初めに文部省に提出した書類によれば、一年生の入学者は六名、二年生は四七名、三年生は一九四名であり、応召者も二年生で二名いた。二〇四名が陸海軍に、そして四二七名が校内にとどまっていたことになる。各学年は四クラス編成になっていた。

教師も八名が、職員も二名が応召中だった（庶務係「文部省往復録」、一九四五年度）。

入試志願者の減少

入試志願者数は一九四二（昭和一六）年に急減し、その後も減少傾向はつづいた（一九四三年入試で増加するが、それは高校の入試日が重ならなかったため）。受験倍率はかつての六倍強から三倍前後となった。入学者は例年二五〇名前後だが、四四年四月の入学者は、文部省の上級学校進学の制限により、それまでの三分の二弱の一五四名と激減している。

四二年の入試は三月一日から三日におこなわれた。第一日目は「英語」（英文和訳・和文英訳、午前九時～正午）、「国漢」（作文を含む、午後一時～三時半）、第二日目は「代数」（午前九時～一時）、「国史」（正午～午後一時半）、口頭試問（午後二時より）、第三日目が身体検査および口頭試問（午前九時より）だった。試験場の注意として「6、作成を終りたる答案は不用紙反古紙と区別し、何れも裏返しとなしたる上、画鋏にて机上に止め置くべし。7、答案作成を終りたる者は直ちに退場すべし。8、試験時間終了と同時に一齐に起立し退場すべし」（赤津俊樹「小樽高商の入学試験」『緑丘』（暮目版）第四六号、一九六五年一〇月）とある。終了時、受験生は着席し、監督者が答案を回収する現在の試験とやり方は異なっていた。

「君たちは六三一人の志望者から選ばれて入学を許可された二五六人の一人々々である。君たちが出来たわけでは決してない。落ちた人よりやや、点が上廻ったに過ぎない。むしろ英語については最低の年度だった」（赤津俊樹

「青春重ねて来たらず」「緑丘」(纂目版) 第三五号、一九四四年一月)とは、浜林生之助「浜さん」の第一声であった。

四三年三・四月の入学状況をみよう。

募集人員は「本科甲類Ⅱ約二二〇名」と「本科乙類Ⅱ若干名」であった(若干名といっても、実際には五〇名が合格している)。「乙類」は「東亜ニ活躍セントスル青年養成ノ目的ヲ以テ設置シタル特殊ナル課程」であり、「甲類」に準じた基礎科目のほかに、「支那語」と「東亜ノ事情ニ通ゼシムベキ若干ノ学科ヲ課ス」とされた。これまでと同様に、第一部(中学校など)と第二部(商業学校)、「試験検定」と「無試験検定」の区分があった。「無試験検定」の出願資格は、学業成績が「最後ノ三学年ヲ通ジ、其ノ学年ノ及第者全員ノ五分ノ一以上ノ席次」であり、さらに「最終学年第一、二学期」の「生徒全数ノ十分ノ一以上ノ席次」(以上、庶務係「通知綴」、一九四六年)ときびしくなっていた(何時からかは不明)。

試験は小樽のほかに、東京(大倉高等商業学校〔赤坂区〕)でも実施されている。志願者は九九八名、受験者は八三三名だった(庶務係「文部省往復綴」、一九四三年度)。

三月二四日の『小樽新聞』によれば、「受験生たちは全部ゲートルをつけ、頼もしい戦ふ日本の学徒の心構へを示してゐた」。四三年入試から、官立高商の問題は文部省が直接作成するようになり、たとえば、「国史」の問題は「民族制度の有する道徳的意義を記せ」など、「皇国の道義を内外に発揚せんとする戦ふ学究の特色が彩られてゐた」。六〇〇字の作文の課題は「戦い抜く力」だった(燦々会「夢うるわしの緑が丘よ 卒業四十周年記念」)。

入学検定料は五円で、授業料第一期分四〇〇円(年額八〇〇円)・「報国団費」一〇〇円・「学術研究助成金」一〇〇円(在学中に二〇〇円を納付)・教練費五円など入学時の納付金は八〇円におよぶ。また、自宅やそれに準じたところからの通学生を除き、「第一学年生ハ寄宿寮ニ入ルベキモノトス」とされ、その入寮の際には寮費八円(四か月分)と賄費前納金二七円が必要だった(燦々会の記録 卒業三十三周年記念)。「防毒面」(毒ガスマスク)や背囊はいのうの所持者は持参する

ことを指示された。

入学者は中学出身が一四九名、商業学校出身が一三名の合計二六二名である。満一八歳が約四割の一〇九名を占め、満二〇歳以上も二三名となっている。北海道出身者は六九％にのぼる。東京の一名、樺太の七名とつづく。四四年度の入試は、甲類・乙類の区分はなく、一括して本科約一五〇名の募集となった。試験場は小樽のほか、東京（大倉高商）と京都（京都烏丸商業学校）でも実施された。英語はすでに四三年入試から高校・大学予科では廃止されていたが、高商（経済専門学校）でも四四年入試からなくなった（数学が加わる）。入学後には英語の授業があったので、多くの学生は学力不足に泣いた。志願者は五六八名で、一六五名が合格した。

四五年度の入学者の状況は、志願者六七一名で、入学者は二三〇名（中学一二三名、商業一一七名）、満一八歳が一〇二名、満一七歳が八八名と年齢が下がっている（受験資格が中学・商業の第四学年修了者となったため）。また、戦争末期の交通事情なども大きく影響してだろう、北海道出身者は八二％に達している（以上「文部省往復綴」、四三年度・四五年度）。

一九四五年九月の「小樽経済専門学校概覧」によれば、同年四月現在、出身校別でみると、中学校出身者が三年生二〇一名中一一九名であるのに対して、二年生では一九九名中七九名、一年生では二六四名中一一一名となっており、二年生では商業学校出身者が上回り、一年生ではほぼ拮抗している。これは、商業学校出身者が二割前後であった小樽高商三〇年余の歴史のなかではじめてのことである。高校と同一の試験日という試験制度の変更が、この大きな変化をもたらした。なお、商業学校出身者の優位がどのような校風の変化につながったかは不明である。

この「概覧」からは、前述した北海道出身者の増大も読みとれる。その傾向はすでに一九三〇年代後半からみえていたが、四五年四月時点でみると、三年生は七五％、二年生は六五％、一年生は八二％を占めている。次にくるのは東京だが、全体ではわずか三・六％にとどまり、北海道勢が圧倒的多数を占めている。

一九四二年は、早くも三月三二日に入学式がおこなわれている。苦米地校長は訓示で、次のように緑丘の伝統を強調する（『緑丘』第一五八号、四二年四月二十五日）。

諸君は北は樺太より朝鮮に至るまで、全国多数の志願者の中から選ばれたのである。此の入学の喜びは諸君自身にとつては勿論であるが、国家の為、本校の為、慶賀すべきことである。而して本校に籍を置く以上、本校生徒としての矜持を持ち、義務を感じなければならない、吾学園の誇りとする所は卒業生と学園との関係が他校には全然見られぬ程緊密であり、一心同体を為してゐる点に認められるのであり、あなが 恰も一大家族かの觀を呈してゐるのである。又緑丘学園は代々同一の方針の下に、学校と学生とが美しい校風を形作つて来た事も美点であると共に、教授陣も全国高商中でも錚々たるものであり、吾学園の誇りとする点である。

四三年の入学式は、やや遅れて四月一〇日におこなわれている。学校から保証人に向けた入学式通知で、「学校と家庭とが緊密なる連絡を保つことは教育の効果を挙げるに極めて必要であります」として、父兄の参列を求めた（三八年から実施）。

その入学式での校長の訓示は、戦時色が色濃いものとなっている。「今年の新入生諸君は特に意義深き使命を有する」として、「国家総力を挙げて、生か死かの戦争を日々繰返してゐる今日、国家が学校を設けて、諸君を教育するのは、自己目的を全うする為に非ずして、国家目的に沿ふ様望んでゐるのである。世界各国に於て戦時下悠々と学びの窓に通ひ得るのは我が国のみである」（『緑丘』第一七〇号、四三年四月二十五日）と述べる。「宣誓書」への自署で正式の入学許可となり、「宣誓式後、御座所跡ニ於テ御親書ノ御勅語ヲ拝観」（燦々会の記録 卒業三十三周年記念）した。

報国団幹事七戸慎次は、『緑丘』第一七〇号掲載の「新入生諸君に寄す」で母校愛を呼びかける。「国家が国民の

愛国心によつて向上する如く、緑丘は諸君の熱烈なる愛校心によつて隆盛を見る」として、緑丘がそれに値する存在であるとす。 「北海の一角に地を占め、三十余年の歴史を有する小樽高商が、その地域的、時間的な事情の下に、自然に生じた個性こそ我々の誇り」として、それを受け継ぐだけでなく、さらに突き進むべきとする。 その方向とは何か。七戸は、次のように論をつづける。

今や我々の学生生活は大東亜戦争の真只中におかれてゐる、我々学生の生活が勝たんが為に、当然過去の生活と相違する事を認める、否相違しなければならぬ。時局は流れであると云ふ。我々は逆行すべきではない。併し、流されてはならない。我々は時局に盲従的になる事は、最もましむべきである。将来指導階級となり、皇軍の将校ともなるべき我々が、批判的精神を欠いて、何を為し得る人間となるか。正しき批判、それこそ進歩の発展の母体である。而してその後に来る実行こそ、若さに満ちた積極的なる行動と云ふべきである。自己の為すべき事を批判し、それに意義を見出して全力を以て進む所に、戦時下の皇国民として、学徒としての道があるのではあるまいか。

どこまでこの論者が自覚的であつたかは不明だが、「時局に盲従的になる事」を否定し、「批判的精神」を第一義とするこの論旨には、大きくは戦時下の教育への、また眼前の小樽高商における「国家目的に沿ふ」教育への、根源的な批判の芽が潜んでいる。

繰上げ卒業下の就職

一九四一（昭和一六）年九月、突如卒業期の繰上げが発表されたとき、三年生は就職活動に乗り出そうとしてい

た矢先だった。「黄金期」はつづいており、「九月に入り急激に求人申込が殺到し、その中には遠く仏印よりの申込もあり、既に四百三十余口に上つてゐる」（『緑丘』第一五一号、四二年九月二五日）という状況だった。学校側も学生も一二月までの短期間のために大わらわとなったが、ほとんどが卒業までに就職を決定した。一二月段階で、「商事貿易等に向ふ者が激減し、軍需産業に従事する者が著るしく増加して居り、大陸方面に向ふ人数が約四十名、昨年の四倍以上に達してゐる」（同、第一五三号、一月二二五日）。

なお、後述するように、三年生を中心として満二〇歳以上は臨時徴兵検査を受けて、八割以上が入営する。それでも、就職先を決めて短期間ながら勤務してからの出征となり、入社したばかりの会社に籍を残していた。

『緑丘』第一五七号（四二年三月二五日）の「昨年度を顧みて」では、「就職問題等も何か一時の仮寓^{すま}ひを求める気持ち^{きもち}が混つてゐることを否認ない」と認めつつ、「単なる眼前の就職問題に拘泥すべきでなく、目を高所に置くべきである」と述べる。平時にあつての就職とは異なり、戦時下の学生たちは学ぶ意味や国家・社会について、より真摯に考えねばならなかった。

四二年から卒業は九月となつたため、就職活動は六月から始まる。四二年六月二五日の『緑丘』第一六〇号は、アジア太平洋戦争の開戦以来、学生の関心は南方に向けられるようになったとして、就職の希望先として「貿易、海運の将来性の期待が強い」と報じている。一方、保険会社の希望は皆無という。これに対して、進路担当となつた松尾正路は、大会社一辺倒でなく地方の会社も研究すること、「工業会社に対する認識を深め」ることを求めている。実際の就職決定は、志望とは異なつたものとなつた。八月一五日現在の調査として、『緑丘』第一六二号（四二年八月二五日）は、次のように報じる。

金融	三十五名	十八会社	礦業 ^{こうぎょう}	十七名	十会社
----	------	------	---------------------	-----	-----

商事	二十六名	十一会社	貿易	十五名	五会社
拓殖	三名	二会社	土木	三名	二会社
工業	六十九名	四十九会社	運輸	十八名	九会社
生徒合計	百八十六名	会社数		百七会社	

以上の通り、工業会社が約四割を以て首位を占め、金融、商事の順で、貿易方面は一割に足らぬ。

此の傾向は明かに時局下、高等商業学校の使命が奈辺にあるか、又一般人は高商生は如何なる方面に望むかを明瞭に示すもので、工業会社の事務が現代の最大の道であることは、高商生の時局観に一変化の契機を与へるものとならう。

今後も此の傾向は一層強く現はれるものと見なければならぬが、其処に是が非でもの総進軍の反映がある。

このように卒業を前にほとんど就職先が決まったとはいえ、「もう半年だけ勉強したい。誰でもが真剣にさう思つた」。瀬谷稔は「十七年九月、我々は雪を見ずに、だが心冷く岡を降りた。校門前で残念ストームもやつた。その時はじめて「残念ならば又来んせ」の意味を知つたが、もう遅かつた」（同、第三七・八号、一九五二年四月一五日）と回想する。

四三年の就職状況も好調だった。六月二五日の『緑丘』第一七二号は、「就職戦堂々の陣 昨年度を凌ぐ申込み重点産業圧倒的」という記事を掲げる。「重点産業」とは、政府が鉄鋼・石炭・軽金属・造船・飛行機の五重点産業を指定し、戦力増強の非常措置をとつたもので、企業整備が断行された。採用申込の会社数は「依然工業関係（就中重工業）が百一二と圧倒的で、次に金融関係が四九、商事貿易三三、鉱業一七、運輸一四、土木通信一三、官庁一〇、海運九、拓殖農林八」で、「特に注目すべきは統制会、営団等の時局色の現はれたこと、大陸方面の会社が相

当の増加を見たこと」である。

この結果は、卒業を控えた八月上旬までにすべて決定という好成績だった。採用申込数は卒業生数の倍に達したため、「殆ど生徒の第一志望」（同、第一七四号、八月二五日）通りになったという。「大陸方面の会社」とは、華北交通や北支那製鉄などを指す。「満州」方面を含め、これらの中心は「語学乙類」の卒業生と推測される。

四三年一一月に文部省に報告した資料では、より詳細な分野別の状況がわかる。「金属工業、機械器具製造、造船、運搬用具製造業職員」が七四名でもっとも多く、ついで「其ノ他ノ商業的職業」三七名、「運輸」二七名、「金融・保険」二三名とつづく（「文部省往復綴」、四三年度版）。

四三年一〇月、法文系学生の徴兵猶予停止Ⅱ学徒出陣が決定されると、さらに「校門から管門へ」の道は直結した。四四年五月二五日の『緑丘』第一八三号は、「就職戦線頓に活発 重工業方面の申込圧倒的」という見出しで、新学期早々から三年生の就職活動が始まったと報じる。五月八日、苫米地校長は「就職に関する恩情ある講演」で、次のように述べている。

諸君の殆んど全員は、もうすぐ各方面に入隊し、やがては前線に向はねばならないのであるが、諸君が前線に於て落付いて全力を發揮し得る点から考へても、諸君の全員が就職されんことを望む。又就職をするにあたりては、その時代、時代の流行を追ふべきでなく、自分の才能と自分の身体を良く考へて、これに最も適してゐると思はれる方面に進出すべきである。……現在は重工業の方面が花形の觀を呈してゐるが、この方面に向ふものは、余程身体に自信のあるものでないと長続きしないから、この点を充分考慮すること、そして又一度就職が決定したならば、特別の理由なき限り、そこを變るべきでなく、ちつくり腰を落ちつけて頑張らねばならない。

すこしうがった見方をすれば、「花形」産業の重工業方面に「時代の流行」を追って学生たちが流れていくことに、苫米地はやや懸念をもっているようである。その方面に就職した卒業生が病気になるという事例があったためだろうか、あるいは商学を掲げる小樽高商にとって重工業方面の会社に多少の違和感をもっていたのだろうか。

そして、早くも六月二十五日の『緑丘』第一八四号は、「現在迄で略九割採用決定になり、例年乍ら他校を抜きんでた好成绩で就職も終りに近付いた」とする。七三社、一二四名（一名は自営）が列挙されている。

その後、『緑丘』紙上に就職関係の記事をみることはできない。

四五年六月七日付で、文部省から卒業者の就職に関する指示があった。「採用申込ノ学生生徒ノ発表ハ六月二十日以降ニ行フコト」、学生らへの推薦は七月一日以降とするという内容である（庶務係「例規通牒綴」、四五年年度）。この段階になって、実際に銀行や会社から採用申込の依頼があったのか、学校からの推薦などがあったのかを知る資料は見当たらないが、おそらく敗戦を控えて、就職に関する動きはごくわずかでしかなかったのではないか。三年生はすでに一四九名が入営しており、学校に残っていた五八名も大半は勤労働員となっていたはずで、就職活動は事実上無理だったと推測される。敗戦後は、戦時下の好調から一転して、極端な就職難となる。

第五寮（清明寮）の設置

前節の範囲だが、寮について振りかえっておく。小樽高商には四つの寮があった。北斗寮・正気寮・文行寮・玉の井寮で、それぞれ第一・第二・第三・第四寮とも呼ばれた。一九三〇年代後半、北海道外出身者が増えるにつれ、入寮者も増加した。一九三九（昭和一四）年四月の時点では、第一寮六〇名、第二寮八二名、第三寮四六名、第四寮四九名の総計二三七名を収容した。これは在学生のほぼ三分の一にあたる。新寮生は合わせて一六六名で、一年

生の約三分の二となる。自宅から通学できない学生は一年目を寮で過ごすことになっており、二年目以降、市内の下宿に移ることが多かった。一九四一年の寮生は全体で二一七名と、やや減少した（なお、下宿通学生は三二七名、汽車通学生は五六名、バス通学生二名となっていた）。

一九三七（昭和一二）年二月に北斗寮で刊行した『北辰会報』創刊号の「北斗寮の現況」によれば、建物は室数二八、食堂、舎監室、娯楽室、新聞室、卓球室から成り、このとき三年生六名、二年生四名、一年生三二名が共同生活を送っていた。そこでは「我等が北斗寮は他寮に比して建物古く、狭隘ではありますが、その点却つて寮生の親密とか統制とかいふ他寮には見られない北斗寮スピリットの所謂ごやかな家庭的情緒のある雰囲気を醸成するのに役立つてゐる」という。武道や野球など一二の部をもち、対寮試合こそ「三ヶ年の若人の感激の焰の源泉」の第一であった。北斗寮では、毎週一回の談話会のほか、スズラン狩・紅葉狩やニセコ旅行、寮祭などをおこなっている。また、北斗寮では、一九四〇年以降、『凌雪』という寮誌を刊行し、大半の寮生が研究や評論・詩歌などを載せている。

ある学生は、寮生活の意義を認めつつ、なぜ下宿に移ったのかを自問し、自答する。「寮だけの狭い世界から少しく広い實際生活の中に飛び込み、それだけ己の知識を拡大するを得るであらう」と。一方で、寮でなければ味わえなかった「魂と魂の触れ合ふ真剣な生活」〔阿部卓治「寮と下宿」『緑丘』第二二号、三八年五月二五日〕を懐かしく思い出す。一九四四年四月、文部省の戦時下の教学錬成の一環として高校や専門学校に懲慥されていた「皆寮制度ノ早期実施」に因應するかたちで、小樽高商では新たに第五寮を設置した。学校敷地のすぐ下で、丸井百貨店が寄宿舎として建設・使用していた木造三階建の建物を借り上げたものである。

四四年四月一日現在で、在校生六〇一名中、二九〇名を四つの寮に収容し、自宅通学者が一一三九名（市内・汽車通学）、下宿が一一三三名だった（残り三九名は入営・応召により休学中）。一年生の三分の二弱が寮生だったが、下

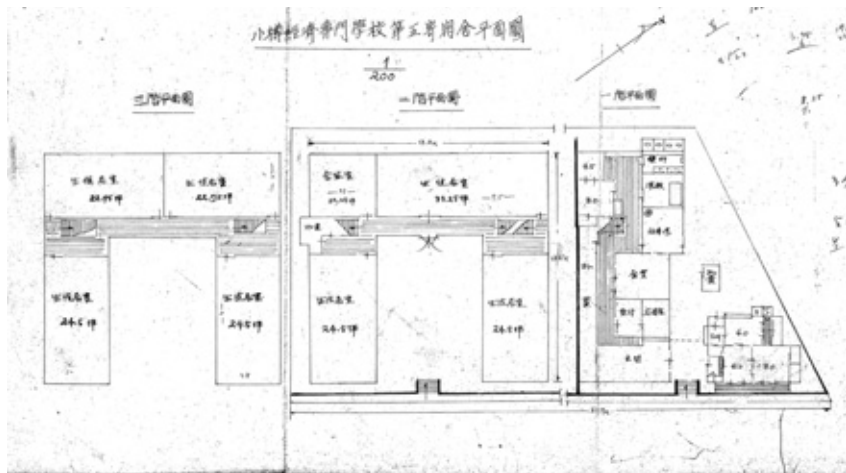
宿生も四五名いた。戦時下の食糧不足などが影響してか、二年生では一〇〇名が、三年生では八〇名が寮に入っており、二年生になると寮を出て下宿に移るといふ前述したような原則は崩れていた。第一寮（北斗寮）には六九名（二四室）、第二寮（正気寮）には一〇七名（三七室）、第三寮（文行寮）には五六名（一九室）、第四寮（玉の井寮）には五八名（二〇室）が入っていた。

すでに四三年中に丸井から寄宿舎を買収する計画があつたが、予算の都合がつかず断念していた。その後、丸井が「急速売却ノ必要」ありとして売却を急いだため、緑丘会が購入し、月額五〇〇円でそれを小樽高商が借り受けることとなつた。その「寄宿舎借入理由書」には、次のようにある（会計係「寄宿舎賃貸契約書案綴」）。

本校創立当時ノ当小樽市ノ特種事情ニ対処スベク、本校ハ夙ニ本校教育方針ノ一翼トシテ寄宿舎制度ノ採用ヲ画シ、爾来之レガ整備完成ニ鋭意邁進シ来リタルモ、未ダ十分ナル態勢ヲ見ルニ至ラザリキ、今ヤ大東亜聖戦下、学徒ハ国家ノ悠久発展ニ資スルハモトヨリ、国防及産業ノ各一環トシテ、緊迫セル国家要請ニ即応スベキ洵ニ重大ナル使命ヲ担フニ至レリ、此重大使命ノ急速的確ナル達成ヲ策スル為メ、本校亦全学徒ヲシテ寮生活ヲ通ジテ規律アル生活ノ下、協同精神ノ涵養等高度ノ精神的肉体的錬成ニ徹セシメントスルモノナリ

六室一〇〇名の収容計画で、「之レニ依リ寄宿舎ノ量的態勢ハ一応整備ヲ遂ゲ、時局下本校教育ノ効率期シテ俟ツベキモノアラン」とされた。実際には、第一寮から第四寮に入ったばかりの一年生二五名が移ってきた。翌四五年四月に新入生二五名が加わる。それまでの寮と異なるのは、居室が和室ではなく洋室で、ベッドが並べられたことである。本館に監督教官住宅が接続していた。

『緑丘』第一八〇号（四四年二月三日）は、「五寮生」として、「今回寮が増設されたことは、皇国教育の徹底化に



第五寮平面図

大きな前進をなすべき礎となるものと思はれる」と報じた。第五寮は「清明寮」と呼ばれることとなり、松尾正路が寮監となる。四四年入学の近藤尚夫の回想を引こう（『小樽地獄坂』）。

五寮は、地獄坂を佇立商業の裏から左手に入り、かなり急な坂道を登った右手に、海に臨んで建っていた。一二階建てだが、傾斜地を利用しているので、正面玄関の階段が高く、一見、三階建ての感があった。以前は丸井の寮だったと聞いた。この年、各寮に入寮した新入生の中から二十五名が選ばれ五寮に移ったので、上級生はいない。苦米地校長が来寮し、うやうやしく「清明寮」と命名した。（中略）

通学には裏口を利用していた。狭い急なジグザグの小路を登ると、図書館の横に出る。芝生の生えた校庭を横切って学生通用口に達する。何しろ寮の屋根は校庭のレベルに未だ少し届かなかった。恐らく裏口は二階だったのだろう。積雪期にいなかったのは幸이었다。

二十五名が四室に分かれたので、七人部屋が一つ出来た。床がフローリングで、畳一枚が入った木製寝台がずらっと並び、壁に向かって各自の机と椅子が用意されていた。夜は暗

い部屋だったが、みなよく机に向かつて勉強していた。そういう時は音を立てないように、そつと寝台に寝ころがっているより仕方がなかった。雑談など殆ど出来ない状態だった。

しかし、後述するように学生たちは集団勤労動員に駆りだされ、寮を留守にすることが多かった。五寮は一年生のみであったが、それ以外の寮は上級生もあり、「協同精神ノ涵養等」は自ずと実践されたものの、学校側の意図する「高度ノ精神的肉体的錬成ニ徹セシメン」は、それほど追及されることはなかった。戦局悪化のなかでストームは禁止されたが、寮の良き伝統はまだ残っていた。二寮では「たった一台のストープのある部屋に集まって、先輩が大西猪之介の「囚われたる経済学」を朗誦したり、中山伊知郎の「純粹経済学」を紹介したり、割り合いアカデミックな雰囲気（いかにも旧制高校風の慷慨を混えて）だった」（小笠原基生、同前）。また、「三寮での読書会は「デミアン」と「純粹経済学」が使われた」（伊藤佐一、同前）。そして、伊藤武の回想も興味深い（同前）。

その頃の内地、新潟での学生生活は軍事色濃く、教師にも生徒にも狭量、陰鬱な重圧感が押し寄せ、映画はダメ、饅頭屋に入るのもいけない、海兵、陸士、予科練への進路をとった者は颯爽としていたが、文系志望の者は肩身が狭かった。だが、小樽の学園はまったく違った異質の文化圏であった。

寮生活は、ひもじく寒い中ではあったが、長谷部さん、峯村さんから先輩学究者たちの存在。寮入口の黒板には数々の落書き。存在論、純粹経済学の理論。山田五十鈴出演の「鶴八鶴次郎」の映画評、クラシック音楽の鑑賞。二年生のグライダー演習。柔道対寮マッチ（惨敗）。そして学校の前の海の見える丘には清楚なカトリックシスター達の黙想。人情厚い小樽の町の人。

そして、錚々たるピカピカの個性的な友人達。スミス、リカード、マルサス、ケインズ、シュンペーター、

手塚寿郎、大西猪之介先生ら未知の世界の名前をいっぱい知らされた。書物の入手難と、学徒動員、兵役などの危機の予感の中で、「高商の良き伝統」が緊迫した生活の中に凝縮されていた。

敗戦直前、第三寮は工兵隊に接収された。一〇月には、進駐した連合軍によって講堂とともに第二寮と第三寮が接収される。

ここで、札幌からの汽車通学について述べておこう。四二年卒業の北野武雄によれば、「当時、札幌から小樽までの所要時間は、普通で約一時間、準急で四十分かかった。従って、朝六時十五分発の一番列車に乗らないと授業にまにあわない」（「一枚の写真から、緑丘三十期会「緑が丘——回想と軌跡と——」。ときには、「車中で衆議一決し、小樽に着くと直ぐ駅の売店の女の子に鞆をまとめて預けて、祝津に一日遊びにでかけたりました」（福吉俊夫「回想」、小樽高商昭和十六年後期卒業生会『金鱗』）こともあった。授業が終わって、「帰りは、小樽駅発午後四時五十五分発の準急に乗るのが、無上の楽しみであった。食堂車のアルコール販売は五時から。夏の暑い日（に限らないが）、食堂車でのビールの一杯は、未だに楽しく忘れ難い」（北野武雄）。四二年春には、銭函海岸の沖合を乳白色で埋めた鯨の最後の大群来くきに遭遇している。

「聖戦下の敢闘譜」

一九四〇（昭和一五）年一月、前節でみたように校友会各部と独立団体は「報国団」に再編成されていた。四三年四月の時点では、本部以下は次のような編成となっている（『緑丘』第一七〇号、四三年四月二五日）。

総務部 「総務関係、『緑丘』の編集・発行」

鍛錬部 剣道班、柔道班、野球班、庭球班、弓道班、スキー班、水泳班、蹴球班、相撲班、山岳班、作業班
 国防部 射撃班、防空国防競技班、海洋班、航空班、銃剣術班
 文化部 外国語班、研究班、文芸班、音楽班、趣味班、宗教班、講演班
 生活部 補導班、共済班

四月一六日の報国団本部主催の新入生向けの推進大会における鍛錬部の説明では、「体育の増進は国防能力の増進に如何に資するか」が強調された。また、ここでは「緑丘精神」について、「緑丘学徒の情熱……ズアインをザルレンに高めようとする飽くなき努力並に家族的であること」と説明された（同前）。

国防部の活動はいうまでもなく、鍛錬部のスポーツ競技も「国防能力の増進」に結びつけられた。主には北大予科との対抗戦だが、「聖戦下の敢闘譜」として「大東亜戦争下、負荷の大任を全うすべき青少年学徒の心身錬成の意義益々重大なる時」（『緑丘』第二五九号、四二年五月二五日）という具合である。もつとも、それはタテマエ的な呪文とでもいつてよく、各競技の白熱する勝負の面白さと「緑丘精神の昂揚」こそが原動力となった。

四二年の対北大予科戦の戦績は五種目中、剣道のみ勝利しただけで振るわなかった。庭球では「予科側が卑怯にも上手な者を先に出して、下手な者を後に出し、本来の規約違反を行つた」として「敵の策に陥る」と悔しがるも、その後奮起し、全国高専の東北予選を突破し、全国大会では準優勝に輝く（第一六二号、四二年八月二五日）。

スキー部の活躍も全国的である。唯一のジャンパー菅野駿一の活躍はめざましく、四一年二月の改修した大倉山ジャンプ台の試躍会ではみごとに優勝している（『東京朝日新聞』、四二年二月二日）。四二年一二月、小樽で開かれた全国学徒スキー大会の高専の部（九校参加）では八九点という圧倒的な得点で優勝している（第二位の米沢高工は二八点）。長距離競走、大回転、「斥候競争」、純飛躍（ジャンプ）のいずれでも上位を独占した（第一六七号、四三年一月二五日）。

国防部各班の参加した四二年一月の「体育振興会北海道地方支部結成記念錬武大会」では、全種目に優勝している。「時局急迫の折、平素の鍛錬を遺憾なく昂揚し、時局の要請に必ずべく」練習を重ねた結果で、「特別、軍当局より賞讃を博し、今後益々奨励の旨通知があつた」という。競技種目は「土囊^{どふさ}運搬競争」、「障碍通過競争」、「手榴弾投擲」、「突撃競争」の個人種目のほか、「柔剣道団体試合」と同個人があつた（第一六四号、四二年一〇月二五日）。翌四三年の大会では「総合戦技」の団体・個人の部で優勝する。

四三年五月二五日の『緑丘』第一七一号は「対予科野球戦戦解消！」と報じている。三月に決定された文部省「戦時学徒体育訓練実施要綱」により野球が禁止されることになったためである。「課外の体育訓練を徹底的に整備し、決戦体制下に順応した訓練種目を整備」する方針にそつて、テニスも禁止されることになり、両班は解散せざるをえなかった。前年秋の対戦が最後となった。剣道・柔道・競技（陸上）・水泳・ラグビー・スキー班は存続し、対予科戦などをおこなっている。『緑丘』紙上で確認しうる最後の対戦試合は、四四年二月の全道学徒戦技体錬大会であったが、「無念！ 制覇ならず」という結果だった。

文化部の活動は低調気味で、ほとんどが校内にとどまった。外語班は校内での弁論大会をおこなうが、かつてのような外国語劇の上演はもはやできなかった。しばらく中断していた音楽班は四二年秋に再建され、四三年六月には陸軍の転地療養所で「白衣勇士 慰問演奏」をおこなっている。「G線上のアリヤ」の独奏や「シューベルトのセレナーデ他」の独唱もあるが、最後は「海ゆかば」の全員合唱だった（『緑丘』第一七二号、四三年六月二五日）。

講演班は四四年二月、北海道商工経済会議事堂で「大東亜経済講演会」を開催している。学生の演題は、「大東亜経済の確立に関する一考察」、「大東亜広域圏の基礎理念」、「大東亜戦争と戦力大増強の一考察」であった。石河英夫と南亮三郎も講演している（第一八〇号、四四年二月二五日）。

編纂部による『緑丘』の発行には、直接特高警察の検閲がなされるようになった。編纂部員であつた大島晃は、

「昭和十九年頃は太平洋戦争の末期の頃で、特高の検閲が厳しく原稿の三割近くも伏字になり、新聞の形態をなさないこともあった」が、その「検閲といってもいい加減なところがあり、論文等の内容を十分に把握しないで適当に削除し、特高の権威を誇示している様に思われることもあった」という（小樽高商第三十二期『春とこしえの緑が丘』）。

おそらく、四四年春以降は、集団勤労働員・援農、出征・応召のために、報国団自体の活動も停止を余儀なくされたと思われる。

経済専門学校への転換

一九四三（昭和一八）年六月、「財政学」を担当する丸山泰男が二七歳の若さで赴任する。丸山の「小樽回想」によれば、「苫米地校長以下三十人ほどの先生方がおられたが、年令的にみて老、壮、青の三つの世代のバランスがよくとれていた。昭和十年代に小樽高商に就任された若い先生方が半分以上を占めていて、自由で若々しい活気があふれていた」（『燦々会の記録』）という。その小樽高商は、小樽高商として安住することはできなかった。

戦局がきびしさを増し、日本の劣勢が明らかになると、戦時教育はさらに国家統制の度合いを強めた。一九四三年一〇月の閣議決定「教育ニ関スル戦時非常措置方策」にもとづき、「皇国ノ道ニ則リテ高等ノ學術技芸ニ関スル教育ヲ施シ、国家有用ノ人物ヲ錬成スルヲ以テ目的トスル」（『公文類聚』、一九四三年、卷一〇三、国立公文書館所蔵）として、文部省は実業専門学校をすべて専門学校に統合した。そのなかで、高等商業学校は、工業専門学校・工業経営専門学校および経済専門学校に転換を余儀なくされた。

すでに四三年春ころから、高等商業学校の転換は企図されていた。その間における文部省の検討の経緯は不明であるが、九月卒業生の送別会の席上（九月一七日）、苫米地校長は「今春來伝へられてゐた「高等経済学校」の名称変更の問題と、其れに伴ふ学科目大改正の問題は殆んど決定し、小樽高商最後の卒業生を送る」（『緑丘』第一七五号、四

三年九月二十五日」と述べた。「予期してゐたこと、は云へ、一同烈しい衝撃を受け、卒業生在校生共に、現実の余りの苛烈なる姿を見せ付けられ、色々考へが目ま苦しくうつゝ」という。

一二月二三日、文部省は「教育に関する戦時非常措置方策に基く学校整備要領」を発表する。そのうち「高等商業学校の転換及刷新整備」では「一部は之を工業専門学校に転換し、その他は生産技術をも修得せる工業経営者を養成すべき工業経営専門学校（仮称）、又は従来の高等商業教育の内容を刷新したる経済専門学校（仮称）とす」とされた。「刷新」にとどまる経済専門学校、「工業経営者」養成を主とする工業経営専門学校、そして工業専門学校の三つの形態への転換の方針が確定したのである。

おそらく先の芥米地校長の講話にあるように、九月ころまでに小樽高商の場合は工業専門学校への急転換は回避されて、経済専門学校への「刷新」がほぼ固まっていたはずである。四四年一月二五日の『緑丘』第一七九号は、それを「大学高専校の整備案決定 学園の画期的刷新 文科系縮少さる」という見出しで報じることになる。戦時下における急転換にともなう混乱は最小限にとどめられた。

文部省では四四年一月二九日、官立高商校長を集め、高商の整備に関して「学校転換、生徒募集、教育内容刷新」について指示を出し、三一日、その内容を発表した。「経済専門学校」への転換は小樽のほか、山口、大分、福島、高松の五校である。「経済専門学校」の場合には「学科内容刷新、工場管理、工業概論、工業経営に関する学科目を新設、配給公益等の産業経営、職分を全うし得る人材養成に主眼を置かれてゐる」。募集人員は各校とも約一五〇名となり、小樽の場合では一〇〇名近くの減少となった。「工業経営専門学校」への転換は長崎、名古屋、横浜と東京商大専門部の四校、「工業専門学校」への転換は高岡、彦根、和歌山の三校となった。なお、工業専門学校と工業経営専門学校には、高商生の卒業までの措置として、それぞれ経済専門学校が併置された。

官制の定員でみると、小樽経済専門学校などは「人員縮減」で生徒主事一名が減員となる程度だったのに対して、

名古屋や長崎の工業経営専門学校などは「学校転換」として一〇名程度の人員減（その一方で一五名程度の増員）が予定された（実際には戦局末期で大幅な人員転換は実施されない）。

三大高商と呼ばれることのあった長崎と横浜が経済専門学校への転換とはならず、小樽がなぜ該当したのかは、はっきりとした理由はわからない。現行の各地の高等工業学校との地域的なバランス、それぞれの地域における工業系人材の需要度などからの判断もあつたかもしれないが、小樽高商で実施してきたカリキュラムが経済専門学校を求める学科目とかなり重なっていたことが、有利に働いたといえそうである。『緑丘』第一八〇号（四四年二月二五日）では、「本校の教育方針に則つた学科目と、今日の整備の最大眼目たる産業経営、工場管理の任に当る人材養成とそれに伴ふ新設の学科目の関係である。本校に於ける商業実践、工業実践、工業経営は特異な学科目である。理論、技術、意欲の三者を体得した本校卒業生の活躍や思ふべし」と述べている。

『緑丘』第一八〇号はこれを「学園の決戦態勢完了」として、次のように論じる。

要するに、将来生産力増強の一端を背ふ者として、国民経済的合理化（国民経済組織の合理化）と、工業経営合理化（一経営単位内の合理化、之れは経営比較等を必要とする）との大雑把に云つて二つの方向が与へられ、之れに即して学園に待機する学徒は、経済の生活理論、国民経済、流通経済理論並びに経営上の技術とを把握しなければならぬ。理論のない施策は有機的な国民経済の破壊へ導くもので、戦時に於いてこそ徹底的な理論が要求されることは充分強調されるべきであらう。

「工業経営合理化」の方面ではある程度の新領域の開拓が必要とされつつも、もう一方の「国民経済的合理化」の方向はこれまでの伝統と蓄積が再確認され、同時に「徹底的な理論化」追求が強調される。総じて、「経済専門学

校」への転換に動じる必要はなく、これまで以上に緑丘の教育と研究を發展させるべきという自信と自負を読みとることができる。

この転換は一九四四年四月に実施された。四月五日の経専最初の始業式で、苫米地校長は「本校の教育方針は産業を通じて国へ奉仕する人材を養成するものであるが、時に重点は推移し、現在に於ては、国家防衛、仇敵撃滅にその教育方針の重点を置くのである。国家破れては産業のない事を知るべきである」〔緑丘 第一八二号、四四年四月二五〕と述べた。経済専門学校への転換の度合いが緩やかだったこともあってか、苫米地の論点は「国家防衛、仇敵撃滅」に重きを置くべきだとする。それ以上に、戦局の窮迫化はもはや正常な学校教育そのものを破壊しつつあった。しかし、これは在校生にとっては不評だったようである。高商に入学しながら、卒業時には経専となった四四年の卒業生の受けとめかたは、「学年最後の年に学校名が変わったのはショックであった。「オレは、小樽コーショールにあこがれて来たんだ」と力んではみたものの、虚しいものであった」(猪俣次郎)、「私達が懂れて入学した学校は飽くまでも小樽高等商業学校であった。経済専門学校というと、国策の臭がふんぶんとしており、イメージが学校教練にしばられた学生の姿につながってゆく」(莊子直、以上、小樽高商第三期『春とこしえの緑が丘』)というものであった。

経専における授業

小樽経済専門学校としての最初の入試は三月一七日から一九日まで、小樽本校のほか、東京と京都で実施された。五六八名が志願し、一六五名が合格したが、交通事情などもあってか、入学者は一五四名だった。四クラス編成となり、Aクラスが中学出身、BとCクラスが商業出身、Fクラスが「語学乙類」で中学・商業出身は半数ずつだった。

新学期直後の四月七日には小路口中尉「航空二関スル講話」、八日には小樽憲兵隊長「防諜二関スル講話」(庶務係

小樽経済専門学校規程		
第一節 本校ノ専門課程	第一條 本校ノ専門課程ニ依リテ経済ニ関スル高等ノ教育ヲ施シ、国家有用ノ人物ヲ鍊成スルヲ以テ目的トス」とされた。学科は「経済科」となった。「国家有用ノ人物」の鍊成を掲げることと照応して、第五条で「授業ハ教授及修練トス」と規定された。「陸軍若ハ海軍ノ現役ニ服シ、又ハ召集ニ応ズル者ハ、其ノ服役又ハ召集期間中休学トス」という規定もあった。	
第二節 本校ノ修業年限	第二條 本校ノ修業年限ハ五年トス	
第三節 本校ノ学科	第三條 本校ノ学科ハ経済科ニシテ、第一條ノ規定ニ依リテ、第一學期、第二學期、第三學期、第四學期、第五學期ニ分テ、各學期ニ於テ、各学科ノ授業ヲ行フベシトス	
第四節 本校ノ教授員	第四條 本校ノ教授員ハ、各学科ノ教授員ニシテ、各学科ノ教授員ノ職務ヲ行フベシトス	
第五節 本校ノ学生	第五條 本校ノ学生ハ、各学科ノ学生ニシテ、各学科ノ学生ノ職務ヲ行フベシトス	
第六節 本校ノ校務	第六條 本校ノ校務ハ、校長ノ指揮ニ依リテ、各職員ノ職務ヲ行フベシトス	
第七節 本校ノ校舎	第七條 本校ノ校舎ハ、校長ノ指揮ニ依リテ、各職員ノ職務ヲ行フベシトス	
第八節 本校ノ校費	第八條 本校ノ校費ハ、校長ノ指揮ニ依リテ、各職員ノ職務ヲ行フベシトス	
第九節 本校ノ校則	第九條 本校ノ校則ハ、校長ノ指揮ニ依リテ、各職員ノ職務ヲ行フベシトス	
第十節 本校ノ校章	第十條 本校ノ校章ハ、校長ノ指揮ニ依リテ、各職員ノ職務ヲ行フベシトス	
第十一節 本校ノ校歌	第十一條 本校ノ校歌ハ、校長ノ指揮ニ依リテ、各職員ノ職務ヲ行フベシトス	
第十二節 本校ノ校史	第十二條 本校ノ校史ハ、校長ノ指揮ニ依リテ、各職員ノ職務ヲ行フベシトス	
第十三節 本校ノ校訓	第十三條 本校ノ校訓ハ、校長ノ指揮ニ依リテ、各職員ノ職務ヲ行フベシトス	
第十四節 本校ノ校譽	第十四條 本校ノ校譽ハ、校長ノ指揮ニ依リテ、各職員ノ職務ヲ行フベシトス	
第十五節 本校ノ校譽	第十五條 本校ノ校譽ハ、校長ノ指揮ニ依リテ、各職員ノ職務ヲ行フベシトス	
第十六節 本校ノ校譽	第十六條 本校ノ校譽ハ、校長ノ指揮ニ依リテ、各職員ノ職務ヲ行フベシトス	
第十七節 本校ノ校譽	第十七條 本校ノ校譽ハ、校長ノ指揮ニ依リテ、各職員ノ職務ヲ行フベシトス	
第十八節 本校ノ校譽	第十八條 本校ノ校譽ハ、校長ノ指揮ニ依リテ、各職員ノ職務ヲ行フベシトス	
第十九節 本校ノ校譽	第十九條 本校ノ校譽ハ、校長ノ指揮ニ依リテ、各職員ノ職務ヲ行フベシトス	
第二十節 本校ノ校譽	第二十條 本校ノ校譽ハ、校長ノ指揮ニ依リテ、各職員ノ職務ヲ行フベシトス	

学科目表 (1944年9月)

「通知綴、一九四四年」が、大講堂で全学年を対象におこなわれている。

九月一日になって、文部省省令「官立高等経済専門学校規程」(四月五日)に準じて、「小樽経済専門学校規則」が制定された。その第一条は「本校ハ専門学校令ニ依リ、皇国ノ道ニ則リテ経済ニ関スル高等ノ教育ヲ施シ、国家有用ノ人物ヲ鍊成スルヲ以テ目的トス」とされた。学科は「経済科」となった。「国家有用ノ人物」の鍊成を掲げることと照応して、第五条で「授業ハ教授及修練トス」と規定された。「陸軍若ハ海軍ノ現役ニ服シ、又ハ召集ニ応ズル者ハ、其ノ服役又ハ召集期間中休学トス」という規定もあった。

そして、第六条で、学科目と時数が次のように規定された。これには「特別ノ必要アルトキハ、各学科目ノ全学年ヲ通ズル総授業時数ヲ減少セザル範囲内ニ於テ、学科目ノ各学年ニ於ケル授業時数ヲ変更シ、又ハ授業時間外、其ノ他ニ於テ臨時講義、若ハ実験実習、又ハ教練ヲ課スコトアルベシ」という但し書きが付されている。「教練」がさらに重視された。

緩やかな転換といっても「工場管理、工業概論、工業経営に

関する学科目」の新設が必要だったため、これまでの学科目は整理統合された。専門科目は大きく「経済」「経営」「法律」に区分され、「経営」のなかに「工場経営」と「工業概論」がおかれる。「経済」のなかには、複数の科目を統合した「経済統制」

学年	科目	時間	備考
第一学年	国語	100	
	算数	100	
	理科	100	
	社会	100	
	音楽	100	
	美術	100	
	体育	100	
	英語	100	
	労働教育	100	
	特別教育	100	
	保健体育	100	
	家庭科	100	
	総合学習	100	
	職業教育	100	
	その他	100	
第二学年	国語	100	
算数	100		
理科	100		
社会	100		
音楽	100		
美術	100		
体育	100		
英語	100		
労働教育	100		
特別教育	100		
保健体育	100		
家庭科	100		
総合学習	100		
職業教育	100		
その他	100		
第三学年	国語	100	
算数	100		
理科	100		
社会	100		
音楽	100		
美術	100		
体育	100		
英語	100		
労働教育	100		
特別教育	100		
保健体育	100		
家庭科	100		
総合学習	100		
職業教育	100		
その他	100		
第四学年	国語	100	
算数	100		
理科	100		
社会	100		
音楽	100		
美術	100		
体育	100		
英語	100		
労働教育	100		
特別教育	100		
保健体育	100		
家庭科	100		
総合学習	100		
職業教育	100		
その他	100		

学科目表 (1944年9月)

と「東亜経済」がおかれる。「外国語」は英語・「支那語」とそれら以外の語学を含めて各学年六時間と減少している。これらの削減分を吸収したのが「教練」である。年間総時数では一年生が一九六時間、二年生と三年生が各二二二時間と、現行の「教練」の倍以上となる。ここには、前述の「軍事学」「兵器学」も盛り込まれていくのだろう。

二年生と三年生には「演習」の時間もあつた。丸山泰男は「私のゼミナルでの研究テーマの選定についても、何も財政学や経済学の範囲にかざる必要はなく、哲学でも文学でも恋愛論でも、何か自分が情熱をもつて打ちこめるような問題をとりあげるようにすすめた」と回想する。ドストエフスキーの「罪と罰」の思想について報告する学生もあつたという（「小樽回想」、燦々会『夢うるわしの緑が丘よ』）。

実際に実施された授業をみると、四四年四月に三年生になつた深井によれば、授業時間は四〇分の短縮授業になるとともに（放課後の勤労作業の強化のため）、「月曜は終日軍事教練、金曜日にも二時間追加され、軍事色が一段と強まってきた」（前掲『春とこしえの緑が丘』）。教練の時間は週一〇時間にもおよんだ。

しかし、この新学科課程も集団勤労働員が日常化するなかでズタズタにされていく。学校にいる期間よりも勤労

動員の期間の方が長くなるという事態が日常化するなかで、通常の授業形態の実施が困難となったため、二年半の在学期間を四期に分け、各期で「教育完結ヲ図ル」ことにした。たとえば第一期二〇週では、「各科目ノ大意。経專教育最低限度」という水準を設定し、「道義」「国語」「理数」「教練」「外国語」は普通課目とし、集中課目として「経済学」（皇国経済大意）二週、「簿記及会計」（商業簿記）一二週、「法律」（民法大意）三週などを配置し、全体として一週の授業時間数を四二時間とした（四〇分授業、午前五限、午後二限）。第二期は「各科目ノ総論、基礎的部分」を、第三期は「各科目ノ各論、輓近ノ理論」を目標とした（緑丘三十五年史稿）。しかし、この工夫も現実には通年化した勤労働員のために、ほとんど机上の計画に終わった。

勤労働員や援農の合間のわずかな時間に集中的な講義がおこなわれた。しばらくぶりで地獄坂を登って登校したある学生の姿が、次のように当時の日記に記されている（岩原秀夫「勤労と兵役の中の緑丘生活」『燦々会の記録』）。

ポプラの老樹も、古ぼけた校舎も、広角に拡がる小樽港の眺望もみな一様に眩しかった。教授達は水に戻された魚の様に生き生きと胸を張って講義を始めたが、私達の脳細胞は硬化して居るのか直ぐ飽きが来た。支那語の時間、私は代返を頼んで誰も居ない講堂に潜入し、ピアノの鍵に触れて見たが、指がすっかり駄目になっていたので直ぐ止した。

学生たちは学び、静かに思索する機会も環境も奪われた。いらだちを覚えつつも自暴自棄にもなれず、現実を自らにどう納得させるかに戸惑っている。そうした気分は、便所の落書きにもうかがえる。大西猪之介の「囚われたる経済学」をもじった抵抗である（同前）。

学生は囚われたり。此れを囚うるもの、名は時に軍教と称し、時にまた勤勞奉仕と謂う。その名は如何ともあれ、赫として燃え上るミリタリズムの焰が蒼白きインテリジェンスの色を焼き尽さんとするに同じなり。故に曰く、学生は囚われたり、と。

後述する群馬県中島飛行機製作所での勤勞動員から帰校すると、わずかの時間に貪るように授業に取組む学生もいる。一九四五年六月五日の「日記」には、「今日もまた第三合併教室で長尾教授の經濟理論の集中講義があった……。七時限の教練は一年生の射撃教育の指導をする……。一年生の教育それ自体が二年生の教育になるのであろう……」（関雅美）とある。「貨幣論」の長尾義三は、高岡高等商業学校が高岡工業専門学校に転換するのにもない、四年三月三十一日で小樽に転任となっていた。また、七月ころのこととして、次のような回想もある（以上、『小樽地獄坂』）。

陸別へ行く者を送った後、私たちは最後の学園生活となるかもしれない日々をそれぞれの入隊の日まで教科を絞り込んだカリキュラムでの集中講義を受けながら毎日を過ごしていた。この頃になると、最早何をし、何を学んでも、それがこれから先どんな役にたつものやら、殆ど考えられないことでしたが、そんな中で、私は何故かこのレクチャーは三年間の勉学の中で一番真剣に取り組み、又最も充実した期間であったように憶えています。或は、その頃まであまり勉強できなかった反動であったかもしれません。（辻内祐二）

これは、徴兵検査を受けて入隊を待つ五〇名ほどの学生に対する集中講義だったようで、次第に入隊して行くもので、一人、二人と減っていったという。

七月四日付で太黒マチルドの囑託継続について文部省に承認を求めた文書のなかに、次のような最小限の教育内

容に落ち込んだ状況が当局自身によって語られている（庶務課「秘文書綴」、一九四五年）。

本年度ハ全面的授業停止実施中ナルモ、防空要員、病弱者及勤勞切り換へ期等ニ在留スルモノアリ、殊ニ第三学年生ハ入隊者多ク待機中ニテ、未動員ノ儘少數残留者アリ、之等学徒ニ対シ授業、訓練等実施ノ要アリ、然ルニ在留期間ノ予定困難ナルニ加ヘ、出動教員ノ担任科目トノ関聯モアリ、更ニ又出動学徒ト残留者トノ授業均衡等アリ、一概ニ重要科目集中主義ニ依存スル能ハザル事情モアリ、是ニ国漢、数学、語学等ノ基礎科目補習実施ノ必要ナル場合惹起スルコト多シ。他方、応召教員数現ニ九名ニ上リ、而モ勤勞監督ノ為出動ノ教員モ亦最小限度常時四、五名ヲ要スル現状ナリ。コレスル補習方法ノ必要、殊ニ痛感セラル、所以ナリ。

経済学や商学などの「重要科目集中主義」は実施できず、その代替措置として「国漢、数学、語学等ノ基礎科目補習実施」を指しているものの、応召教員増加や「勤勞監督ノ為出動」もあり、それすら実施が難しいという現状の苦境ぶりが述べられている。ドイツ語では応召した馬屋原博の後任が「物色中」であり、フランス語では生徒主事・寮監などの兼務する松尾正路の激務さに加え、「緊迫セル情勢下同人ノ応召見込濃厚」という観測もあり、マチルドの契約継続が望まれていた。この囑託継続は認められるが、敗戦後の一月三〇日付で、ドイツ語のデンケルとともに解囑となる。

「皇国経済学」

一九四三（昭和一八）年二月、南亮三郎は「新たな民族人口理論への抱負」をもって、大陸への視察調査旅行に出かけた。のち、『緑丘』第一七六号（四三年一〇月五日）から「大陸人口行脚」を連載する。帰国後、この見聞を



南『人口原理の確立者 トーマス・ロバート・マルサス』

もとに三年生の選択科目「支那民族及社会」を担当する。

すでに南の関心は急速に「皇国経済学」に傾いていた。著書『人口原理の研究——人口学建設への一構想——』（四三年六月）の「序文」には、「構想に蹉跌を重ねつゝ、あつた」著者に「心の眼」を開かせたのは「十二月八日の宣戦の大詔」であつたといい、「戦争と共に書き進められ、そして戦争の中へ、戦ふ民族の中へ送られようとするのが本書」とある。また、同時に摺筆された『人口原理の確立者 トーマス・ロバート・マルサス』（刊行は四四年四月）の「序」には、マルサス研究に区切りをつけ、「大東亜共栄圏確立のための民族及び人口の基本的研究に、著者もまた参加しなければならぬ」と、新たな出発を期していた。

『緑丘』第一八七号（四四年九月三日）の座談会「経済科学の新動向」のなかでは、南は「国家一般ではなく、之を特殊的に限定して、我々の住まつてゐる皇国の立場から経済を構想すること」、つまり「皇国経済学」の確立を提起している。それは「新時代の要求に応へて出たもの」であり、今後は「何処迄発展するかを見守りたい」とも発言する。

司会者の丸山泰男（「財政学」）は「愛国的情熱は誰でももつてゐるのであるが、しかしそれは研究の背後にあるべきもので、むしろ直接に理論化しない方が良い。理論の中にとり入れようとすると固定した独断的なものになつてしまふと思ふ」と反論し、「性急に新しい理論を作り上げるよりも、むしろ一步沈潜し、そこから出直すと云ふことが必要」と提言する。これに対しても南は「その場合、単純に歴史的ではなく、「皇国」歴史的でなければならぬ。やはり歴史に於ても第一に日本の特色が追求されなければならないと思ふ」と展開する。このやりとりは強く丸山の印象に残つたらしく、

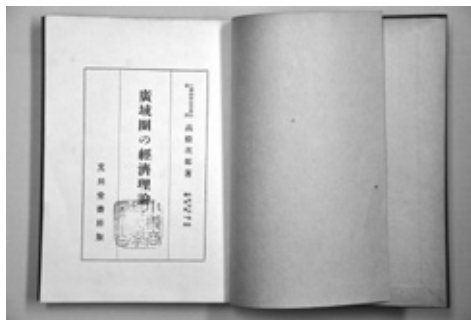
「後日、「南先生が意外にも当時一部の御用学者が唱えていた「皇道経済学」を熱烈に支持する旨のご意見を述べられた」（『燦々会の記録』）と回想している。

この急転換は担当する「商業経済論」の授業において披露され、その講義要旨が北方経済研究所の機関誌『北方経済研究』（『商学討究』改題）第一号（四四年九月）に掲載される。「第一節 皇国経済の本義」「第二節 戦争と経済」「第三節 皇国経済の基礎構造」「第四節 皇国経済の流通機構」という構成で、「皇国経済」については次のように位置づける。

吾々は、どこまでも吾々の経済を、吾々の祖国の経済として、すなわち世界に只一つしかない皇国経済として其の本質を捉へ、真に其の在るべき姿を理解することに努めなければならない。然るとき、吾々の目にうつるところの経済、吾々自身がその全運命を預託しながら現に営むところの経済、すなわち一言にして皇国経済は、まさに次の如きものとして姿をあらはすのである。皇国に於ける「経済は、物資に関する国家生活の内容をなすものであつて、物資はたゞに国民の生活を保つために必要なるのみならず、皇威を発揚するための不可欠なる条件をなすものである。従つて国の経済力の培養は、皇国発展の一つの重要な基礎である。」

そして、経済専門学校において「一層重要な科目」となった「理論経済学」において、「新たな精神」が打ち込まれねばならないとする。「その精神とは取りも直さず国家精神であり、皇国の精神である」。

経済専門学校への移行と同時に入学した学生たちは、こうした南経済学に驚倒する。「南教授の神がかり的皇国経済学の講義を聞いた時、独特の節回しの口調と、古事記から始まるまことに不思議な日本経済論には啞然とした」（石黒茂雄）、「……と共に生き、国を生きているのであります」、まさに当時の絶対国家主義の名論文であつたわけで、



高橋『広域圏の経済理論』

もうそこには、国家、社会、学問に対する懐疑主義などは一つもなく、すべてが国家に奉仕するものであるという主張だったと思われました」（神田和夫、小樽経済専門学校昭和二十二年卒業生『小樽地獄坂』（一九八九年）、と。神田はこれにつづけて「学生の間でも、このような絶対国家主義に危懼を感じ、三寮では寮生が理論経済学を新入生に教えておりました。お陰で、マーシャル、ジェボンズ、リカードとか、限界効用学説など、頭に残っております」と記している。それは一九四三年度まで、南自身が教えていたものだった。

苦米地校長以下大半の教官が国民服を着るなかで、最後まで「ダブルの背広に、ソフト帽を最後まで放さなかった」（伊藤佐一、『小樽地獄坂』）高橋次郎（『経済地理』・『経済政策』などを担当）も、先の座談会で「凡ゆる問題に於て皇国を中心とする研究は、現在国家の要請するところである。つまり日本経済学を建て欲しいと云ふこと」などと発言する。これに先立ち、四三年七月に刊行した『広域圏の経済理論』（大東亜共栄圏大系「第一巻」の「序」においては「吾々は、この重大なる転換期に際会して、旧来の個人主義的自由経済の理論に恋々とせず、敢然として総力を挙げて経済理論の信用回復のために邁進しなければならぬ責任を負はされて居る」として、次のように論じている。

凡そ生活上正しい経済政策は凡て、今日、国防と云ふ最高目標から演繹されなければならない。本書は、全篇、国防的観点を以つて一貫して居る。これを経済学的に換言すると、「統制資本」の理論の展開に終始して居るのである。今日、権力政策が民族共同防衛のための広域圏の目標として高く掲げられて居る。此の要請に基いて、一方に於ける統制経済と云ふ新体制

が国内的關係に於いてその国民經濟の構造變動を齎す。他方に於いて、此の統制經濟的基盤に立つ指導力豊かなる國家の指導の下に、それを補完するために對外關係に於いて広域經濟と云ふ新秩序が現はれる。これは、嘗つての自由主義的世界交易經濟や封鎖的國民經濟とは異なる所の、國際關係に於ける新なる構造變動以外の何ものでもないのである。

高橋は『北方經濟研究』第一号の卷頭論文「北方学の地政学的考察」でも、「卓越せる地政学的位置を占める日本は、正しい調査研究に基礎を置いて、南方圏と共に北方圏を建設し、それを綜合することによつて、克く大東亞共榮圏の指導的大國としての巨歩を世界歴史の上に運ぶ使命を有するものと云はざるを得ない」と論じていた。

『緑丘』に掲載される学生の研究にも、「地政学概念 日本地政学の樹立」(第一八一・一八二号、四四年三月二五日、四月二五日)や「物的戦力増強の爲に」(第一八二号)などがあらわれる。

時局便乗あるいは先取りというべき「皇國經濟学」や「地政学」とは一線を画しつつも、緑丘の經濟学・商學全般が國家の總力戦への学的協力・貢獻を求められたことは否めない事實である。前述した手塚寿郎の追悼記念論文集として刊行された四四年三月刊の『總力戦經濟の研究』がそれを裏づける。苫米地校長は「序」で、次のように述べる。

大東亞戰爭の決戦、激闘昼夜を分たず、その様相日に深刻苛烈を極め、戦果大に挙げると雖ども玉碎相次ぎ、凄愴なる相貌言語に絶す。國家隆替の岐路眼前に迫ると謂つべし。之に対応し、近時戦力増強の一点に國家の總力を結集し来り、その成果大に見るべきものありと雖ども、未だ作戦の要求を満たして余ありといふべからず。此の秋に当り、國家總力戦を經濟面の凡ゆる角度より嚴密に再検討し、或は遺漏を補填し、或は過誤を改

め、或は又隘路を打開し、急遽戦力の増強を図るは最緊急事に属し、今日経済学徒に課せられたる重要任務たり。これ此の度「総力戦経済の研究」を発刊する所以なり。

そこに掲載されるのは、高橋次郎「総力戦経済の運命曲線」や南亮三郎「民族、経済及び社会の発展と人口原理」のほか、岡本理一「戦力増強と証券取引所」、大野純一「戦争経済と経済循環」、室谷賢治郎「企業の整理とその財務」であった。

四四年四月に赴任した金融論の長尾義三は、戦後四八年七月に小樽を去るにあたって、「校内でも終戦前の一年は伝統の向学の風は衰へ、時局便乗の世調に捲込まれた。校門より営門、更に戦線への道は、学生心理に無限の動揺焦燥を生み、心ある学生は経済理論への沈潜によつて無用の不安を紛らすとか、又或者は哲学により立命の道を求めやうとした」(『丘を下る』『緑丘』第二〇七号、四八年九月三日)と述べる。

北方経済研究所の発足

一九三四(昭和九)年七月、日本経営学会関東部会小樽大会が開催されたのにつづき、四三年八月二七日から三日間、小樽高商を会場に日本統計学会の第一三回総会が開かれた。前述の日本経営学会大会もそうであったように、関東・関西以外では初めての地方開催となった。大原社会問題研究所長の高野岩三郎、神戸商業大学長丸谷喜市、北大名誉教授高岡熊雄、大内兵衛ら三〇名余りが出席した。実質的な責任者となったのは南亮三郎で、緑丘関係者の研究報告として南の「大陸労働力の若干問題」のほか、高橋次郎「統制下に於ける価格の動態」、宮沢光一「分布函数の誘導に就て」があり、また小樽在住の早川三代治の「我国に於ける戦時所得分布」があった。『緑丘』第一七五号(四三年九月二五日)は、この特集号とし、一二編の講演記録・研究報告の概要を収録する。

その第一七五号の見出しは「北方文化への啓発」であり、南の「学会を終へて語る」には「学都小樽の建設こそ必要」となっていた。晩さん会での丸谷や大内の小樽評に「示唆を受けた」として、商都として発展した小樽は今後「学都」への転換を図るべき、というもので、南はさらにそれと密接に関連する小樽高商の行く末についても提言する。

この学園を更に内容の上からも形の上からも拡充して、学都小樽の中心勢力となつて幾多の人材を養成して行くと共に、謂はゞ北方に於ける開発経営の中心地たらしめる原動力を、この学園を囲んで育成して行く必要があると思ひます。そういう形で小樽は新しい発展の方向を与へられるといふことが出来るのではないかと思ひます。謂はゞ大陸政策の根本的基地として起つて行く途^{みち}です。

小樽高商を「北方に於ける開発経営の中心地たらしめる原動力」とするという発想は、南にとどまらず、校内全般の気運となり、一九四四（昭和一九）年四月、それまでの経済研究所を北方経済研究所に転換させた。その意図について、後述する『北方経済研究』第一号の「改題の辞」で苫米地校長は、四一年一〇月、「北海道経済研究所」から「経済研究所」と改称されたとしうえで、次のように述べている。

然るに大東亜戦争に刺戟せられて世間の目が悉く南に向けられるに及んで、北方の経済は殆ど顧られなくなつて来た。是に於て、地域的分担からいふてもこれは我が学園が担当すべきであるといふ自覚が生れ出て、今春「北方」を従来の名称に冠することにした。（中略）

皇恩に光被せられたる吾等学究の徒、必死捨身、生還絶無の気魄を以て学道に突進、太平洋時代の性格を我が肇国の精神顕現のものたらしめ、忠霊の遺勲を万世不滅たらしめなければ我々の本分を尽せるものといへや



『北方経済研究』第一号広告（『緑丘』188, 1944. 10. 25）

うか。誓つて大東亜戦争を完成せん。吾等の新発足はその意に外ならない。

「研究所規定」第二条には「本研究所ハ、一方ニ於テ主題トシテハ時勢トノ関連ニ於テ各研究所員ノ行ヘル専門的研究ノ総合的成果ヲ目指スト共ニ、他方ニ於テ地域トシテハ北方經濟ノ調査研究等ヲ行フコトヲ以テ目的トス」（『緑丘』第一八二号、四四年四月二五日）とある。五月二五日の『緑丘』第一八三号は「北方經濟研究所の新発足に当りて」を掲載し、より具体的に「我々緑丘經濟学徒は、国策遂行に必要な諸問題の研究を行ふと共に、郷土北海道を基地として樺太、カムチャツカ、沿海州、アラスカに及ぶ所謂「北方圏」の經濟的研究を新たに本研究所の使命の中に算へ、北方共榮圏の鍵を握るわが小樽港に所在する所の「位置価値」を利用して、全所員を挙げて決戦に即応すべき各種の調査研究に精進することによつて、南方研究と相俟つて大東亜共榮圏の建設にいささかなりとも貢献せんとするものである」としていた。

南方を志向する大東亜共榮圏の展開により、北海道・小樽、そして小樽經濟専門学校の停滞や埋没を憂慮して、こうした「北方圏」經濟研究に比重を置くことになった。創立とともに、共同研究の主題として「航空機工業ヨリ見タル北海道産業」を決定する。これは、さらに「航空機生産から觀た北海道に於ける企業系列の問題」と「北海道に於ける航空機素材工業の調査」の二つの課題として追及される。前者では「最適經營の型、従つて又最適なる企業系列の型を導き出す」ことをめざし、後者では「製鉄及製鋼工業」「合金工業」「木材工業」などの項目につき、「原材料、労働力、労働時間、賃金」などを調査研究する計画である。こうした研究の中心となつたのは石河英夫

で、早くも『緑丘』第一八三号に「航空機工業の特質」という論説を寄せる。

所長は苦米地校長が、委員長は高橋次郎、委員に南亮三郎、室谷賢治郎、長尾義三、所員に木村重義、石河英夫、玉井武、丸山泰男、木曾栄作らが就いた。その後の活動をみると、中心は委員長の高橋で、石河・玉井・木曾らが補佐するという態勢である。

注目されるのは、北方経済研究所が北部軍管区司令部の委託を受けて調査をおこなっていることである。主任研究員であった丸山泰男は「昭和十九年から二十年にかけて、本土決戦にそなえ、北海道が本州と交通途絶して孤立した場合を想定して、北海道の産業経済力による自立計画の可能性を検討する極秘作業に従事した」（「小樽回想」と回想する。北方経済研究所の『庶務日誌』（一九四五年度、CBC所蔵）はこれを裏づける。たとえば、四月一四日の条には「北部軍管区調査部へ提出スベキ行政機構、経済機構ニ関スル答申書ニ関シ、委員長ヲ中心ニ慎重審議ヲ進ム」とあり（一五日も続行）、二三日には「高橋委員長ノ許もとへ北部軍管区調査部阿部少尉来訪、統制経済機構ノ調査ヲ依頼サル」とある。

研究所の発足にともない、機関誌『商学討究』と学校新聞『緑丘』を管轄下に置いた（『商学討究』は『北方経済研究』に改題、『緑丘』は第一八七号〔四四年九月二五日〕から「北方経済研究所報」が冠せられ、第一九一号からは『北方経済研究所報』となる）。

苦米地校長の苦悩

このような国策たる高等商業教育の変質と縮小を、苦米地は校長として推進する立場にあった。それゆえ、皇国民養成に適合する教育研究体制の整備に人一倍熱心に取り組んだ。一方、自らの専門分野をとおして培った合理主義的な考え方は、教育そのものの破壊を必然化する神がかり的な精神主義への反発と批判を生じさせた。

アジア太平洋戦争の開戦後、一九四二（昭和十七）年四月に「学生諸君！ 皇国の民たれ、最善最高なる皇国の民たれ」（『稽古照今』『緑丘』第一五八号）と叱咤し、卒業生に向かつて「我々は肇国の大精神八紘為宇を実現し、各国民族に各々その所を得しめ、恒久平和を樹立しなければやまぬ」（『卒業生に饒す』『緑丘』第一六二号、四二年八月二五日）、「諸君ハ皇軍ニ入りテハ幹部トシテ作戰ニ身命ヲ喜捨スベク、銃後ニ在リテハ大東亞建設ニ挺身スベシ」（『卒業式告辞』『緑丘』第一六三号、四二年九月二五日）と語るのには、苦米地の本心であることは疑いない。

しかし、先の「卒業生に饒す^{はなむけ}」のなかには「一知半解の日本精神を叫び、狭隘固陋に墮し、排他独学に流れ、闘争暴力に陥るが如き愚を敢てする弊風なきにしもあらず」という一節もあつた。そして、四三年八月の「決戦下の訣別」（『緑丘』第一七四号、四三年八月二五日）では「科学、技術も行的^{ぎよう}では発達し得ない。自然科学、社会科学、精神科学が平行しなければ健全なる国家は樹立されないと論じ、卒業生には「健康を維持増進し、知能を養ひ、軽率妄動せず、而も全力を邦家のために捧げ」よ、と呼びかけ、無意味な死を戒めている。これらは、苦米地の心中に「一知半解の日本精神」による「弊風」への批判が高まりつつあつたことを示そう。

三八年卒業の北村正一は苦米地が「米国と事を構える何物もない事、……この戦争は勝ち味がない事、戦争というものが如何に虚しいものであるか等を諄々と語られた」（『先生の印象』同前）ことを記している。また、四四年入学の岡林豊樹は苦米地の軍部批判を耳にしている。七月ころだろう、「吾々が勤労働員出発に際して、サイパン島後退の報道に接し、語を強うして軍部の所謂転身作戰を批判、現に戦の負けつ、ある事を率直に学生に訴へた」（同、第二二七・八号、一九五一年四月二五日）という。のちの学長伊藤森右衛門の回想によれば、根室を訪れた苦米地は、大野純一・伊藤ら高商出身の軍人を前に「口をきわめて東条内閣や木戸内大臣を攻撃され、このままでは敗戦になると断言」したという（『苦米地先生の「訓話」、『緑丘』（『纂目版』第四七・四八号）。これらの回想も、現状の戦争遂行体制への批判を苦米地が心中に抱いていたことを物語る。

一九四五年七月から八月にかけての苦米地の日記「戦塵余録」(緑丘(纂目版)第五一号(第六七号))にも、同様の批判が見える。「空軍なく、海軍なく、船舶なく、兵器もなく、それでそんな真似ができるの肚の底から思っているのか。徒らに強がりをやめよ。根底なき強がりには愚人を迷わせ、知人を怒らしめる。真実と理論に基いた指導が必要であり、且つ有効である」(七月三日)と、戦力の払底を無視して本土決戦を叫ぶ指導者や報道を鋭く突く。また、権力と権威を笠に着る軍部への批判はとくに手きびしい。たとえば、八月五日には「学校の並樹を惜気もなく無断で軍服が切つて居る」ことに対して、「軍服ならば何をして構わぬ占領地でもあるかの如き振舞、ここは皇土皇国民の住む所だぞ」と憤懣を漏らすのである。

大東亜共栄圏の建設に向けて皇国の隆盛を日本の理想とし、高商教育を通じてその実現に貢献しようとする苦米地にとって、非合理的な政府指導者や偏狭な精神主義はむしろ障害となりかねない唾棄すべきものとみなされた。苦米地を形容するとき、「国土」が用いられることがあるが、その憂国の立場からの批判であった。校長として戦時教育の舵取りをしなければならぬ苦米地にとって、戦局の悪化とともに苦悩の日々がつづいた。

そうした苦悩を内に秘めながらも、戦時下の苦米地校長の校内における権威は絶対的だった。「国土」的な専制姿勢は、かえって小樽高商・経専の方向を大きく誤らせなかったとはいえ、緑丘の教育研究体制を沈鬱なものとしたことは否めない。手塚寿郎の東亜同文書院大学への転出は、苦米地体制からの放逐といえた。南亮三郎らの反苦米地派との対立も深刻化した。

集団勤労働員・援農

すでに一九三八(昭和一三)年以降実施されていた集団勤労働員は、戦局の深刻化とともに、新たな段階に達する。四三年六月、政府の決定した「学徒戦時動員態勢確立要綱」にもとづき、小樽高商は北大・帯広高等獣医など



勤労働員（岩原秀夫「勤労と兵役の中の緑丘生活」『小樽商大緑丘会報』22, 1966. 6. 30）

とともに学校報国隊北海道地方部を編成した。その一翼として、小樽高商では七月、全校生を三班に分け、八雲・千歳・女満別の飛行場建設に動員した。一〇日ほどの期間で、女満別では「その間お寺の本堂に雑魚寝の生活で朝隊列を組み銃ならぬスコップ、つるはしを肩にし、作業現場への行進の毎日でした。朝夕は涼しくとも日中はかなり温度の高くなるなか、とにかく汗にまみれ一生懸命働いた」（西澤春雄「積乱の雲」という）。

千歳班のある学生の「日記」の一節を引こう（前掲岩原「勤労と兵役の中の緑丘生活」）。

皆明日どうなるか解らない事を知っていた。だから、何処にも学生の臭いを嗅ぐことが出来ないこの愚直な動きも勿論未だ墮落の域ではなく、誰もが一樣に今学生が置かれて居る立場を、どう自分に納得させるか戸惑い照れて居るのに違いなかった。一ヶ月以上続いている此の厚板敷滑走路建設作業にしても悲壮な義務感は無く、若し何時の世代でも、青春をぶっつける何かがなければならぬとすれば、勤労奉仕もその類型であり、戦争目的とか強制就労とかを深く考え過ぎず、どうせやらねばならぬものだとするれば、棒頭の様な将校や、土佐犬の様な下士官から見くびられない程度の奉仕をしてやらうと考えているだけだった。

今日の午前中、仕事をしている隙に隣の組のTと言う人が者が郷里から電報で呼び戻され、例の様にお道化^{どけ}た口調で皆

に挨拶をし、片頬に一寸淋しげな微笑を浮べ乍ら去って行った相である。再び彼に会う事もないだろう！
うせ世界中が戦場なのだ！ 明日赤紙が来れば私も同じ様なポーズを取るだろう。

一〇月になると、「援農」がはじまる。「食糧増産援軍として北海道の荒地改良に挺身する」ため、第一陣として日大、拓殖大、東京農大などの学生千名が乗り込んでくると軌を一にして、「現地でも北大、北海道師範、小樽高商の学徒も合流、総数三千名の勤労部隊が約一箇月にわたって聖諭を揮ふ」（『東京朝日新聞』、四三年一〇月二日）。小樽高商では学徒出陣組を送り出した直後、一〇日間三交代で、空知郡赤平村の「土地改良に勇躍出動」（『緑丘』第一七六号、四三年一〇月五日）となった。各農家に二人ずつ泊まり込み、農作業を手伝った。

一九四四年四月の「決戦非常措置に基く学徒動員実施要綱」により、勤労動員は通年動員へと極限まで拡大され、最初の「援農」は六月から九月にかけて、篠路・南幌向・音江・栗沢など全道各地におよんだ。天塩郡常盤村の「援農」を引率した丸山泰男は、分宿を巡回し、「一日の作業が終って、食事のすんだあと、うす暗いランプの下で、貧るように熱心に読書している学生」に接する。そして、「とも角も諸君は経済学をちよつとはかじった高商の学生なのである。こんな僻地でお百姓さんたちと起居をとにもする機会などはまたとないだろう。この機会を活用して、援農作業のかたわら、この地域の農家経済の実態をみんなで調査することも有意義ではなからうか」と呼びかけ、調査を実施している（前掲「小樽回想」）。

この調査結果は帰校後集計されて、『緑丘』第一八五号（四四年七月二五日）に「農村の実態調査」として報告される。作業は主に植付け後の除草作業で、「相当の成績」をあげたとしている。学生たちの感想は、「農民の勤勉純朴」「農家明朗親切」や「労力不足」の指摘が多いが、「総じて家族と融和し、極めて有益な生活を送った」という肯定的評価が多かったという。丸山は、こうした調査が「生徒をして農村の実態に対する関心及び認識を深からしめ、従つ

て援農作業への積極的自覚を与へるなど、その教育的意義に頗る大なるもののある」と評価している。授業が中断を繰り返さなまで、教員の苦悩も大きかった。

『緑丘』第一八九号（四四年一月二五日）は、この勤労働員に参加した学生と引率した教官の感想記を特集している。

勤労働は今や学徒に取つて、日常生活とも云ひ得べき程に、密接に、意味深いものとなつてゐる。もはや其れは行事ではない。勤労働を生活する間に斯る戦ひのさ中に硝煙の匂ひ身に迫るを感じつつ生きる生命の甲斐を、かみしめるのである（小笠原基生「勤労働と学生」）

我々が打下す鶴嘴は我荒鷲が翼の下から切つて放つた爆弾だ。脆くも飛散する敵陣、兵營、人馬、土、土、スコップは小銃だ、機銃だ、将棋倒しだ。ならされて行く。畚は運搬班だ。土の足らぬ所に運んで行く。全員一体となつて有機体に動く。時々体の痛さにはつと我に帰るが、又元に戻つて黙々仕事を続ける。教室とは變つた真剣そのものの修練風景である（佐藤一郎「作業地の一日」）

こうした感想とともに、被服や労働時間などに注文をつけたり、「受入側の学徒に対する認識」の不足を批判的に述べる文章もある。総じて学生たちは、勤労働員の意義を認めつつ、勉学できないことに焦慮し、わずかな自由時間にむさぼるように読書に努める。

九月の繰上げ卒業式の直後からは、全員で十勝の大樹村で、米軍の上陸に備えた重機関銃の陣地づくりにあたることになった。「大樹村での塹壕掘りは、援農作業とは比べられない危険な厳しい単純な肉体労働。朝作業場へ向かう途中、学徒動員の歌などを叫びながら気持をひきしめていた」（楠喜分「小樽地獄坂」）。ふたたび岩原「勤労働と兵役の

中の緑丘生活」所収の「日記」をみよう。

陣地構築は困難をきわめ、食事の悪さも手伝って疲労の色が濃くなった。……こんな動乱の中ではアカデミックな学究の徒であり、蒼白きインテリゲンチヤーである前に、兵隊に負けない位の強靱な肉体と神経を持たなければ流されて仕舞う。引率の教授も此処では学問を教えて呉れず、極限された時間を精一杯大切にすることだけを説いた。私達の合併教室は薄ら寒い小学校の屋体であり、娯楽室も寝室も兼ねている。不遇な環境の中で友情は芽生え易い。併し喧嘩は出来なかった。仲直りをしない内にどちらかに赤紙が来るかも知れない事を恐れたからだ。……ペンの代りにスコップを持ち、英語のリーディングの代りに軍歌を唄っている私達がその中から何を学び取り、学生の本質を失わない為のどんな努力をしたら良いのだろうか？ 朝晩がめっきり冷え込んで来た。お互いに出来るだけ自分をいたわろう！

一月初めに大樹から戻って、一二月二〇日ころまで、しばらくぶりの授業がおこなわれた。そして、一二月三〇日には一年生一四人が南・石河教授らに引率されて、群馬県小泉町の中島飛行機に向けて出発した。ここでは試作機「連山」などの部品づくりに従事し、五カ月を過ごした。『小樽地獄坂』では、この「中島飛行機・小泉製作所」にもっとも多くのページが割かれている。「行先は群馬県中島飛行機小泉製作所、ここで五カ月を過ごした。私は働くことには馴れていた。入学以来、篠津（江別市）、多度志村の援農、角田村の暗渠排水溝掘り、大樹村での山中壕掘りと、まるで転戦兵士さながらに、あちこちに動員されていた」（伊藤博）という体験は、大方の学生に共通していた。中島飛行機では、B 29の空襲も体験している。

小泉製作所では「銀河」か「零戦」の部品作りに従事したが、素人の身で満足な部品の作れるはずもなく、いたいこれらの部品を組み立てて十分戦える飛行機がで上がるものかなと思っていた。三月十日の東京空襲を境にして工場への艦載機による空襲も激しくなり、日中の場合は利根川あたりまで避難し却って仕事をしなくてもすむので一面喜んだりもしたが、夜中の波状攻撃の際には眠い眼を擦りながら寮から近くの竹藪まで待避しなければならぬしんどい思いをした……。 (熊谷和秀)

一九四五(昭和二〇)年六月に学校に戻り、しばらく集中講義や軍事教練を受けるほか、裏山の防空壕掘りなどの作業もあった。七月一日には、はじめて小樽にもグラマンによる港湾施設への攻撃があり、犠牲者も出た。この間にも入隊の通知が届き、学友は緑丘を去った。七月からは再び十勝の陸別での「援農」となった。

緑丘の戦没者

『緑丘』紙上にも戦死者の訃報が載る。なかでも一九四三(昭和一八)年七月二五日の第一七三号は、在校生平塚勇二の戦死を写真付きで報じる。平塚は釧路中学卒業後、二年間の銀行勤務を経て四二年四月に入学しており、徴兵猶予が短縮されて応召となっていた。「遠く南方で硝煙弾雨の中を奮戦し続けて来た」が、現地兵站病院で戦病死した。南方出征前に偶然同じ中隊にいた数学科の宮沢光一は「平塚君を思ふ」という甲文を寄せ、「あ、冥せよ平塚君。征くぞ、後からも後からも続々として君に続く事せう。学園もすっかり戦時態勢です。君の貴い死によつて緑丘の学徒達も、いよいよ米英撃滅の決意を新たに居ります」と述べる。平塚の遺骨が小樽駅を通過する際、「駅頭には各教授、生徒代表、第二寮代表等出迎へて哀悼の意を表した」(『緑丘』第一七四号、八月二五日)。

四三年五月、玉碎したアツツ島守備隊のなかに卒業生が四名含まれていた。『緑丘』第一七五号(九月二五日)は、

「怒濤天を衝き、白浪巖を嘔む孤島の彼方、二千数百の玉砕、耳朶搏せば、一億の民、肅然として声もなく、悲憤の涙如何にせん。北空に、放つ視線の後追へば、純真無雑な神霊はほのぼのとして昇天し、吾等の向ふ所を示したり」として、「緑丘会員の玉砕を吾等は永久に銘記せん」と決意を記す。

一月二三日、学校主催の「合同慰霊祭」がおこなわれた。『緑丘』第一七七号（二月五日）は「神鎮まりて丘に声なく、長き伝統は光栄に咽泣く」として、「同窓三十一柱の英姿」と略歴を掲げる。年長は一九二五年卒業の中山惣吉（アツツ島玉砕）で、年少は四一年後期卒業の林健一（軍属、南方赴任中に遭難）と四二年卒業の島矢卓郎（戦病死）である。苦米地校長は「祭文」のなかで、「学徒の出陣は決戦を勝利に導くや必せり。今緑丘学徒に不滅の此の魂を見る。之諸君が後昆に垂るべき遺績勳勞の賜物にあらずして何ぞや。聞くならく、人亡ぶと雖も英霊未だ滅びずと、諸君戦陣に斃れ、為に緑丘精神脈々として吾等の胸中に躍動するを覚ゆ。嗚呼諸君、畢に死せざるなり」と述べる。

先の「海鷲」や「陸鷲」の学生たちは、数カ月の飛行訓練を受けると、すぐに実戦配備となり、多くが特攻隊要員となつていった。緑丘関係者には少なくとも一〇名の特攻の犠牲者がいる。なかでも最初の特攻として、一九四〇年三月卒業の道場七郎少尉と四二年九月卒業の牧野顕吉少尉についてはよく知られている。『緑丘』第一九〇号（一九四四年二月五日）は、「燦たり緑丘精神 壯絶体当り敢行、レイテ湾に散る」として、二人の特攻死を報じた。緑丘会上海支部では道場少尉の志を継ぐとして、飛行機一機を献納するほか、慰霊祭をおこなっている。それを報じた『緑丘』は「神鷲を先頭にして教官、卒業生、在校生一体となつて勝利の日へ進む姿こそ、緑丘の伝統が發揮した頼母しさである」と述べる。

四四年一月二七日戦死となる道場少尉が、その二カ月あまり前に伯父宛に送った葉書が、本学に残されている。その一節には「全てが変りつつあります。一億火の玉となつて立ち上りつつある姿を頼母しく思ひます。私自身弾

〔写真提供機関別〕
緑丘中心写真
行楽写真
正色
真像
〔白黒〕
日五十二号一十号八中戦前

君 其 雄 故 君 吉 昌 原 守 故 君 昭 西 洋 米 故 君 昭 四 山 片 故 君 昭 三 晃 岡 本 故 君 昭 大 文 彦 故 君 吉 聖 山 中 故

君 昭 三 洋 校 故 君 悟 所 田 故 君 能 秀 村 田 故 君 吉 友 福 橋 故 君 貞 川 彰 故 君 敏 可 儀 君 故 君 昭 武 田 健 故

君 昭 正 福 喜 故 君 夫 武 田 多 故 君 一 高 井 藤 故 君 明 彦 坂 高 故 君 昭 野 村 中 故 君 昭 朝 崎 山 故 君 次 保 坂 手 故 君 昭 大 勇 井 田 故

君 昭 八 杉 高 故 君 一 健 林 故 君 昭 六 藤 住 故 君 昭 卓 矢 島 故 君 一 純 百 志 故 君 昭 之 野 内 竹 故 君 義 後 五 故

同窓三十一柱の英姿

神鎮まりて丘に聲なく
長き傳統は光榮に咽泣く

故 後 藤 克 巳 君

故 三 浦 寅 一 郎 君

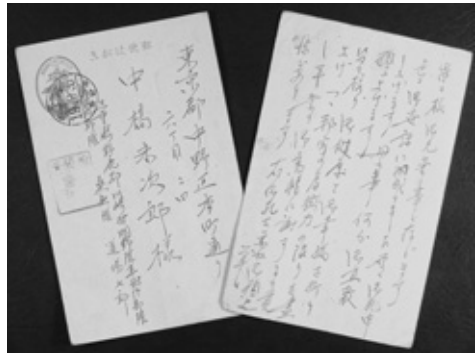
合同慰靈祭

〇 厳肅裡に執行 〇

御 遺 族 住 所

〔以下は祭りの詳細な報告と連絡先リストが記載されている。〕

『緑丘』177, 1943. 11. 25



道場七郎書簡

丸ともなりて敵にあたつて碎けたい気持で一杯です」「勝ちます、必ず勝ちます。祖国の悠久なる発展を祈り、九段に帰るの日を待つや切、後会期する処なし」とある。「九段に帰る」とは、「英霊」として靖国神社に祀られることである。四五年二月一二日、道場・牧野の慰霊祭が講堂でおこなわれた。緑丘会代表として飯川文三は、「祭文」で「神鷲コソ、実ニ日本精神ノ真髓ヲ顕現セラレタノデアリマシテ、後進学徒ニ国体護持ノ大精神ヲ扶植セラレタルハ、実ニ他校ニソノ比ヲ見ズ、母校ノ恩師、五千ノ同窓、五百ノ学徒ノ栄光ヲ、日月ノ光芒ニ比スルノ垂範ヲ、身ヲ以テ示サレタノデアリマス」(『苦米地英後先生記念号』)と述べた。また、それぞれ『遺稿集』も編まれた。

一九四三年一〇月に学徒出陣した持木恒二少尉も、四五年四月一二日に沖縄方面の海域で戦死している。「今の日本は一人の人間も丈夫で、そして各自の務ととめに遭遇し、始めて勝利が得られるのです」が、母宛の遺書であった(『春とこしえの緑が丘』所収)。おそらく一〇名程度が特攻での戦死となったと推測される。

こうした特攻の犠牲者を含め、緑丘関係の戦没者を慰霊する記念塔が一九七六(昭和四一)年に建てられた。そこには一九二一(大正一〇)年以降、四五年までの判明した戦没者三四七名の名前が刻まれている。学年別で最大の戦没者を出したのは、四〇名を数える四一年三月卒業組である。アジア太平洋戦争下の戦没者は、全体のほぼ半数にあたる。

このなかには二名の教員が含まれる。一九四一年七月に臨時召集となった法律学の梶浦彦臣は、敗戦後の八月二二日、フィリピンのルソン島でマラリアのために戦病死した。また、四四年六月に応召となっていたドイツ語の馬

屋原博は、四五年六月二〇日、沖縄で戦死している。

スミルニツキーの受難

N・A・ネフスキー（在籍一九一九年～二二年）の後任のロシア語教師となったのが、C・N・スミルニツキー（在籍一九二二年～四五年）である。スミルニツキーをめぐる逸話も数多い。ロシア革命で亡命した旧コサック将校であったこと、小樽でもっとも早く自動車を運転したことのほか、何よりも彼と切っても切れないものは、その異常ともいえる動物愛護癖である。しばしば新聞をにぎわすが、たとえば「猿の家の異人」として、その自宅を「ホルの左手が、栗鼠と金糸鳥と兎と猿の部屋、右手が書斎兼応接間、ここにはよろひ、冑、仏像、彫刻、浮世絵、版画等々が中央の大きなデスクを囲んで置かれてある。……この書斎の右手を奥にはいれば、そこには家鴨と鶏の二つの部屋がある」（『小樽新聞』一九三二年一月二日）などと紹介している。

彼は自宅にロシア皇帝ニコライ二世と昭和天皇の写真を掲げるなど、帝政主義者であったが、学校内外で政治的な言動をとることはなかった。それでも、戦時体制の深まりとともに、非合理的な国家主義や精神主義がまん延し、人間性を無視する風潮が跋扈する日本のありさまに、違和感を抱いていたらしいことは、次のことが物語る。多くの学生が緑丘から戦場に赴くが、ある学生の日章旗に教師・友人が「武運長久」「七世報国」などの勇ましい寄せ書きをするのに対して、ただ一人スミルニツキーだけは、小さく「エラクナツテゲンキデカエリナサイ 董日記」と記したのである。また、敗戦後の九月の繰上げ卒業式では、独特のアクセントで「皆さん、どうか幸福になって下さい」（『小樽地獄坂』）と呼びかけたという。これらの短い言葉は、戦争による狂気に日本中が惑わされているなかでも、



スミルニツキー

スミルニツキーの真つ当な精神が健在であったことを示している。

ところが、スミルニツキーは一九四四（昭和一九）年五月、「造言飛語並無線電信法違反（無許可外国放送聴取）」の容疑で小樽署に検挙されてしまう。彼の家に入出入りしていた小樽憲兵分駐所の元給仕の青年から、「恰も各種情報を蒐集せんとするが如き言辭を弄した」という容疑であるが、それは「果して情報蒐集の企図に基くものなりや否やは今後の取調に依らざれば判明せず」という曖昧なものであった。むしろ元給仕に述べたという「日本の札は鼻紙と同じだ、今に壁の張紙になつて仕舞ふだろう」「自分から進んで兵隊になんか行かぬようにせよ、そんなに死にたいか、飛行士なら尚更危い」（以上、内務省警保局『外事月報』一九四四年五月分）という率直な物言いが（それらは、戦場に向かう教え子に「エラクナツテゲンキデカエリナサイ」と諭す心情に照応している）、窮迫した戦時下の日本では治安を攪乱する「造言飛語」とみなされたのだろう。

八月五日、元給仕とともに、検事局に送致され（『外事月報』四四年八月分）、身柄は九日には釈放された。その後、一〇月四日に小樽区裁判所で、罰金二〇〇円の略式命令を受けた。言論出版集会結社等臨時取締法違反という罪名である。この罰金刑後も、学校側はスミルニツキーの授業を継続したようであるが、ちょうど四五年三月末が契約期間となり、おそらく文部省の指示によって契約を更新しなかった。それでも、四月一六日付で文部省に功績調書などを送って年金給与方の申請をおこなっており、苦米地校長はじめ、スミルニツキーへの信頼は厚かった。その長年の貢献を、「常ニ熱心職務ニ従事シ、多数生徒ノ指導啓発ニ努メ、本校語学教授上ニ尽シ、露語学習生徒ニシテ戦時下陸海軍ニ於テ特種任務ニ従事セル者多ク」（庶務係「秘文書綴」一九四五年）と賞賛している（なお、文部省は一九四六年三月になり、年金給与のための備入れ期間が規定に足りないため認められず、という通知をしてきた）。

戦後、一九四六（昭和二一）年六月から、再びスミルニツキーは小樽経済専門学校のロシア語教師として教壇に立った。四七年九月には、一二〇〇円の月給では「近頃の物価に対してあまりにも僅かで実際困つてゐます」とし



フランク先生のレリーフ

て、五〇〇〇円への増給を文部大臣に直訴している（一八〇〇円に増給となった。「秘文書綴」一九四七年）。新憲法の制定には批判的だったらしく、帝政主義への信奉は終生変わらなかった。一九四八年七月三十一日、脳溢血で倒れ、小樽が終焉の地となった。『緑丘』第二〇七号（四八年九月六日）は、「氏の書斎から学生の若々しい声と氏の笑声との聞えぬ日は無かつたとは、隣人の語る生活の一端である」と生前の面影をしのんでいる。

フランクの悲劇

現在、本学図書館三階の大学史料展示室には、小樽高商の「商品学」の生みの親ともいべきH・フランクのレリーフ像が飾られている。これは、小樽から移った山梨高等工業学校（現山梨大学工学部）での教え子たちが、フランク先生誕生一〇〇年を記念して製作し、ゆかりの小樽へ寄贈されたものである。山梨高工でも化学系の学科創設の基礎を築いたこの一外国人教師の誕生一〇〇年が記念碑の建立、記念式典の開催、記念誌の刊行などとして取り組まれたのは、その誠実でユーモアにあふれる人柄が多くくの卒業生に慕われたこととともに、フランクをめぐる

悲劇が、戦時の残酷さを改めて想起させるからである。すでに一九二六（大正一五）年に小樽を離れた外国人教師ではあるが、この悲劇を掘り起こした保延誠氏執筆の記念誌に依拠して、ここで取りあげる。

フランクは「私が見た日本の学生」（『文部時報』、一九三八年九月）で、小樽赴任後まもなくのことを、「最初の一、二年——この期間中色々当惑する様な事が頻発したので、授業は殆んど機械的に行つて居た」が、その後は「学生の心理状態を研究し、彼等の行動を理解せんものと大いに努力し」、「機械的な授業をせずに、授業に益々心を打ち込む様になつて居

た」と述べる。そうした授業ふりは、山梨でいよいよ洗練されたようで、謄写版プリントを使った「先生の講義には温情と熱意が強く感じられた。囁んで含める様にとでもいうか、丁寧丁寧に力をこめて話された講義」（内田太郎「回想のフランク先生」『山梨工業会々報』第六三号、一九八六年）だった。『山梨大学工学部四〇年史』には、かつての同僚教授によって「ハード・ワーキングで、学生によい影響を与えたことと思う。学校にいる間、専門の書物や雑誌をよむか、実験をしていて倦むところを知らなかった。時間が実に正確で、始業五分前には必ず授業予定の教室のドアの前には立っていた」などと回想されている。

ドイツでヒットラーが政権を握ると、「ヒットラーは、ならず者だ。ドイツを駄目にする」と、親しい教え子に断言していたフランクに、次第に監視の眼が光るようになった。とくに日独伊三国軍事同盟の締結後、ナチスによるフランクらユダヤ系ドイツ人教師に対する圧迫が強まった。駐日ドイツ大使館警察主任となったナチス親衛隊のマイジンガー大佐は、日本の警察・憲兵に働きかけ、反ナチスの言動を調査していた。フランク一家は、日本の官憲の尾行などのきびしい監視下に置かれた。

一九四二（昭和一七）年一月、ナチス・ドイツ政府は、フランク夫妻を含む在日ユダヤ系ドイツ人一一六人の国籍を剥奪した。この無国籍化を第一段に、マイジンガーは文部省・外務省に圧力をかけ、ユダヤ系ドイツ人教師の解任を迫った。学校側も苦渋したが、ついに一九四三年四月末日で再任をしないというかたちで、フランクは実質的に解任された。その後、二人の子供がそれぞれ一家を構える横浜に移るが、一九四四年五月、次男一家とともに軽井沢に「戦時収容」された。軽井沢の収容者のなかには、スタルヒン、ロイ・ジェームスらもいた。無国籍者ゆえに、食糧・燃料の配給はとどこおり、きびしい冬を過ごすざるをえなかった。

そのきびしさを倍加したのが、箱根に「戦時収容」されていた長男フーゴ・フランクのスパイ容疑での検挙と獄中死であった。一九四四年七月、やはりマイジンガーの「ユダヤ系あるいは反ナチスのドイツ人（二〇余名）排除

の策動」に使喚されて、横浜憲兵隊は横浜の防空施設や寄港艦船などに対するでっち上げのスパイ容疑でフーゴを検挙した。三カ月におよぶ拷問で自白を強要され、懲役五年の判決を受け、横浜刑務所に服役中、四五年六月、栄養失調で獄死した。父フランクの手で、軽井沢の外国人墓地に葬られた。

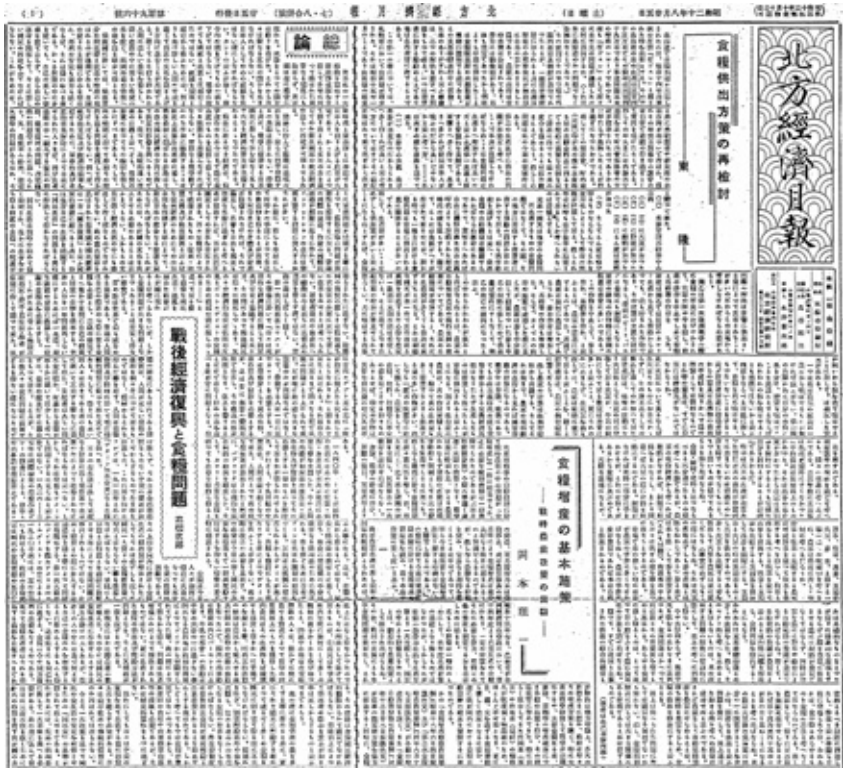
戦後、フランク一家は横浜に移り、アメリカのアーミー・スクールで教えたのち、四九年に渡米、サンフランシスコに住む。五四年、アメリカ市民権を得、中西部アーカンソー州リトルロックで教鞭をとる。七三年一〇月、サンフランシスコで死去した。

八月一五日の情景

戦局の最終段階は緑丘にもうかがえる。六月三〇日には、学徒隊が結成される。七月七日には、教導部や各課、図書館、経済研究所に対して、「重要書類ヲ防空壕ニ收容シ、防護上ヲ遺漏ナキヲ期スル」ため、書類の整理と搬出の手配が指示された（庶務係「通知綴」、一九四五年）。

『小樽地獄坂』には、当時二年生であった方々の八月一五日体験のアンケートが収録されている。幹部候補生として訓練中、本土決戦のための陣地構築中、樺太国境でソ連軍と交戦中、陸別で「援農」中、学校の寮で、自宅で静養中、入営の待機中など、さまざまな場所で、八月一五日の玉音放送を聞いた感慨もそれぞれであった。「無謀の戦いから解放されるのだという喜び」、「虚脱状態」、「くやしさと安堵と交錯した複雑な気持」、「何か世の中が変わって行くのだろうかという期待と不安」、「来るべきものが来たと思いつながらお先真暗の感じ」など。個人個人によりその感慨は異なるのは当然とはいえ、全般的には小樽高商の学生は、苦米地校長らから戦局のきびしさを知らされ、敗北をそれとなく暗示されていたため、敗戦を冷静に受け止めたといえよう。

八月一五日、小雨が止み、冷気ただようなか、校庭前に整列している教職員・学生の頭上のバルコニーのスピー



『北方経済月報』196, 1945. 8. 25

カーから、天皇の玉音放送が流れた。『北方経済月報』（『緑丘』改題紙）第一九六号（四五年八月二五日、実際の発行は九月半ばころ）は、「終戦の御聖断を拝すれば、万死も及ばざる罪責と痛恨に嗚咽せきあげて止まず」とその情景を描写するが、丸山泰男の次のような回想が実際だったといえよう（前掲「小樽回想」）。

何か今まで極度に張りつめていた緊張感というか重圧感から、一據に解放されたような虚脱状態となり、熱い涙がとめどもなく頬を流れた。お互いに余り多くを語ることもなく、半ば白けたような感じで解散した。地獄坂を降りてくると、人々の家の玄関口で、何ごともなかったかのように道ばたに七輪をもち出して、鯨を焼いている煙が

見えた。もうこれで今日からは、防空頭巾もゲートルも、燈火管制の黒い電灯カバーもいらなくなると思った。そして相も変わらぬ庶民の生活力の逞しさのようなものが感じられ、未来に向かって新しい希望のようなものが湧き上がってくる想いであった。

この放送が予告されると、苫米地は「ああ来る可き所へ来たな」と感じつつ、教職員には「最後軍政下戦陣に立つ覚悟せよ」と訓示しているが、それは「半ば白けたような感じ」であっただろう。校長らが「流涕やまず」（前掲「戦塵余録」、八月二五日）だったのに比べ、学生の大方は、それ以前に校長から「戦局は聞かされ」（似内明道、「国体護持の一線を守る」との意味は何かと聞いて」（辻内祐二、以上小樽経専昭和三年度卒業生「小樽地獄坂」所収）いたので、大きなシヨックはなかったという。

翌一六日、苫米地校長は全教職員・学生を集めて「悲愴切々二時間に及ぶ憂国」の熱弁をふるった。『北方経済月報』第一九六号によれば、「遠く明治維新に口を切つて、帝国の歩み来つた途を説き、道義地に墮した現状を深く抉つてこれが打開を学徒に求め、昭和維新を絶叫」した、という。苫米地の八月一七日の日記には、「心なき強がり共、国の為に身を思わず、身の為に国を動かした輩、狂気と思われる妄想を画^はりたる徒、それが国を過つたのだ」と記す。ある寮の副寮監は「今、雌伏して三十年四十年後に必ず仇を討つ覚悟が必要」と訓示するが、学生は白けるばかりだった（市川亮一、「小樽地獄坂」）。そして、授業が再開されても、しばらく軍事教練の時間はつづいていた。「配属将校である教官は小樽港が一望でき、左の隅に大樹が聳えている校庭に学生を集め、進駐軍の暴行に備えるための護身術と称しての教練をかけ声と共に反復練習させたのだった。配属将校は真剣そのものだった」（熊谷和秀、同前）。

学生の農園作業は一九日も続行され（二〇日は代休で休業）、二一日から「予定ノ通りノ授業」が実施された（通知綴、一九四五年）。

